

意識 焼けを探ねて五十年

へるふね

1. まえがき

「自叙伝を書く者は少し足りない」と言う。僕はどうせボンのクボの毛が三本足りないと言われたお芽出度い人間だから、すすめられるままに調子に乗って書いて見た。

扨て、愈々筆を執って見ると、平素不精で日記など書いたことがないので、真先に記憶の壁にぶつかった。おまけに大戦中北部軍司令部の嘱託となって、軍需資源の探査に走り廻って居た関係上、終戦の時、司令部の命で復命書と共に自分の手元に山積していた永年書き貯めた記録文書の類まで焼き捨てたという始末で、僅かに残ったものと覚束ない記憶を辿って書いたので、年月その他、ずれのある処も多いと思うが了承願いたい。

ちびた筆を持ち、遠い記憶を呼び起こしては書き綴ったので、事が前後したり、脱線したり、記録というよりは漫談に近い思い出の記となったことをおゆるし願う。

2. 生い立ちの巻

両親の談や過去帳に記された処によると、僕の先祖は彦根藩士今堀勘七の三男、丈右衛門と称したが、生来さむらい商売を好まず、藩の出入商人となり、屋号を浜屋と号したが、山師の先祖だけあって、大きな夢を抱いていたと見え、寛政十年に渡島国江差町に移住、店舗を構えて敦賀伏木の間屋と連携、米、味噌、雑貨の移入、海産物の移出を業とした。

二代目は余り振わず哀顔に傾いたが、三代目は商才にたけて頹勢を挽回し、第一、第二福寿丸という2隻の手船を所有するまでに発展した。

処で、江差という町は従来江差以北の海産物は必ず一旦枝幸港に集荷し、藩の検査を受け運上金（現金）を納めて、始めて移出を許される制度になって居たので、間屋は皆江差に集中していた。

為に、江差は海産物出廻り期ともなれば、是等海産物商、船員、漁業家等各地から集まってくる人々を相手に海浜一帯に臨時の浜小屋と称する一杯屋が建ち並び、弦歌さんざめき「江差の五月は江戸にもない」と囃されたもので、追分節の名文句も、此浜小屋の紅くん連と奥地の漁師や内地の船歌衆との間の綿々の情緒から生まれたものが多いと言う。処が明治維新の大改革で、此制度が撤廃されるのを知った三代目は、機を見るに敏というか、早速居を従来取引の多かった奥地の中心地小樽の塩谷村に移し相変わらずの盛業を続けた。

四代目（僕の父）は江差で生まれ、一人っ子の坊ちゃん育ちで、頗る付きのお人好、家業を継いだが性格的に商売は不向きの処へ、従来余りにも、のんびり育った為に、丁度温室の花が突然寒風吹きすさぶ眩野にさらされた様な格好で、海千山千の業者間にもまれる内に、忽ち大きな手違を生じ、手船も手離し、店も畳み、続いて起こった大火で丸焼けとなったのを契機に、永年の海産商を廃業し、漁場も整理して、千石場所一カ所だけ残し、のんびりした「鯨取りの親方」に治まった。

3. 少年時代の巻

僕は、明治20年11月29日、父が鯨取りに転向した年、忍路郡塩谷村の静かな漁

舎で四代目丈右衛門の三男坊として生れた。それで少年期を此の美しい風光に包まれた静かな海浜で育った。一生の運命に大きく影響すると言われる少年時代の環境を説明する為に、冗長ながら、其頃の漁村の原始的な状況を略記して見ることにした。

満六歳の春から、教科書を風呂敷包にして、斜めに背負い、腰にお握りをつけて、近所の友達と誘い合せて、小さい学校に通学した。家庭では、問屋時代の帳場さんだった髭のおじさんに、実語教・児童教を手はじめに、漢字の手ほどきを受けた。

早春三月になると、大勢の漁夫が集って忽ち賑やかになる。長い間、広い漁者に家族だけの淋しい日々を送ってきたあとだから、子供にとっては其うれしきは又格別であった。毎年来る顔なじみの誰彼に、代わるがわるだっこして、大きな炉端で色々のお伽談を聞いた頃のなつかしさは、今尚、美しい夢の様に心のすみに残って居る。(註・・・このあと鰯場の準備から網卸し、網起こし、沖揚げ、さかし鰯、メ粕の製造と詳しい説明があるが、又の機会に稿を改める事とし、今回は割愛する・・・)

斯くして漁期も終り、製品も仕上り、手仕舞になった六月始に「あごわかれ」と言うて、今日の言葉でいう送別会が催され、漁夫の労をねぎらって、一同思い思いに袂を分かって四散すると、急にヒッソリ閑とした静かな浜となる。ガラン洞になった漁舎の広い板敷の処で、近所の友達を集めて、よくチャンバラをやった。

鎮守の稲荷のお祭り、旧盆の盆踊りなど、ひなびた行事も思い出の種だ。夏になると、よく泳いで遊んだりウニや貝を焼いて食べた。尋常四年の頃、父が誰かにすすめられて、古平の稲倉石鉾山に關係して、山のおぢさんが時折きれいな炭満の石を持ってきた。子供心に真に珍しく、きれいな物と思った。爾來、変わった石があると拾ってはイジリ廻したもんだ。

こんな環境で四年を終った春から、小樽の親戚に預けられて高等科に入学した。塩谷には高等二年迄しかなかったので、僕を大学迄仕込む決意であった父は将来の進学の事を考えて、小樽へ出したのであった。

かくて愈々来年は中学進級という夢に余念のなかった処へ、遂に破産の窮極に追い込まれた両親が、塩谷を引払って、小樽の裏長屋に移り住む事になり、同時に僕もソコに引取られた。青天霹靂の此の事態、青春のアノ夢、コノ夢は一瞬にして吹き飛んで終わった。夢の花園から急転直下、索莫たる雪の眩野に投げ出されたような環境の急変は、多感な年頃の、特に感受性の強い僕には大きな衝撃であった。

父は平素口数の少ない方だが、一杯呑むと、忽ち雄弁になって、繰り言やら説教やら、よく次の様な事を聞かされた。

「わしの父は、小樽のIさんを見よ。彼はわしと同年だが、全く感心な男だ。アレは必ず大成するぞ。アノ人を見習いなさい。とよく説教されたもんだが、父の言葉の通り彼はメキメキ成功した。

同じ年の人間で、コンナに運命の差を生ずる原因は何か。根本的には、苦勞を知る者と知らぬ者の心構えの差だ。Iさんは余り楽でない家で育ったと聞いて居る。随て困苦欠乏に堪えられる様、心身共に鍛えられて居る。而も大志を抱いて風呂敷包一つで、敢然渡道した人だ。覚悟が違う。ソシテ全智全能を絞って貴い金を蓄積した。貴い金だから其運営も慎重だ。之が成功の基だ。

之に反し、わしは苦勞というものを知らずに暮らした。苦勞というものは外から説教さ

れても身につくものでない。其の為、人を疑う事を知らず、のんびりしている間に大きな穴を開けて終った。

この機に臨んで、お前達に注意しておきたい事は、此の世に生を享けたものは、大自然のあらゆる天恵と、先人の残したあらゆる恩恵によって生活させて貰うのだから、必ずその御礼を残さねばならない責任がある。ソレは此の世界を、より快適な世界にして、次代の人々に残す事だ。

其御礼の方法としては各々其長ずる処によって報ずればよい。例えば、農家ならば種子、耕作法の解良とか、新墾とか。漁師なら新漁田の開発とか、養殖、加工改良とか。鉱山師なら新山開発。科学者なら発明発見とか。その他、文筆、芸能、あらゆる面に無限に共道がある。

何れの道を選ぶも、お前の選択に任せるが、わしの見る処では、お前はわしに似て理財の器でないと思うから、わしが破産したからとて家運挽回を計るなどと云う世間並みなつまらぬ考は、絶対に起こして貰っては困る。云々。」

其頃まで哲学書や宗教書に読み耽っていた僕は、加藤咄堂師の講話を聴き、同師の著書を繙くに及んで、始めは父の繰言を「愚痴ばなし」位に思っていたのだが、心眼の開けた気持で其真意が判る様になった。

同時に心境が急に開けて別の世界に出たような爽やかな気持になった。ソコで心機一転、真剣に将来心魂を打込むべき仕事の物色に没頭した。

さて、色々と考えを廻らした末、結局基礎産業の開発こそ理想的だが、是又、何れを見ても莫大な資金を要するものばかりで、徒手空拳では迎も歯が立たないが、鉱山開発はどうか。開発するとせば大資本を要するが、発見だけなら米五升と何がしかの小遣銭と暇をつくれれば出来る。発見の後、誰でも力のある人に任せれば喜んでやって呉れる。是ある哉。・・・

兎角する内に小学校を卒業した。其頃から一家北見移住の話が持ち上り愈々八月中旬出発と決まった。待望の産金地に行けると決まって欣喜雀躍、先以て探鉱の予備知識を得べく、伝を求めて湯内鉱山、後志（ゴシ）金山、轟鉱山等を見学、探鉱法や分析法、簡単なテストなど一通り教えて貰い、貴重な資料を豊富に採集して帰樽。

早速教えられた探鉱用具、テスト試薬、紋別郡全域の五万分図を買い整えて愈々北見紋別に移住。ここで山師の第一歩が始まった。時に明治38年8月。一まず、独立して町端れに雑貨の小店を開く事になった。

4. 見習鉱山師の巻

小樽から紋別に移った年（明治38年）の暮に一杵夫が「八十土砂金山」を発見し、之が権利争奪に、又密採にと、札幌と現地とで厳冬吹雪を冒しての猛烈な攻防戦は随所に珍談百出、密林の幽邃境に時ならぬ狂躁曲が奏でられた。之に刺戟されて、此地方の砂金に心得のある者は、ソレと斗り何れも一攫千金の夢を追って山野を跋涉した。

当時僕の主人格であったT商店は先年枝幸の砂金全盛時代、砂金山相手の商売で産を為した人で、紋別でも砂金の買入を兼営していた処へ、6月末無名の砂金堀が200匁の砂金を売りに来た。勿論、出所は秘して語らないが、彼の顔見知りのMの推測でおよその見当が付いた。ソレと斗り主人の了解を得て、意気投合の同志一行7名で探検隊

を組織、米嚮道具一切各自6、7貫の荷を背負って7月中旬の未明に紋別を出発した。

渚滑37線から先は人家がなく、区画測量の刈払い跡を辿って漸く57線に到着、それからは滝の上迄1里余り、兩岸懸崖迫り「函」を形成す。岩肌を這っては登り、辻っては降りること幾10回、難行苦行の末、日は西山に傾く頃、辛うじて滝にたどり着く。此処に鱒獲りのアイヌ小屋があり、3人のチャチャが滞在していたので、渡りに舟と泊めて貰うことにする。

僕らも早速タモ網を借りて鱒5尾を獲り夕食の膳をにぎわす。夜中物凄く野鼠跳梁、足を咬まれるもの、耳を齧られるものあり、おまけにノミが騒ぐ始末で眠りも安からず大閉口。翌朝はフラフラの態で出発、昼過ぎ目的地「エダマサツクル」川右支流に到着した。

案の条、川岸に砂金小屋を掛けた跡あり、其の前方に石英の脈石の大小奇形のを多数集めて庭石の様に飾り立て、傍らに木を削り「木材チョーク」で楽書きした立札がある。「金掘り目的で此の川に来たものは、必ずガッカリするぞ・・・それよりも、しゃくなげの花でも眺めて焼酎でも呑んで風流を楽しむべし云々・・・」

僕等はこの立札を横眼に睨み乍ら小屋掛けにかかる。其間自分は、石英の出所を考えて附近の斜面を調べて見た。有る。有る！川の左斜面に小形の石英が2、3キラキラと輝いている。早速多少赤焼けのある分を砕いて洗って見た。勿論、乳鉢などは重いので持って行っていない。轟鉦山で聞いた方法を実行して見た。即ち表面の平らな石の上に試料を置き、白樺の皮で、手頃な曲げ物の胴の様な輪を造り、之で試料を囲んで散逸を防ぎ乍ら、輪の中でハンマーをたたいて試料を砕く。之を洗うと細かい金2、3粒が出た。しめ、しめ！先ず初陣の成功！明日からの活躍を胸に抱いて前夜の不眠を取り戻すべし一同早目に眠りにつく。

翌朝は炊事係1人を残し、斜面班と川筋班の二手に分れて愈々本探鉦を開始する。僕は斜面探鉦を志願、左岸の川沿いの急斜面を通過して上に出ると、地形少々緩慢となり、ポツポツ転石が見える。之を追うて行く内に、風倒木の根元の赤土に、石英の細粉を交えた土鉦を発見した。笹を刈って、走向に5間ばかり続いて居る事を確かめ、試料を採取して宿舎に帰り、淘汰を試みた処が約4～50瓦の金が含まれていた。・・・

やがて川筋探鉦の一行も帰って来たが、「川筋には随処に堀り跡あり、新地10カ所を掘って見たが、概して貧弱、米代ドッコイドッコイと云う程度、金質は買入金と同質だから、多分、局部的溜りを掘り当てたものと推定され、川筋に対しては、之以上滞在の要なし」という結論が出た。

ソコで山の赤ふけ土鉦を見せた処、一同雀躍して喜び、早速夜業で籠や箆を造って、翌朝から全員で土砂鉦流しを始めた。処が良鉦部が甚だ浅く、4日目には急激に品位低下して問題とならず、結局4日間で8匁7分の実績、米嚮も限度に近くなったので、切り揚げに決し、同じ行程を辿って下山した。

(附記)此山は大正10年頃、岩内町の1医師により天命金山と命名されて探鉦され、其後、日本産金により滝の上金山と呼ばれたものであるが、天命金山の由来に「一夜山神枕頭に現われ、巖そかに告げて曰く、今此の宝を汝に授く、開いて大いに巨利を揚げ、之を以て満州に渡り、彼の土を治め、王となりて善政を布くべし、と命ぜられて夢さむ」と。医師の妻君、側にありて曰く「ソレでは私は差向き皇后様と云う訳ですわねー」と、・・・

此の夫に此の妻あり、実に愉快的な好人物であった。

5. 上渚滑金山探鉱の巻

「エダマサツクル」の帰途、渚滑の36線渡船場で34線沢に砂金があると云う噂を聞いて、一同相談の上、見に行く事にした。沢の出口の農家に荷物を預けて、一同34線沢本流を処々調べながら遡る。取っ付きの左にさした大きい支流に砂金が相当あるが、本流筋では、此支流の出会いから上流には少ない。此の日は時間が無くて農家に一泊。翌早朝左沢を調べる。砂金は余り厚い方ではないが便利がよいから、ドウカこうか間に合う程度と見たが、当時我々の夢は「八十士」の1バケツの砂に5匁を見た頭で歩いているので食指が動かない。金粒から見て山金らしいので、序に斜面の焼けの多い様な土を洗って見る。2~3カ所斗り5~6瓦の含金を認めたが、川を見ても一向に確たる鉱石の転びが見当らず、金質も「木の歯金」で危険と見たので早々打切って下山帰紋した其の後、此の山は数人の手を経て、昭和9年には約1千屯余り鴻の舞に売鉱された事もあったが、一向振わずに終わった。一風変わった鉱床で、仲々結論が掴めない。尚一段の徹底探鉱を試みる必要があると思われる。

6. 興部村ルロチ川上流探鉱の巻

興部村某氏からの情報により、41年夏ルロチ川一帯の探鉱を思い立ち、約1カ月余り入山探鉱した。初めは仲間と一緒に行く予定だったが、都合が悪く、1人で行くことになったので、初めて轟鉱山で熊取りに聞いた、ふきの葉の丸小屋を実験して見た。即ち、熊笹の茎とふきの葉で、1人が漸く座れる位の大きさの小屋をふいて夜を明かすのである。

「足曳きの山ふきの葉の丸小屋に ながながし夜を独りかもねん」

(柿本人暦替歌)

何しろ自分1人の頭で探検したのは、之がはじめてなので、慎重に考えながら実行した。随って、意外に暇がかかった。先づ最初、目標の範囲を軽く調べて一巡し、金気のある範囲をきめ、次に、その金気のある地区をこまかく調べた。其結果、右沢右岸と中の沢水源の三角山の2カ所に土砂金を発見したが、何れも感心したものではなかった。此の2地点は其後入れ替り立替り色々な人によって、権利を取ったり捨てたりされて、今日に及んでいるが、まだ徹底した探鉱を試みた人はない。右沢の土砂鉱は昭和11年頃から、自分でニタ夏砂金を試みたが実費の3分の1も取れず断念した事があり、三角山の方も昭和20年頃、現鉱主の高橋氏が熱心に探鉱の結果、遂に土砂鉱の本体と認められる鉱床を発見されたが、発展を見ずに終わっている。花崗岩中の、かなり大きな鉱床らしいが、鉱体及び品位に変化が多く、尚一段の徹底した探鉱が望まれる。

7. 幌内へ転出の巻

斯くして、鉱山師が本職になりかけた明治42年の春、T商店の幌内支店の運営を委嘱されたので、紋別の自店は母と弟に任せ、独りで幌内に転出した。然し、新年早々で、店務に忙殺され、残念ながら探鉱に出る暇がない。ソコで、此の間に情報を収集せんものの一策を考え「石喰い砂金高価買入」と宣伝し砂金堀に呼びかけた。

幌内支店には牧場があって、常時30頭内外の馬を飼育して居た。当時此の地方では、夏冬共、馬が唯一の交通機関であったので、是非とも熟練の要があり盛んに乗馬の稽古をした。

翌43年から乗馬で用商近在廻りの序でに、時間をさいては、近村の地質など一と廻り調べて歩いた。結果は、フーレップ、オトシベ、共に良質の砂金があるが含量低く、海岸はフーレップから音標まで、イリヂウム1割を伴う浜砂金があるが之もあまり濃厚でない。何れも古生層地帯で金鉱は見込がない。幌内川も下幌内から上流は、古生層斗り。結局、雄武川オトイネップ川流域が石英粗面岩地帯で有望地域と断定。此の2地区に注意を集中することに決める。

この年の晩秋、幌内川の上流に砂金山が発見された。この地点は、幌内から登るには、地形が非常に険阻で、容易に入山する者がなかったが、美深町ニウブ川からは案外楽な関係上、ニウブ川の砂金堀によって発見されたが、当時仲間の1人が幌内に出てこの事を洩らした為、大さわぎとなり、早速、幌内同志を代表して出札、25万坪の砂金鉱区を出願した。処が他の仲間は名寄に帰り同町のU氏に出願させた。結果はU氏が流域先願、自分は堤防地先願となり、当然両者合併して円満操業の予定であったが、茲に、端なくもトンダ邪魔が入った。・・・

当時、下川にXと云うボスが居て、翌44年の早春乾兎を大勢登山させ、両鉱主から一手に引受けたと称し、噂を聞いて四方から蟻集した数百人の砂金堀から税金（入場料）を取り立て、違反する者には物凄い半死半生のリンチを加えた。その為、局外者はもとより、名寄組も幌内組も折角登山して、他所者の掘るのを傍観も出来ず、結局掘らねば損だから彼の言うが儘にして採金した。U氏は遂に請願巡査まで登山させたが、巡査も命あっての物種と斗りボスの為すがままに黙認する始末で、結局両鉱主は飾り物となり、一時は千人近く入山し忽ちにして目星しい処を掘り尽し、空山になって、ボスも採金者も四散してから、鉱主の掘かすの跡片付けをやらされ丈で全くの失費に終わった。この時からU氏と懇意になったが、同氏の後の藤田鉱業の囑託になった熱心且つ誠に好人物で大いに肝胆相照らす間柄となった。

8. サンプル大露頭探検の巻

この年の晩秋、砂金山を廻っての帰途、上幌内のY老を尋ねた処が、予て同氏に探検の一助にもと与えて置いた石英の見本を、或る砂金堀に見せた処「これと同じ白い石が大きな崖になって出ている処がある」と言うので、場所も順路も聞いて置いた。早速見に行こうと言うので、その儘、幌内の店に帰らず、Y老の処に一泊して野営準備を整え出発した。Y老は岩手県の子育ちで頗る山歩きの名人であった。幸いの秋晴に恵まれ幸先よしと、先ず17線の小沢から「サンプルシベ」水源に山越えした。この山越えは国境とも覚えぬ至って楽なコースで夕刻に目的地大久保の沢に入り、薄暮この川の中流右岸に突兀として峙え立つ大露頭に達した。

取敢ず、ハンマーを振って見たが、馬鹿でっかいが径数尺に及ぶ岩塊を夥しく介在する不毛石英が大部分で稍々がっかりした。兎に角日暮れでもあり精査は明朝にして、大急ぎで野営準備にかかった。最早草が枯れて仕舞っているのだから笹葉でやったが、時間がかかるので、ざっとやって寝転んだ。処が夜中に物凄い暴風雨となり、屋根を吹き飛ば

され、全身ぐしょ濡れになり、宵に一寸まどろんだきりで殆ど眠らず、朝には曇となり震え上がった。この上、雪にでもなったら大変と、朝一寸見直しただけで惴惴として帰途についた。之が後年S女によって試掘設定され、三井サンルとなった山である。

「秋風にかりねの小屋のとまをはがれ 我衣手は雨にぬれつつ」

(天智天皇替歌)

9. 義兄に説教され造材屋となるの巻

サンルから帰った時、折悪しく紋別の本店主が来幌中で、忽ち説教一席。

「お前は山が好きだと言うが、好きの道は楽しみである。道を楽しむと書いて道楽と読む。道楽は必ず金を出して楽しみを買うものだ。芝居には木戸銭が要る。芸者買いには線香代が要る。道楽で儲けようなんて、とんでもない見当違いだ。悪遊びでないからヤメロとは言わぬが、わしは木戸銭は払わんぞ」と。

実に振った説教だ、父からは「金を儲けるな」と説教され、今また、義兄からこの説教だ。僕には愈々金儲けは禁物と見える。

ソコで道楽の元手、木戸銭を別途収入で稼ぎ出す事を考えて、この時から木材屋の仲間入りをして木材、山林などの仲立ちを始めた。店の営業外の仕事であり別段資本も要らず、顔を利かせる丈けで結構収入になるから、コンナ格好な仕事はないと考えて、取敢ず日頃頼まれていたフーレップの山林を知合いの木材屋に世話してスルスルときまった。一度その道に顔を出した処が、何しろ店の顔が古いので、それが物を言うたのか、次から次と話を持込まれ、序でに造材も引受けて見て呉れと言う希望の向きも出て、遂につり込まれて造材事業に迄手を染める事になり、爾来大正4年の春まで之を続けた。為めにこの間の木戸銭に不自由はしなかった。殊にこの仕事のもう一つの特徴は、殆ど冬場の仕事ばかりで、探検時期には支障がなかった事であった。

この年の冬山造材の時、紋別のO氏に馬搬の一部を手伝って貰った。そのO氏が春先一旦帰紋して間もなく折返して来遊、「乙忠部に物凄く有望な砂金のある処を聞いたから同行しよう」と言う。早速同行する。乗馬で出たが枝幸郡に進むに従い残雪多く、馬の脚がヌカッチ困難、オタルペンの懇意な牧場に馬を預けてテクで行く。

乙忠部に一泊、翌朝かんじきを穿いて登山、目的地「オレントラップ」沢に入る。この辺はまだ一面の雪だったが時期が時期だけにドンドン解ける最中で、下部は地面の方から盛んに解けて空洞になっていたのに加えて、3年前の山火跡で寂木多く、為に一足毎に首迄ヌカる始末に全く閉口し、小枝を曲げて速席かんじきを造り、之を手にはめ四つ這いとなって歩いた。その姿は他所から見れば噴飯物だが、御当人達にとっては正に難行苦行。

数箇処試験掘りして見たが一向に金の影も見えない。附近に花崗岩があるので金色の雲母が大小無数キラキラ水中で光って居るので素人が之を誤認したものらしいと結論。汗びっしょりになって帰宿した時は、アテ外れの落胆と共にクタクタに疲れて終わった。

「君がため春の野に出てこがね掘る 我衣手に雪はふりつつ」

(光孝天皇替歌)

10. 郵便局長熊退治の巻

ある年、市街地の川向いにある店の牧場で馬が1頭大熊に取られた事がある。そこで、喰いかけの馬の死骸を囚にしてその俣現場に置き、腕に自信の附近のハンター連が、之を遠巻きに陣取って熊の再来を待期した。処がその夜は遂に現われず、鶏鳴曉を告ぐる頃になって、愈々現われたので一斉に火蓋を切った。・・・

驚いた熊公、多少手負の俣、夢中で川を渡って市街地の裏山に逃げ込んだ。当時の郵便局長も日頃の腕を試さんものと、天晴れ名ハンター振りの武装に身を固め、自宅で待期中、曉闇を衝いて響き渡る銃声に「さては南無三おくれたか」と銃をひっさげ川向いへ一目散に駆けつける途中、市街裏の神社付近で、夢中で逃げて来る大熊とバツタリ正面衝突。・・・手負いに狂った大熊は必至の形相物凄く、「ウオ〜ッ」と斗り立ち上がった。・・・

不意を衝かれて局長はビックリ仰天、ハンター振りもどこえやら、銃を抱えた俣腰が抜けて、思わずその処へ「ヘナヘナ」と座ってしまった。途端に無意識の裡に引金が曳かれて、ズドンと一発、物の見事に熊の眼玉に命中、脳天を貫通して、さすがの大熊も「ウオーッ」と一声断末魔の声を残して、ドサリと倒れた。

不意の銃声に市街の者達が駆けつけて見ると、熊をにらんだ俣腰が立たず声も言葉も為さぬ局長の姿に、やがて、みんなで抱き起して自宅へ連れ帰った。爾来、局長は来客毎に、件の大熊の皮の敷物にドッカと座って、熊退治武勇伝を一席、さて、咳一咳して曰く「熊を取るには、あわててはあかん、先ず気を静め、心を臍下丹田に落ち付けて、折敷の構えで眼玉をねらうに限るんじゃ」と・・・

11. 北隆金山の巻

前述した「石喰い砂金高価買入」の宣伝は見事効を奏し引き続き大小様々の情報がキャッチ出来たが、之もその1つの物語。

明治45年の9月頃、砂金堀のK老が石喰砂金三十匁余りを売りに来る。例の通り特価に買上げ酒肴を供して情報を聞く。(此の砂金の中に一粒で11匁5分と云う石喰いあり、石英の中央に2分幅の金モール様の海綿状金を有する筋あり) K老には謝礼をして本人は無税採取させる条件付きで個処を訊き、出札の上取取らず砂鉱を出願、直ちに部下を入山させ石喰い砂金の足取りを追求させる。此年は既に時期遅く第一第二支流の追及で終った。両支流とも砂金はあるが、少量かつ石喰なし。

翌年夏探鉱再開。第三支流は砂金稍多きも石喰なし。本流を遡るに従って石英の転石をボツボツ発見、砂金は厚くないが石喰多し。之を追求しつつ、後の北隆金山の沢の出口に小屋を移して探鉱を続ける。良質の転石が続々発見されたが遂に露頭を見るに至らず。略々根源地の見通しも付いたので、一応探鉱を切り上げ後日の出願に備えた。

当時、此地方では誰も金鉱など着眼する者がなかったので、脉を押えてから出願するつもりで呑気にかまえていたが、大正5年の春、鴻之舞の開発に刺激されて、全道的に金鉱熱が起った時、北隆のことが気が気でなくなったが、自分は鴻之舞に没頭手離せぬので、紋別のI氏に事情を打明け、後述の「雄武威」と共に共同名義で出願させた。然るにI氏も多忙な人で、折悪しく同氏の留守中に修正命令があったのを、留守の者が不注意で失念、時遅れて発見したが其時既に北隆は次願者瀬川良作氏に、雄武威は2願者橘光桜氏に許可されていた。

其後、大正8年、余りにも大きな話が流布されて居たので、1日瀬川氏宅を訪ねた処が、山の様に沢山の試料を持ち込んで居るので、1通り見せて貰ったが、驚いた事に、只の1個も本物の鉱石が無くて、悉く石英粗面岩に細かい硫化鉄の混入した母岩斗り、面もとうとうと、世界的大鉱床だと凄い気焔である。

聊か気の毒になって、同氏を僕の私宅に伴い、先年同山から採取した銀黒縞状の転石を見せ、次に、顕微鏡下で椀掛で得た金粒と母岩から出た硫化鉄とを見せて、其識別方を説明した処が、彼も少々理解したらしく、「実は資金詰りで困っているから、是非山を見て指導すると同時に資金を出して呉れ」と言う。早速同氏と共に現地を一周、多数の優良転石を発見し、開坑の位置等をも指示した。

当時、同氏は既に雄武市街の商店からは締め出され、山許では米噌も買えず、鉱夫に「カボチャ飯」の鍋を突きつけられて強談判を受けるという状態に、見るに見かねて若干の金を手交して急場をしのがせた。其後、色々の人が介入し、幾多の曲折を経て、結局久原鉱業の手に移ったが、絶えて同氏と会う機会を失って今日に至っている。

12. 入植団体の面倒を見るの巻

幌内在住中、同地原野に入った入植団体が3組あった。1と組は、立木目的の策士の奸計によるもので、有名無実の書類で予定存置の許可を取り、杣夫を移民と称して入地させ、伐木後雲散霧消した。次は、岩手県の25戸団体、之れは真面目な入植者だが、土地の肥えている割に立木に良材がない。資金を得るメドもなく食料に困り、初年度はフキ、ワラビなどで飢えを凌いだが、其の前途を悲観して日雇取りで旅費を造り大部分が帰郷した。最後の1組宮城県団体18戸は、是は赤、甚だしい不用意組で、風呂敷包みに草履穿きと言う徹底振りだった。

処で当時の移民は、道当局では単に未開地を貸与するだけで一切自力で開墾させ、起業方法通り開墾しない場合は貸付地を取り上げる事になっていた。其の間は勿論貸付地だから所有権は無い、随って担保には出来ない。

無財産で責任だけ負わされている訳だ。ソナナ不安な者に誰も1握りの米も貸す者はない。資力の無い入植者は死にに來た様なものだ。ソモソモ不用意で來るのも悪いが、例え、将来自分の財産になるとは言いながら、国富増進の為苦難と闘って開拓の聖業に挺身せんとする者に対し、今少し何とかされんものかと義憤を感じて、成功する迄の米噌金品を支給してやることにした。

一応の契約書を作り形式は整えたが、登記の出来ないものでは担保にならぬと本店からさんざん反対され、結局万一の場合は自分が弁償する事とし、出入の造材屋さんに保証人になって貰って不承不性承認させ、初一念を貫徹、美事起業方法通り成功させ、更に、団長の希望を容れて、北見で最初の澱粉工場を造ってやった。原料芋の運搬、洗浄、供給迄水流を利用した変わった設計で、時の支庁吏員も管内巡回の際態々立寄って工場を視察した程であった。

然し、成功はしたものの、資金が工場や耕馬、農機具等に固定したので、其の俵では担保流れになる成行だったので、自分の別途事業（木材関係）で資金のヤリクリを付け、随時、店の方に内払いし、最後に残額全部立替払いして預け入れた書類を田中商店から取戻して団長に手交自分の立替に対しては一切債権を棒引とした。

元々、道開拓の後援が目的で、是迄の七面倒な書類は本店に対する形式に過ぎないので、其の取引が完了したのだから自分としては、目的を達成した満足感以外何物もない訳だ。実にすがすがしい会心の取引であった。

1 3. 幌内支店退店の巻

大正3年4年は木材関係多事多端の年で、3年は、春水の適期を逸して流送停滞の為、費用が嵩んで利益皆無となり、4年には、春早く回漕した積取船が時ならぬ流氷に阻まれて接岸出来ず、5日目に辛じて一旦逃避、其の後豪雨出水で網場切断、木材沖合に流出、回収に狂奔中2回目が入港、流出の為石数半減、滞船のチャーター料及減石の空積運賃、其の他何々と一遍にカタキを取られた。其の為此の春限り田中支店を辞し、整理に没頭し、幌内小樽間を往復、8月以降は殆ど小樽滞在で日々を送った。

1 4. 鴻之舞鉱山発見由来記

イ、まえがき

有名な山になると、兎角発見者、開発者が沢山出て来るものだ。為めにする処あって自己宣伝する頭の良い山師と、物欲だけではあきたらず名誉欲も欲しがる欲の亡者共とで、でっち上げるらしい。困ったもんだ。

然し乍ら見方によっては、発見者が沢山あるのも当然と言う事にもなる。当時、下藻別の原野に早くから農牧を営んでいた鳴沢弥十郎氏は、八十士砂金熱にあおられて遠く枝幸郡の浜砂金に手を染めて居た。其の息、弥吉君は狩猟道楽で、暇さえあれば愛銃を肩にして山野を遊獵していた。特に当時鴻之舞付近は人跡絶えた深山幽谷で、狐狸熊の巣窟であり、彼の好む好獵域であった。

彼は何日でも野営して獲物を追い、くまなく跋涉していたので、此附近の一木一石も掌を指す様に知悉し、随って鴻之舞の各露頭も能へ知っていた。此の意味で同君は第一番の発見者である。只惜しむらくは、金鉱に対して当時は全然知識がなかったので、徒らに雲烟嗅過眼視して居った。

又、八十士砂金で一時成金になった福原浅吉氏は上藻別原野の未開地に福原農場を興して農地開発に手を染めて居り、紋別の木材業飯田嘉吉氏（後の鴻之舞組合代表者）は此の地で毎年造材を行って居り、又、紋別の一流商店主岩倉氏（後の出資加盟者）は藻別滝の下に牧場を営んで居り、当時の村長池沢亨氏（後の組合員）は岩倉牧場の附近に山林を所有していた。此の人々が、アノ河の中の夥しい転石を見ない筈は無い。いやいや、イヤと言う程見ている筈だ！！

元より誰が発見者であろうと、悠久なる天地にとっては蚤の尻程のちいさい問題で論ずるに足りない。ソレで苦々しい声が時折耳に入った事もあるが、馬耳東風をきめ込んで居た。然し、茲に山の由来記を書くとなると、事実をまげる訳にも行かないから厭々乍ら、ありのままを書いておく。

ロ. 発見の動機

扨て発見者の一人羽柴義鎌氏は栃木県出身で、当時紋別で新聞の地方探訪記者をやり、傍ら、器用な人で印判業を兼営していた。職業柄村の有志と交際多く、稚気満々の無邪気

な人だが、酒を呑むと悲憤慷慨、天下の形勢を論じ大言壮語をやるので、堅実一方の商人達には余り好まれなかったが、人柄は至って単純で有力者連中には大いに重宝がられた。

同じく発見者の1人沖野永蔵氏は加賀金沢在の出身で紋別に移住後、ホタテ、ホッキ其他の小規模漁業と冬期の馬搬受負を業として居た勤勉な人で、僕の店の得意先であった八十土砂金山が密採盛んの頃、当時密採者は多く夜間潜入して筵などで囲って光線をふせぎ乍ら、カンテラの光で仕事して、含金原砂を吠に詰めて一目散に逃げるという方法をとっていた。

1吠に金20匁は有ったと聞いている。沖野氏も1日見学がてら入山した処が、附近一面に油のキラキラが浮いていた。コレハ一大事、石油鉍発見と一とさわぎしたが、結局密採者のカンテラの転覆が原因とわかって幕・・・と言う笑話の主である。同氏は八十土以来砂金狂となり、家業の余暇を見ては砂金探検に、よく山を歩いた。

さて、鴻之舞発見の濫觴は明治43年夏僕の本ベツ川一瞥に依って勧告を受けた沖野氏が大正3年に6線沢で石英露頭（後の山王金山）を発見したのに始まる。

話は遡って明治42年紋別から幌内へ転出した折、前にも書いた「石喰砂金高価買入」の看板に誘われて、石喰砂金を持参した採金夫の1人が差出したものは、著しい石喰いでルーペ（虫眼鏡）で見るに、銀黒らしい黒点のある石を抱いた大粒のもので、出所はモベツ川上流だと言う。

石引なしの匁5円で買上げて、座敷に招じ、1杯御馳走して四方やまの状況を聞き、用意の金鉍見本を見せると「之と似た石なら川の中に沢山あった」と言う。「この石喰いは大黒様に似て居るので、只の様に買われるのが惜しくて保存して置いた。こんな値で買って呉れるのなら、今度大いに頑張って持って来る」と上機嫌で帰って行った。

其の後、この石喰いの出所モベツ川の流石の模様を一瞥したく機会をねらっていたが、翌43年7月本店へ打合せに出紋の際、漸く1日丈けの暇をつくり、早暁握り飯を腰にしてモベツ原野を上り、滝の稍々下流で川岸に出て、石英転石の余りに多いので一驚、思わず興に乗って時間のたつのも忘れ、6線近く迄追及したが日足の傾きかけたのに驚き、心残して引返し帰紋した。翌朝、同好の士、沖野氏に此の事を話し、機を見て6線より更に上流を追求すべき事を勧告して帰店したのだった。

沖野氏は僕の言に従って、6線沢に踏み入り、遂に前述の石英露頭を発見したのだが、此の金鉍は6線沢入口から約1軒入った処に在り、当時、沖野氏は紋別の旅館主、木脇氏等6名で出願していた。其の後、僕が商用で紋別に出た時、沖野氏は早速、件の見本を携えて来宅した。

見本は一見した処、余り香しからぬ石なので、余り金を掛けない様注意して置いたが、結局品位上らず、鴻之舞発見と同時に、登録せずに放棄したと言う。其跡を池沢氏が単独で再出願して山王金山の山名で探鉍に努め後、住友に売山した。

ハ. 元山鉍区の出願

翌大正4年の春、沖野氏はモベツ川上流に有望砂金山ありと聞込み、取敢えず不見転で、羽柴氏と共同で砂鉍区を出願した。其の後、本業多忙の為実査しかねて居る内に、秋になって、此の砂金の噂がやかましくなった。

当時、此の地域の出願は、拓殖の5万分図に依る外なかったが、奥地の地形は著しく相

違して、度々臨検の結果取消される事があったので、愈々有望となれば競願も出来、臨検も避けられない事になる恐れがあるので、実況も調べ、地形も略測して臨検に備えた。登山実査する事になった。此の頃、丁度僕も紋別に帰宅して居たので、沖野氏との予ねての約束通り同行する事になった。

1月23日未明、沖野、羽柴両氏の外に人夫2名を連れて勇躍出発した。幸いの小春日和に恵まれて薄暮目的地に到着、野営準備を整え、第2の八十士の夢を添乳に、野営の第1夜を明した。翌朝、測量などは後廻しにして第1番の試験堀のカッチャを振ったが、案に相違して甚だ不良。

続いて3日間、各枝沢迄夢中で試験堀りを続けたが、含金頗る微量。以外の不成績に、テッキリかつがれたと判って一同呆然。但し、本流河中の夥しい石英の転石に3名は互に眼をみはり、人夫の手前はガッカリ顔を装いながら内心は頗る満悦の陶醉境に浸りつつ、何とかして本源の手蔓を握って帰りたいものと務めたが、27日から生憎の荒天となり、28日は朝来の曇が昼から本雪となり、翌朝は空は晴れたが、積雪1尺の銀世界と化したので、愈々探検をあきらめて帰途についた。

「朝ぼらけ白がねの世と見るまでに モベツの里に降れる白雪」

(坂上是則替歌)

其の途中で、沖野、羽柴両氏は共に本流右岸に沿って渡渉して居たが、大曲から2百50米下流の右岸に石英のピリが7、8本現れた処を発見、コレこそ金鉱の蔓だと雀躍して試料を採り、折柄のちぎれる様な冷たさも忘れ帰村の途を急いだ。

一方、僕は、登山の時、左岸の小沢の出口に、大型転石の堆積した処をチラと見ておいたので、帰途に今一度見直しておく目的で左岸に沿って下った。直ぐ近くに大きな露頭があるらしい夥しい大転石の累積であったが、ドウモ石質は余り良くない様に見えた。大分下ってから両氏に追付いて、両氏発見のピリの石を見せて貰ったが、之は銀黒こそ見えないが良質であった。もっとも、川の中の転石には銀黒を伴う良鉱が沢山あった。

帰村途次、小憩の時、沖野氏から出願についての意見を求められたので、自分の考えの俚次の様に答えておいた。即ち、「転石のある範囲が余り広過ぎて、本物が何処に居るか、まだ見当がつかないから、願うとせば恐らく20鉱区も願わねばなるまい。ピリの石も、僕のとった石も、とてもアノ品だけでは願う勇気が出ない。下手に1鉱区や2鉱区願っても、悪くすると、他の野心家に知らせる様なもので、大漁を逸して雑魚を掴む様な事にもなりかねない。ソレよりも互に自重して一切口外せず。堅雪に今一度山をよく見て、本体の見当が付いてからで遅くない」と自重論を一席述べた。

帰紋したら、小樽から僕の処へ電信が来て居たので、椀掛けの暇もなく、其の俚サンプルを持って出樽、小樽で知合いの技師に分析を依頼した処が、沖野、羽柴両氏発見のピリは金3瓦、僕の採ったものは金痕跡、川中の転石は金37瓦、銀300瓦という成績であった。一方、紋別では、羽柴氏がしきりに沖野氏に至急出願をすすめ、沖野氏が出願費用を出し、羽柴氏が徹夜で製図して、両氏連名でモベツ川右岸1鉱区を出願した。之が後の元山鉱区北見試掘第307号である。

後日、沖野氏の打開け話によると、僕が田中の親類である事を羽柴氏が非常に気にして、田中は有力者であるから、今堀とは如何に性格が違って、ソコは親戚だから、万一田中に話して大綱をかけられたら大変だ。というのが出願を急いだ原因だと言うこと

であった。

ニ. 元山大露頭の発見

翌大正5年の正月、既に積雪期に入り探鉱不能の季節となったので、沖野氏は前に述べたモベツ原野の名ハンター鳴沢氏に着眼し、1日小宴を設けて鳴沢氏を招じ、此地域の地理露岩などの模様を尋ねた。

鳴沢氏は微酔機嫌で狩猟の際自分の露営所にあてた洞窟が、白っぽい岩で、類似の岩が途中の尾根にも出て居る事を語り、地理順路などを具に説明した。(洞窟のある大石英露頭は住友小池氏の時開発された狐鉱露頭で、開発当時、僕も見たが、鳴沢氏の焚火によって洞窟の内部が黒く煤けて居た)

之に力を得た沖野氏は、2月中旬冬支度に身を固め、カンジキを穿ち、寒風を衝き5尺に余る積雪を踏んで、一路目的地に向って邁進した。雪質は未だ堅雪には早く、屢々雪中に半身を没しつつ、寒中ながら一步に一喘ぎ、流汗淋漓、辛じて元山沢を登りつめ、鳴沢氏の言う処の山頂に達した。

偶々、其前年此辺を見舞った山火事の為に、頂上付近一帯の密林は悉く焼き払われて見透しよく、且つ風通しもよい為、雪中ながら幸いにも、岩角の一端が露出して居た。疲れも忘れて近づいて見れば将に年来夢に迄描いた石英の大露頭であった。

尚、雪を払って凝視すれば奥床しい銀黒の縞が見える。而も続いて数10米先きに第2露頭の一角も発見された。沖野氏は歓喜に手の舞足の踏む処を知らず、先ずリュックをおろしてハンマーを取り出し試料採取を始めた。鉄槌一閃、千古の夢を破る槌音高く青空に冴え、憂然として幽谷に飮まし、茲に始めて悠遠の眠りから醒めた大鴻は、雄々しく羽ばたいて、天下雄飛の第一声を挙げたのである。

ホ. 沖野・今堀許可運動のこと

雪中に待望の大露頭を発見した沖野氏は、重さもものかわと斗り、多量の試料を採取し、寒さも疲れも忘れ果て、恋の叶った処女の如く、心そわそわ気もそぞろ、足の運びもいと軽やかに、紋別さしてイソイソと、かわたれ時に辿り着き、今か今かと待ちわびる羽柴氏の家を訪れるや、手を取り合って互いの幸運を祝福し、思わず万歳を三唱した。

沖野氏は羽柴氏と相談の上、此試料を密柑函壱個に収め、之と出願関係書類を携えて、小樽に滞在中の僕を尋ねて出樽した。(其晩沖野氏は南小樽駅前の某旅館に泊り、件の蜜柑函をうやうやしく床の間に安置した処が、女中がソット蓋を明けて見て、テッキリ「白骨」と思い込んで、キャッと叫んで卒倒すると言う一幕があり、沖野氏は平素から頗るカツギ屋であったが、白骨と間違えられたと言う事は真に此の上ない縁起の良い事だと言うので、独り悦に入って殊の外の上機嫌であった。)

翌朝僕は沖野氏と連れ立って出札し、鉱務署に分析を依頼した。署でも有望新発見と言うので特別に馬力をかけて呉れ、翌日の退庁間際に中間発表をして呉れた。分析の結果は金300瓦以上、銀は其10倍と言う好成绩であったので、沖野氏は今更の様に喜びを新たにして、早速紋別で鶴首して待ちもうけている羽柴氏に電報した。

此の機会に僕は此出願図が不完全な事と競願の形勢も必至と思われ、旁々万一臨検の場合の不利が案ぜられたので、予て面識ある鉱政課長に懇請し許可促進を願出た。尚僕

は此時に、元山露頭の優良鉱石の出た事で、コレは考え直さなくてはならないと思って、先きに自分の見た貧弱な鉱石の堆積地点も投げて置けないと言う気持ちにかられて、沖野氏ともよく相談の上、川向い一鉱区を補助鉱区として出願し、両鉱区を一体として共有の事とし且つ有力出資者と提携する迄の準備期間の費用は僕が負担する事を約束した。

沖野氏は此時、札幌から其俣郷里金沢に法事の為出発し、郷里からの帰途再び札幌で落合い、鉱務署に出頭して予め依頼の許可証の手交を受け、即日登録手続を了った。時に大正5年3月13日。北見国試掘権登録第309号、コレが鴻之舞鉱山元山鉱区である。

へ. 羽柴氏披露宴を張ること。

一方紋別では、沖野氏からの吉報を受けた羽柴氏は喜びの余り、是迄極秘自重を申合せた事も忘れて、派手好みで稚気満々たる日頃の気風の赴くままに、早速料亭三吉亭に官民有志を招き、鉱石、電報などを床の間に飾り立て盛大な宴を張った。

その時、招待を受けた連中には某・某・某など何れも先年八十士競願の時互に鎬を削った古豪がズラリと顔を揃えた。彼等は日頃から、何か破天荒な大鉱山でも出ないもんかなーと常に虎視眈々の連中で、此の意外の発表に心中甚だ穏かならざるものあり酒肴も味を為さず、管絃耳に入らず、期せずして互の胸底深く対策に燃えて眼光火花を散らす緊張の場面に現出呉越同舟、遂に長座に堪えず、宴半ばにして来賓の総退席となり、会場は忽ちにして落花狼藉の跡と化した。

ト. 東京有田組共営申入れのこと

大正5年春、東京有田組の人、石松成章氏が、悪ブローカーに買わされた砂金鉱区の採金目的で、25.6名の鉱員を引連れて某地に入山したが、全然のインチキと判明、苦悩中、鴻之舞鉱山の噂を聞き、紋別に出て、羽柴・沖野両氏を訪ね、有田組との共同経営の和談を持込んだ。

当時僕は同山の探鉱準備に心せかれて、昨年来の幌内時代の事業の後始末を関係山林1,550町歩の投売によって、一気に解決し、僅かの資金を準備して紋別に帰り沖野氏と協力、取敢ず元山沢入口に探鉱小屋を建て、刈払いを開始し臨検に備えた頃であったので、当方も内談の結果、条件によっては応じてもよいとの決意を固めたが同組の鉱山部門担当責任者吉田久太郎氏の来道が遅れた為、この談が停滞した俣で臨検が行われ、続いて飯田氏との合意も成立したので、自然有田組との共営の相談は不調に終わった。

チ. 鉱務署の臨検と組合の結成のこと

同年5月中旬、札幌鉱務署から時の主任技師高橋滝三郎氏が臨検官として現地に派遣された。問題の露頭の所属が同技師によって何れに決定されるかは当時地方人の最大関心の的となった。就中直接関係者の面々は、最後の審判を待つ緊張感を以て、表面は平静を装い乍ら相連れ立って実測に立会ったが、胸中互に同舟異夢を描き悲喜交錯、戦々競々の内に臨検が終り次の判定が下された。

即ち、元山1号及2号露頭は沖野・羽柴両氏の試登第309号鉱区内に、同3号露頭は飯田・池沢両氏出願鉱区内に、古屋氏出願鉱区は当時の既知露頭に関係なしと。

尚、鉱務署としても両者相争うの不利を論じて妥協共営を慫慂したので、茲に於て両者

合併の協議再開、数次の会談を重ね、種々曲折を経た結果、つぎの線で妥結した。

飯田組は出願鉱区全部（6件）と探鉱資金を提供して6割、沖野組は許可1鉱区、出願中1鉱区提供して4割。飯田組は飯田・池尻両氏に出資によって新たに岩倉梅吉氏を加え、沖野組は沖野・羽柴両氏に今堀の3名。組合全口数を2,100口とし、内2,000口を各組持分に依りて分配し、100口は功労株として保留することとなった。

斯くして組合は結成され、大正5年6月13日試掘権登録第309号に飯田嘉吉氏組合を代表して加名、是迄今堀等の出資による探鉱小屋其他の雑具及び5名の人夫は其の俣組合に引継れ6月以降作業は組合に運営に移った。

リ. 吉田鉱山長招聘のこと

石松氏の招電によって吉田久太郎氏の来たのは、丁度組合結成と同時であったので、吉田氏は有田組と提携の談は時既に遅く解消已むなしとして、兎に角、山の仕事を是非任せて呉れと率直熱心に申入れた。折柄、事業方針に関し第1回の総会を開いたので、其席上吉田氏を招じ懇談の結果、一同同氏の熱意に動かされ、即座に鉱山長として招聘することに一決した。

次いで発足に当り、山名を定める議題が出て、先ず飯田氏によって地名「クオノマイ」を採る事が提案され、飯田氏の「久保之舞」羽柴氏の「久宝能舞」の二案が出たが、此時吉田氏は沈思黙考する事しばし、やがて静かに口を開き「なるべく自然で詩趣もあり、且つ山の発展を象徴する様なおらかな名がよいと思うが（鴻之舞）としては如何でしょう、将来天下を睥睨して大きく羽ばたく様に」と発言した。

一同感に打たれて一言もなく満場一致で之に決定した。茲に愈々鴻之舞は吉田鉱山長指揮の下に開発が始められる事になった。

吉田氏は鉱山とは畠違いの帝大出法学士で、特に書を能くし、国土遠山満翁に私淑し、豪放磊落にして名利に坦懐、一面亦非常に情誼に厚く能く部下を愛し、山の仕事には火の如き熱を有し、当山関係者中断然他の追隨を許さぬ傑出した人物であった。

ヌ. 組合経営のこと

同年6月中旬から愈々吉田鉱山長指揮の下に探鉱開発兼売鉱経営に移った。先ず道路その他の土工・伐木・建築等目まぐるしい開発作業が始められ、千古悠邃の罨熊の里に槌音かしましく響きわたる日々が続いて、秋頃迄に一応当座の仮事務所・飯場・選鉱場其他間に合わせの設備が整い、一方探鉱の方も露頭下の転石整理と、続いて1号露頭下に立入坑を開いた。

この坑道は始めから転石の累積地帯を割って進み其の俣着脉したので呷は一握りも出ない有様であった。貫通の結果は脉幅6米、平均品位金220瓦、銀2,300瓦であった。

売鉱の実績は記録を焼失したので的確な数字は不明であるが、坑内外鉱を選別して約100屯の上中鉱を日立・幌別に売鉱、6・7万円の売鉱代金を得た筈である。

ル. 売山の経緯

売山の交渉で一番早かったのは藤田鉱業であった。之は吾々3人組時代、僕の従兄の大

野から同人の友人の大森銀山技師を通じ至急調査方を申込んだが、折悪しく当の技師が長期出張で時期が遅れ、連絡のあった時には既に当方の組合結成後であった為一応断った。其次の交渉は有田組で既述の通り。・・・

現地調査の先陣は三菱鉱業で、同社所有の金山沢銅山調査のため来遠中の加藤・真杉両技師が噂を聞いて来山したもの。・・・次が久原鉱業の村田善丸技師で、同氏は買鉱を予約して帰った。・・・3番目に来たのが住友の中村啓二郎氏で、続いて同社荒井技師来山し、それから売山交渉が始められた。

吉田鉱山長は住友に縁故が多かったので熱心に斡旋され、斯くて組合員一行の上阪となったが、自分は委任状を託して山に残った。かくて6年2月18日付で契約成立、自分は持株による配当として手取90万円を受けたが、交渉の経緯については一切聞かされなかった。

上述の鴻之舞関係者の後日譚も記せば色々であるが、或人は引続き鉱山開発に全力を傾注して功成り産を成し或人は不幸に見舞われてむなしく世を去り、うたた、有為転変のきびしさをみせつけられたが、自分は益々鉱山に対する信念を深め全道的に斯界に活躍すべく、之を契機に鉱務署所在地の札幌に居を移した。

「あわれとも言うべき人は素人よ 只いたづらに山にのぼせて」

(謙徳公替歌)

「人も惜し人も恨めしあじきなく 世を思う故に鉱山思う身は」

(後鳥羽院替歌)

オ.つけたりのこと

東洋のクロンダイクと歌われた枝幸金鉱開発以来、北見の国では、略10年を1期として周期的に大物が出ている。枝幸・八十士・鴻之舞という風で、其都度物凄い探検熱が起る。其の熱で中小の鉱山が出て来る。今度の鴻之舞は前2者とは比較にならぬ位大きい。同山の出現と共に全道的に金鉱熱の熾烈となった事は当然の帰結であって、其後相次いで金山の開発・発見が伝えられるに至ったが、之に付随して笑えぬ悲喜劇も各所に起った。

吾々の探検時代、紋別の一般町民は常に山師を白眼視していたものだから、冷かし半分に「一体、どの位の金が埋蔵されているか」とうるさく聞かれるので、出まかせに「サア軽く見て1億5千万位かな」と答えてやった。

羽柴氏之を聞いて「ソレハ愉快々々」とばかりホラ好きの同氏が盛んに此1億5千万を連発するので、例の連中が「1億と2億と駄法螺を吹いて今に7おく山師もの」と都都逸もどきで冷笑したものであったが、愈々売山となって是等の連中大いに驚き、ココソと山に手を出し始めた。此人気で紋別に蝟集して来た一ト旗組の内には頭の良いのが「山よりも是だ是だ」と逸早く此の種の亡者共に眼をつけ、大法螺一席吹き飛ばしてポロ山を買わせる。

此のハッタリの名人に当時某と言う男が紋別に来ていた。彼の内証話は真に面白い。先ず開口一番「山の金より金庫の金を掘る方が早いからねー」と言う「之は僕の種だよ」とニヤニヤしながら茶袋につめたものを出した。中を見ると椀掛けで取った金銀の粒だ。

「悪いけれど、あんた方の山から貰った石から造ったんだよ。こいつをボロクソの穴だらけの石英粗面岩に撒いて置くんだよ。ソナナ岩石の畠なら何処にでもあるからねー」

「それでも春蒔いて夏頃亡者を連れて行って本人に自由に見本を取らせるのさ。スルと雨にさらされる度毎に金粒は石の隙間にウマイことすっかり落ちて、一寸本職でもオヤと思う様になってるんで奴さんすっかり惚れ込んで忽ち商談成立さ。ハハ……。まだ種がこんなにあるから、今年は秋蒔きをやるつもりで、畠を二ツ三ツ願ったよ。

秋蒔きをやって春見せたらソレコソ玄人でも引っかかるよ。ワッハハ……。」此男の様な筆法で、町の2・3の亡者がボロ山を持たされ、夢中でつぎ込んで型の如くスッテンテンになり、冷やかした方が本当の七おくになった。処が山は曲者で、数ある中には、だまされて大当たりになった者もある。之等は法螺の為に眠った山が出た事になる。ハタタ屋果たして是か非か……。

「吹くからにボロ山高く売りつけぬ むべ山プロカ山師と言うらむ」

(文屋康秀替歌)

「やす山に老舗のかまどさえ かたぶく迄の馬鹿を見しかな」

(赤染衛門替歌)

「あたることの絶えてしなくばなかなか 人をも鉱山も恨むなりけり」

(中納言朝忠替歌)

15. 静狩附近探鉱の巻

鴻之舞売山の後、先ず余市を訪れて従兄の大野に再会旧交を温めた。当時、赤井川村の明治鉱山は黒鉱の大鉱床に当たるとかで、盛んに馬鉄で鉱石を銀山駅に搬出していた。

其折、大野の紹介で水野伊三郎氏・平野賢之助氏両探鉱家に初対面して四方山の話聞いた。両氏とも其頃の斯道の先駆者で寿都町の有力者でもあった。数年前から歌棄村の潮路金山を探鉱中であったが、大正5年の春、朱太川上流を探鉱し来馬附近で金鉱を発見、布袋坑その他2・3の鉱床を確認して開坑探鉱に着手した。

其頃石川県の人で内地及び朝鮮の金鉱で成功したと伝えられる木山与一氏が鴻之舞の噂を耳にするや、逸早く部下を引連れて来道し、先ず水野氏の鉱区を買山目的で入山調査中、同抗の隣りに聳える山の頂上を通る道路が新設されて其路面に石英の露頭が出た噂を聞き、密かに現地を実査した木山氏は口実をもうけて退山、直ちに出札して出願手続を行った。之が静狩金山であった。

一方、水野氏等も此話を耳にしていたが、丁度木山氏が自分等の山を調査に来た為現地へ見に行き兼ねて居た矢先なので、木山氏の退山と同時に件の道路の新露頭を見て急遽出札出願したが無無論後願となった。

住友の中村啓二郎氏は静狩金山の好評を聞いて、僕に「是非鴻之舞の姉妹山として同時開発を試みたいから世話して呉れ」と依頼を受けたので、大野を仲介人として住友側に紹介し、平野・水野両氏と共に静狩金山及び水野氏等の布袋坑其他を一巡調査して貰った。其後の交渉は一切大野に任せしたので細かい経緯はわからないが、色々と紆余曲折の末、結局静狩元山及び其外周、来馬其他の各鉱区とも住友の手に納まった。

僕は当時住友中村啓二郎氏のお伴をしたお陰で静狩附近を見学出来たが、至る処の沢々に転石の多いのに興味を感じ、5鉱区計り不見転出願してみたが、何しろ鴻之舞に

引続いて静狩の出現となったので、金鉱熱が此地方に集中し、白い石を見れば猫も杓子も競うて出願し、噴火湾沿岸長万部から豊浦迄の間、寸尺の空地もない程出願輻輳の盛況を呈したので僕の出願は殆ど後願であった。

翌7年水野氏の動議によって「此地方の出願は素人の漫然出願が多いから後日に備えて一応全域を踏査して見ようではないか」という事になって、礼文から豊浦迄探検して廻った。此地方の鉱脈の多い事は実に送迎に暇ない程で、特に早くから開拓された地方なので、至る処畑の中、又近くの藪に石英がゴロゴロして居るので発見は頗る容易であった。道路は縦横に通じ海岸に近いので、魚は新鮮、野菜は豊富、実に愉快的探検行であった。

然し結果は残念ながら、脈は多いが殆ど不毛に近い貧鉱が大部分で、食指を動かしたのは、僅かに「礼文」「小鉾岸」の2山で、泰山鳴動して鼠2匹に終わった。其後、此2山を開発する目的で水野氏が鉱主に交渉を始めたが、「礼文」は当時の出願者が誇大妄想の方で話がかたず。「小鉾岸」の方と探鉱契約を結び、隣接2・3鉱区をまとめて探鉱する事になった。

僕も共同の相談を受けたが、何分鴻之舞を扱った眼で見る為か、余りにも品位が低いので乗気にならず、1週間計り探鉱を手伝った上辞去した。「小鉾岸」探鉱の結果は相当の太さの脈10ヶ処計り押えたが何れも貧鉱で、結局最初のペタヌ沢のものが一番高品位であった。其後住友で買収、戦時中国策会社日本産金に転じ、道内中小金山の中央精錬所が茲に設けられたが終戦後廃山となった。

「礼文」は其後、豊田義明氏によって開発されたが、脈勢は相当のものだが底部は逐次品位低下の傾向にあったものと、主脈一条だけで他の脈は殆んど低品位で余り発展性は望めなかった。

以上の探検行余談として一席・・・

静狩と礼文の間にパラキナイと言う小沢がある。アイヌ語で「ダニ」の沢と言う意味だそうだが、ソナ地名が出る丈けあって此附近一帯非常にダニが多い。探検中毎日の様に、寄宿早々裸になってダニ取りをやったもんだ。

或る日、例によって3人で電灯を囲んでダニ取りをやっていた処が、そぞろ歩きの若い男が窓のそばで声高らかに「人が嫁取り婿取る中に、わたしゃ因果で、ヨサしらみ取る」と歌ったもんだ。・・・一行中の剽怪者の平野君イキナリ大喝一声「バカヤロー、しらみ取ってるんでないぞ」とどなった処が、其若者が恐る恐る弁解する処によれば、当夜近処に嫁取りがあり、ソレを見ての帰り道に何気なく歌ったので、吾々を嘲笑したのではなかったという事で、思わず笑いとなった。

又、静狩周辺の鉱区売山によって何がしかの山代金が手に入った平野君、早速札幌で豪遊の上芸者「一二三」を落籍して「一二三」と称する小料理屋を開店し、一時料理屋のおやじさんに収まったが勿論永続する筈もなくやがて型の如く喧嘩別れに終わったが、別れ振りが華やかであった為、時の「タイムス」紙上に、加藤悦郎氏の妙筆漫画入りで発表され、当時の話題を賑わした愉快的男であった。

「手持山売りて成金風吹けば いでそよ苦労忘れ勝ちなる」

(第貳三位替歌)

「八重むぐら繁れる山の探検は 人こそ知らね苦労するなり」

(恵慶法師替歌)

16. 洞爺鉱山 (黒鉱) の巻

大正7年、当夜湖畔の農家宮内常一・安藤市蔵の両氏 (共に四国丸亀の城主京極家の家老の息子で明治初年京極家移住の時、父と共に移住し開拓に聖汗流した人々である) 連れ立って幌別川上流にある山林伐採跡の売物の土地を調べる為に、一丁鍬を肩にして踏査中、「妙な粘土ばかりある処ぢゃわい」と好奇心に馳られて掘り廻って居る内に、戛然と音がして石塊に当たった。

何気なく堀上げてみると馬鹿に重い。物好きに割って見ると何やら黒い金属の光りが見える。興に乗じて掘りまくと次々にいくらでも出る。「コリヤ、花咲爺ぢゃ、宝ものぢゃぞ」と言うので、土質調査も打切りにして早速1鉱区出願した。処が、此の黒鉱露頭の横に、硫化の赤やけが褐鉄鉱大露頭となって大きな崖をなし屹立して居るので、鉄鉱として許可1鉱区、出願中1鉱区の2件が先願となっていて問題がこじれた。

そこで僕は踏査の上、両者妥協して一括売山する事に話を進めたが、鉱主同士の歩合協定がうまく行かぬ内に鉱務署から実測臨検の通知が来たので、双方共一抹の不安があるから急転直下妥協成立し僕のものとなった。

例によって向こう見ずに、囊底を払って買ったので、早速運転資金の調達に走り廻った。幸い、内外鉱業株式会社から技師が派遣されたので現地を案内した上、同氏と同道上京した。処が、同技師が是非買収方を会社に上申したが専務が強く反対して果さず、其俣帰札した。

其後細腕1本でヤリクリ算段して簡易ボーリングを試み、土鉱の範囲の相当広い事を確かめ、共同経営者を探したが思う様に行かず、資金の工面もつかなくなったので、已むなく東京の田代氏に売山した。其後同氏によって採鉱され日立に売鉱、続いて日鉱に引取られる事になった。

「このたびは仕事もやれず手持山 売られ行くなり かねのまにまに」

(菅家 替歌)

17. ルベシベ附近探鉱の巻

大正6年の5月、現在三菱金属鉱業で稼業している沼の上金山を発見、ついで予先をルベシベ方面に転じ、ボンムカの北山一帯を探鉱して3本の正規石英脈を発見したが、何れも幅広く脈勢優秀であるが品位甚だ低く、母岩も香ばしからず富化の見込が薄かったので登録せずに終わった。(後の泰北金山)

次いで鴻之舞鉱山吉田氏が出願した置戸の鉛垂鉛鉱区を見るべく置戸まで足をのぼした。上置戸の農家終点からしばらく遡った処の本流右岸の小沢の落合付近に水面スレスレの処に僅かに顔を出している石英を伴う鉛垂鉛鉱で、幅4、5寸の貧弱なものだが銀の品位が3キロ内外もあったので、吉田氏はとり敢えず出願し山番兼探鉱のため鉱夫1人置いて居たものだった。

山番の者に聞いてみたが、今の処、此の露頭以外に見当たらないと言う。本流を見ると石英の転石が相当見えるので、之を追うて見たかと聞いた処、1里位追って見たがマダマダ上流から来てるらしいと言う。中には稀に一寸有望な石も見えるので序に根源を極

めて見る気になって、其番人を伴い野営準備を整えて遡り、山中に2泊して本流及び中の沢で3条の石英脈を発見したが、何れも鉱質劣等、頗る低品位で且つ母岩も好ましからず、先に拾った良質の石英は多分局部のものだろうと推測して下山した。（後の春富鉱山）

次ぎに山の疲れを癒すべく温根湯に出て温泉でゆっくり汗を流し、何気なく裏の台地を散歩して畑の中の石英が目にとまり、小沢の岸に出て見た処が相当賑やかに転石が流れ出て居るので、此処でゆっくり滞在して付近一帯を採鉱して見た。

其結果18号沢の上流は安山岩で何の変化も見当たらないが、中流から下手ツツジ山の方面にかけては石英粗面岩質の角礫凝灰岩、砂岩、頁岩等で、是等の岩石が後火山作用に因って著しく硅化された処、又は分解褪色されて軟質化した処、甚だしく破碎された処などであった、北の王付近の地質に似た処多く、頗る興味を感じて毎日夢中で随所の石英を検視して見たが、品位は案外低いもの計りであったので後日を期して一応下山した。

その帰途、ルベシベ駅前三浦屋に小憩中、前庭にある庭石の中に石英があって、出所を聞いたら川向いの沢だと言うので、茲で又3日滞在して川向いのサロマ街道の沢を峠付近まで調べた。

随所に石英が見られたが何分石の質が望ましく無かったのと、品位も低く、特に山の急な処には至る処に硅岩らしいものが見えるので、大部分が古生層らしく見えた為に余り乗り気にならず引揚げた。後日、斯界の権威の説によって、硅岩と見た崖は硅岩とは全然違う別個の成因による硅化岩石と教えられ、其浅学軽拳に汗顔、果して後日著名の数鉱山が開発され冷汗3斗の思いがある。

序でにこの付近の其後の状況を述べると、先ず小樽の高橋正法氏が神与鉱山（後の温根鉱山）を開発、18号沢左の山頂で良鉱の堆積地を発見、小坂に売鉱したが昭和11年藤田鉱業と探鉱契約を結び下部探鉱の結果不良で休山した。

その下流の百宝鉱山は札幌の酒造家片岡氏によって探鉱されたが、鉱体は大きいが品位低く休山。又その下流の双龍金山はH氏其他の共同で開発に努めたが、其の名の如く双龍玉を争うて紛争続き、其後内地から来た山師某によって北の王鉱山の粉鉱で山を化粧、某社に売山、某社の失敗で幕。ルベシベ付近では藤田鉱業の常呂鉱山、前述自分の調査して見当違いの為失敗したルベシベ金山、小樽糸井良七氏が買い集めて探鉱、後に東邦採鉱に売山した地区など可成りの成果を挙げたが、峠よりサロマ寄りの地龍鉱山は較龍深く地中に潜んで直り出でず、又仙台齋善会の大成鉱山も大々的に地下探鉱を進めたが、品位低く遂に大成を見ずに休山した。

18. 北の王鉱山の巻

鴻之舞鉱山が脚光を浴びた直後地方の人気を集めた山の1つに北の王がある。大正5年地元の農夫等の目にとまった石を生田原の米穀商和田政吉氏が一見し現場を採鉱して大金鉱と推断し早速出願した。ついで小樽共成精米の野付牛支店長山品末男氏が出資し共同で開発する事になった。当時僕の店も同店と取引関係があったので見本も見せられ、後現場を一巡探鉱上の注意事項を教示し激励した。

其後此山は共成精米が小樽である関係上、小樽有志の人を糾合して組合を造ったが、素人同志で色々いぢり廻した末、組合員の1人の計いで岩内居住の経験家水野伊三郎氏

参加によって開発が進められたが、結局△△鉱業と探鉱契約を結ぶことになった。

△△鉱業では目星しい処を採掘送鉱して「探鉱の結果見込乏しく解約」を申出た。茲に至ると素人の集りの悲しさ、生馬の眼玉を抜くと言われた小樽人士も、一応は其逞ましい商魂で虚々実々の掛引を弄して見たものの、根本の山の価値其ものに自信と言うものを持ち合わせて居ないので、△△の冷静な態度に急に弱気になり、半額にまけても此際金を貰った方がよいと言う結論になり、泣きを入れて嘆願的交渉に移ったが、△△は愈々冷たく「折角だから更に其半額ならば」と小刻みに出た。

此時、水野氏と僕とは万一解約の時は僕も片棒かついでモウ1度あの山に花を咲かせて見たいと内相談が出来ておったので、水野氏は組合員に対して「今、涙金程度の金を貰った処で小樽有志ともあろう諸君が何の足しにもならんからキッパリ解約させなさい。

私は1銭も諸君に出資させず此の山を今1度復活させて見るから任せて見なさい」と申入れたので組合も費用分担の必要が無いと言う処で安心して翌日△△との解約を履行した。時に大正14年の初夏、先ず日頃着眼しておいた採登第8号鉱区元山頂上近くに新抗朝日抗を開き掘進10米で会脉、粗鬆な石英粗面岩質凝灰岩の破碎帯に鉱染した鉱床でカオリン状白色の粉鉱である。

幅は一定しないが大体3米内外で、着脉後掘るに従って天磐から崩れ落ちて1歩も進まず、只刻々に自然に崩れて押出して来る鉱石を懸命に搬出するだけで精一杯。従って採鉱費は1銭もいらぬ状態が半月続いて珍レコードを作った。品位は30から150瓦で70瓦以上を呷詰にして売鉱した。

其内に此地点の鉱床状況が一応判明したので、坑内探鉱は冬期に廻す事とし、降雪前に鉱区全域に亘る野外探鉱を敢行する事に相談一決し全員を督励して之に当たった。

野外探鉱開始の劈頭、北の王開山以来の協力者共成精米の山本秀一氏が今迄幾多の鉱員其他が朝夕必ず2度は踏んで通る道路の踏石に、金色燦然たる金モールの如き細脉が縦横に通って居る石を発見し、之に力を得て予て予想していた土砂鉱も此状態から推測して相当の品位を保持する事を期待出来る様になり、全力を挙げて各所に塹壕掘りを行った処、市街に面した斜面の殆ど全域に土砂鉱賦存を確認し、品位30から70瓦、厚さ最大15米に達し莫大な鉱量を算定し得るに至った。

之でようやく僕の日頃の希望が達成された次第である。これから愈々企業家に進む段階に入ったので、年末から正月にかけて札幌東京間を再三往復して、当時大日本鉱業を興し発盛吉野両鉱山経営中武田恭作氏に委ねる事になり、15年早春から両氏配下の諸員多勢入山、企業計画の諸工事を始める事となった。

当初、武田氏からの希望で土砂鉱処理の旧式の方法を試験的にやって見る事になり、元八十士の砂金熟練者新田熊蔵氏を呼び寄せ、氏創案の「稲妻樋」を作って採金を行った。実収は分析の80%、粘土にまぶされたバラスは金樋まで運ばれる間に、急斜の鉄製リップル付の樋を通過する時に、樋の中で米を磨ぐ様にもみ付けられるのでバラスの表面は幾分すり減らされ粘土などは完全に除去される為きれいに採金出来、落差と水量さえあれば真によい方法である。

扨て、茲まで復活すると、それ迄鳴りをひそめていた小樽の株主連中ソロソロのさばり出して来たので、餓狼争肉の醜態を見るのがいやで、僕は与えられた僅かばかりの報酬株を投げ売りしてサッサと手を引いた。其後、予想の如く幾多の紛争葛藤の末、石川博

資氏個別持株買収に依って帝国産金の手に歸し同社によって本格的に稼行されるに至った。その当時、北の王付近で開発された鉱山には生田原、昭和、北見（金）、北見千歳、隆尾、矢矧等がある。

処で北の王や生田原、昭和は主として粉状鉱石が多かった事と、度々高品位の粉鉱が生産された為、此粉鉱が好個の山造材料となって、付近余り有望でない山の売買の時、トラックに使用されて随処に悲喜交々の話題を残した。その為に、此付近の山調査には一応さり気なく装って案内を受け、翌日未明案内人の未だ寝ている内に起きて朝霧を衝いて再調し、サンプルを取り直したものだ。

「朝ぼらけ山の朝霧絶えだえに あらわれたるインチキの跡」

（権中納言定家替歌）

19. 知床半島探検の巻

大正6年8月、紋別の飯田氏の依頼で、同氏の友人が出願した知床半島ルシャ川鉄鉱区の調査を引受けて出発した。当時の交通は駅通馬によって、網走から止別、斜里、越川で1泊、糸櫛別、伊茶仁、薫別、春刈古丹を経て羅臼で1泊、之からは海岸の玉石を跳躍しつつ漸く薄暮にルシャ川尻にたどり着き漁場に宿をとる有様であった。翌朝入山、山中で1泊して各支流迄一応踏査したが鉄鉱のカケラ1つ無く馬鹿々々しい限りであった。

その戻帰るのも残念なので、羅臼に泊った時、同地運送店の主人から聞いた合泊の鉱山迄足を延ばし、旧坑を見る事にして川尻の漁場に又1泊、翌日合泊に出る。合泊は当時定住の人家なく、鱒、鮭、昆布等の漁期中だけ出張する番屋があって、当時は昆布番屋で賑って居た。又合泊川尻の左岸に湧泉があり、お粗末ながら温槽があって自由に入浴できる様になって居た。

さて、早速合泊川を遡上して見ると、話の通り海岸から1軒足らずの処に旧坑があり、坑木などは朽ちて形もなくなっているが磐堅く崩壊しておらず、内壁は真に綺麗な手掘りの跡で大分昔のものらしい。10メートルばかり赤い褐鉄の溜水をこいで入って見たが、其先で潰れて見られず引返す。坑口や天磐の模様で5寸乃至1尺の褐鉄になった焼けを押しているのが糞押に入ったらしい。

この川は海岸近くから左に大きく曲って入って居るのでこの戻押せば浜の方へ抜ける格好なので、其晩は昆布番屋に泊り、翌朝此先見当の海岸沿いの斜面を調べたが、土深く笹繁り1朝1夕では手掛りを得るに困難だから、見合わせて浜を散歩して居た処が、折柄の昆布干場になって居る玉石を綺麗に並べた中に、黄銅鉱の付着した転石2、3個を拾った。

フト見ると、汀の温泉の少々先の方に波に隠見する平岩があり、一寸たたいて見たら銅の露頭だった。幅2尺内外で少々網状を呈して居るが、品位は4～5%のものであった。これが旧坑の位置に向う様な走向で走って居るので、細いながら可成長いものらしい。扱て幸い明朝は、羅臼行の発動機船が出ると云うので、又1泊して帰りは玉石を跳躍する御難から逃れた。

帰途羅臼温泉で2泊し、附近の噴気硫黄のある処など見学して、来た時の道順を逆に紋別に出た。当時の羅臼温泉の立派な建築・調度には聊か驚いたが、事情を聞くと、此温泉は冬季間根室地方の漁業家の親方連中の遊び場で、無警察天下御免の大賭博場とな

るのだそうで、之を聞いて2度ビックリ……。後年、或る年の融雪期に、山つなみの様な大水で、此立派な建物も一瞬にして流されて仕舞ったと聞いて居る。尚、此の合泊銅山は当時余りにも不便なので、とても出願探鉱などする元気が出なかった。何れ将来交通の開ける迄待機傍観する事にした。

20. 日高静内川上流探鉱の巻

大正7年頃、当時札幌居住の飯田嘉吉氏宅に乃木將軍の甥と自称する渡辺と云う老人が来訪して、静内川上流に出願中の金鉱3鉱区の、開発資金借入を申請して来た。

まことに正直そうな好々爺で、訥々として語る処を要約すると、「その昔、山椒大夫の秘密の金山の1つで秘史に拠って漸く探し当てたが、残念ながら資金がなくて開発出来ない。鴻之舞を開いた、あなた方の力を借りて是非世の中に出したい。取りあえず探鉱費として2千円貸して欲しい。(乃木將軍の書状、静子夫人の手紙など数通を出して)之は自分の家宝で手放せない品だが、担保に預けて置くからよろしく頼む」と言う様に真に珍しい申込である。

人相も成る程よく將軍に似た処があり見本は粘土鉱で検椀の結果200瓦見当の上鉱であり、説明によれば「粘土の層状の鉱床で、層の厚さは狭い処で6尺、厚い処で15尺もあり、而も数百間の間延々と続いて各所に顔を出して居る」と言う。

早速実査する事になって、探検隊を組織して静内に乗り込み、市父の市街地で準備を整え、アイヌ人の道案内兼荷物運搬人夫6名を雇って、渡辺老と僕に宮本、高尾の両君を加え一行10人で目的地、染退川上流アプカサンペに向って出発した。

市父から農家迄2里の間は里道がある。此時、先頭のアイヌ2人は各々小脇に長い棒を前方へ斜めにして抱え、棒の先で地面をチョイチョイと突つき乍ら歩いて居るので、不審に思って聞いて見ると、彼等は蛇をユンコカモイと称して、之を踏むと罰を受けるという迷信があり、其為、予め蛇が踏まれずに逃げられる様、この様にして歩くのだと言う。やがて農家に着いて小憩、此处からは全然道がなく、殆んど川を途渉して遡る事になる。

先ず渡辺老の意見に従って丸木舟1隻借入れ、之に荷物を積み、各人身軽になり、舟は人夫に曳行させて遡上した。夕刻3里程上流の広い川原のある処に到着、此处に天幕を張って野営した。処が宵闇迫る頃から暗雲低迷、夜半に至り一陣の突風と共に雷鳴轟き紫電閃いて豪雨沛然として到り、アイヌの長老が「大水になるから山際に避難せよ」と騒ぎ出したが、マサカと思って彼是押問答している内に濁流の音物凄く小屋の際迄浸水して来たので、愈々周章狼狽、荷物を抱えて一散に山際に逃げ込んだ。2回目残りの荷物を取りに行った時には、小屋は既に1尺余の水浸しになる始末。此の川の水足の早いには全く一驚を喫した。

さて非難はしたものの暗さは暗し、雨は益々強く、全く手の施し様もなく、荷物を太い木の枝につるして一同座る事も出来ず天を仰いで、ずぶぬれの俣立ち通した。暁方近くなって、ようやく雨はやんだが、さしにも広かった河原一面が滔々たる激流となり渡渉すべくもないがさりとて、避難地点のすぐ下手は断崖迫り山越の見込もなし。やむなく昼近く迄様子を見て、少し減水するのを待って、丸木舟に2回に分乗して対岸に渡る

事にした。

各々物干竿程度の太さの竿を持って激流の中を棹さして舟を押し進めるのだが、2回目の時不覚にも川の中心で岩礁を避け損じ、舟が之に激突して、アッという間に転覆した。一同瞬間に飛び降りて、竿を力に立ち上ったが、渡辺老が見えない・・・スワー一大事！と一同自分の身を支えるのが精一杯の激流の中で、死力を尽して転覆した舟を起した処が、老は顔面蒼白、物も言えずに舟底に身を横たえて震えている。「下船しろ」と言うても立ち上らない。・・・

よく見ると激突した瞬間に舟底が大きく割れて、其割れ目に足を挟まれて身動きできないのだ。・・・激流の中では如何にもならず。やむなく其俣対岸迄舟を曳いて来て、割れ目に挺を入れて足を抜いてやったが、物凄く腫れ上って歩行できない。愈々厄介な事になったが捨てても行けず。仕方なくなく、又もや其のこわれた舟に乗せた俣二又まで曳行し、此処の造材小屋から別の丸木舟を借り受けて農家に渡し、夕刻市父の宿に着くや否や一風呂浴びて、クタクタに疲れた躰を横たえた。

2日滞在して日和待ちする内に、天候も落ち着いたので、再び出発する事にした。此の宿屋で偶然顔見知りの砂金探検家加藤権蔵君と泊り合わせたので、今回は足手纏いの渡辺老を宿に残して、此の川の地理にくわしい加藤君を一行に加え、同勢10人で再登山の途についた。(舟にはコリゴリしたので此度は舟に頼らぬ事とした)

さて、農家に着いた処が、アイヌの長老がドッカと河原に腰を据えて、「カモイオンカミ」をやると言い出した。此の前登る時にやらなかったから、アンナひどい目に会ったのだから、今日は是非共やると言う。やむを得ず神酒を飲み過ぎさぬ条件で認めてやる。やがて「イナオ」を削って祭壇を飾り、型の如く式を済ませて愈々渡渉を始めた。

今度は水も枯れて案外はかどり、夕刻喜平内沢に着き此処で第1夜を過した。・・・(喜平内という沢名の由来についてアイヌ長老の語る処によれば、昔此奥に大勢の砂金堀りが入って居た頃の或る日、キノコ汁の中毒で数十人がたおれたので、喜平と言う男が薬を買求める為下山の途中、此の沢で発病して死んだ。彼も少し喰べていたので此処迄来て遂にたおれたものらしい)

さて、之から上流は地形益々急峻となり、函又函の連続だ。「翠嶂畳々として天に連なりて青く、懸泉千尺白龍跳り、万丈の断崖碧潭に逼り、奔湍岩に激して人の腸を洗う」と言う様な南画の山水図其俣の景観である。随て終始唾をさらう激流に抗して遡り、時には腋をも浸す深い瀬を渡り、或いは匍匐して断崖をよじ登り、又は一条の綱に命を託して絶壁を降るなど、あらゆる辛苦の末途中1泊して3日目の薄暮に目的地アプカサンペの沢口に到着、此処に7泊目の天幕を張った。

翌朝早速アプカサンペ中流の渡辺老図示の付近を一廻り調べたが問題の大鉱層は見当らない。見本に似た粘土は処々かなり大掛かりの仕事をしたらしい昔の採金跡と思われる石垣の遺跡があって、其の上には三抱えもある桂の大木が亭々とのびて空を覆う様に枝を繋らせている。

次の日天幕を上流に移して、見本類似の粘土を手当り次第検査し、付近の小沢迄調べたが全然見本の様なものは存在しない。序だから加藤氏の案内でアプカサンペの滝の上に登り、上流迄一と亘り踏査、帰りに滝の上で右に差した小沢カニカンナイ沢を約百450間登った処の左の枝沢に、粘板岩中に淡褐色の堅い石英脈の在るのを見た。

局部的に肉眼で見得る金を含み且つ脉全体に小粒の辰砂が薄く斑点状に散布して居る。脉幅は5～7寸、ほぼ東西走向である。此付近は粘板岩中に糸の様な石英の状脉は各所に見えるが、合金は見られなかった。尚此のカニカンナイ沢の突当りに円い緩やかな形の山が見えるが、川の転石から推して花崗岩系のものと思われたが、食料が限度に近くなったので心残して引返し、同じコースを通過して下山、市父で探検隊を解散した。

その帰途、予てから耳にして居た節婦の砂金を一見して行く事とし、宮本、高尾の両君と共に節婦の宿で旅装を解き、早速海に飛込んで太平洋で山の汗を洗い落とし、サッパリした気分で生きのよい魚料理に舌づきみを打ちながら夕食を味った。翌日から3日間、節婦の裏の小沢及び台地一帯を調べた。

海岸から台地にかけて一般に砂金がある。市街地裏の丘一帯に川バラスが分布して地形的に太古には新冠川が節婦の浜に流れて居た時代があったかのような感じのする処である。合金は余り濃厚ではないが、採金方法を合理化すれば引合うと思われた。

2.1. 日高銅山開発の巻

大正7年の夏、初めて入山したユークেশオマナイで銅鉱を発見し直ちに出願したが、此付近一帯がクローム鉄鉱の産地であるので、既にクローム鉄鉱としての先願があり、試掘三鉱区と出願中四鉱区を買収した。

其他友人の懇請により共同で運営する事になったが、例によって探鉱費意の如くならず、自然着業が延引している内に、友人は此の山の鉱石が特殊な蛇紋岩中の酸化鉱塊である為、色々と細工品等を試作し、各名士に贈呈して鑑定を乞うた処が、下田歌子女史が古典から「古代上流社会の高貴な人々の首飾りの玉に災難除けの神玉として必ず一個使用した玉垂れの玉と称する貴重品の原料」だから之を溶かして銅を取るなどとは、とんでもないと言う事になり、爾来再三友人の訴え原鉱を後らされ、友人は東京で加工して小遣い稼ぎをした様だが、こちらは三文にもならず、其俸骨董品扱いになって、空しく山を死蔵して年を経てしまった。

昭和4年1月にY氏此の山の開発を申入れ、資金造成の為株式会社を組織する事を提案されたので、関係者一同協議の結果之に賛成し、茲に「日高銅山株式会社」が発足する事になった。

同年7月、早稲田大学から採鉱、冶金、電気、地質、分析の各専門教授に学生を交えた調査団が来山して、地質調査、電気磁気探鉱、精錬試験等を行った。其結果は小鉱床が多数散点して賦存する状況を示し、有利稼行の出来る大鉱床は期待薄となった。其後、塹壕探鉱を試みたが、結局電探を裏書きする様に2、3の小鉱体を掘り当てたに過ぎず。当時、日立に一車送鉱し丈けで資金も続かず休山するに至った。

2.2. 大正6・7年頃扱った其他の鉱山

イ、見市鉛垂鉛鉱山

大正6年の夏、O氏のすすめによって爾志郡熊石村見市川上流に三鉱区を出願、入山探鉱の結果、ホルンフェルス中の石英主脉（鉛幅1尺、銅1%鉛8%垂鉛12%）及支脉数条、花崗岩中の黄銅鉱脉（幅20糎、銅8%）一条、その他モリブデン鉱を含んだ花崗岩塊の転石等を発見した。

然し、地形余りにも峻険で、特に当時は八雲道路など話もない時代であったので、道路費に莫大な支出を要する事と、一面脈が一般に細い事などの為に、操業の見透し立ち兼ねて一応解消した。後年、三菱で鉱区を設定し一巡り踏査したが、探鉱開始に至らず放棄した。

ロ、カニカン岳金鉱

大正6年6月、余市の高橋忠治氏の発案で利別川上流右岸に聳えるカニカン岳一帯を西島牧との分水嶺迄六鉱区を共同出願した。利別川の砂金は渡島の千軒岳、尻内川及び、日高染退川の砂金並びに様似の金山等と共に旧幕時代から開発宣伝された砂金地で、此背面の島牧泊川も又旧幕時代の金鉱探鉱の遺跡のある処で、カニカン岳は両砂金川の分水嶺をなし、山名のカニカンはアイヌ語の「金のある山」を意味する等の諸点から予て注目して居た地帯であったので、翌年の夏一巡踏査したが、期待に反した細いもの斗りで見込立たず、自分だけ脱退して鉱区は高橋氏に贈呈した。

忠志別川の上流には右岸に島牧瀬棚両郡界の山、左岸にカニカン岳が相對峙して聳えている。両山共、忠志別川に面した斜面は山の7.8合目迄は緑泥片岩を主とした古生層で、所々に石灰岩を介在し、時に石英片岩、ホルンフェルスも見られる。

頂上付近は両山とも花崗岩で、鉱床は此花崗岩に胚胎した含金石英脈であるが、カニカン岳の方は花崗岩中に硝硅化して岩脈状に見える部分があって大鉱床とさわがれたが、結局網状の石英脈で概して低品位、時に富化部もあるが局部的で変化激しく、又郡界の山は概して風化した様な軟質の花崗岩の中に、数条の石英正規脈の胚胎を推定させる転石の散布状況で、幅は5.6寸乃至2尺内外と推定された。

両山とも現況では地形上莫大な探鉱費を要するので微力の及ぶ処でないと考えて手を引いたが、密かに有力者の果敢な投資を希望していた。

処が其後昭和6年頃札幌市の雑貨商H氏と元鉱務署員のT氏が共同で島牧郡界の山の方に一鉱区設定して開発する事となった話を聞いて、山のため大いに成功を祈って居たが、偶々T氏の好意で同氏苦心の跡を見せて貰った。

其時の状況は、島牧に向った処に赤焼け幅20厘の石英脈に樋押坑道を設けて7米程押しあつたが、此脈は平均して100瓦の品位を保って居た。

又、忠志別川に向った処から山頂の転石群を目標に立入坑を約30米余掘進して未だ着脈して居なかつたが、途中10米位の処に花崗岩の一部がアブライト化した処があり、之に不規則ではあるが全体にわたって含金が認められ、研究を要するものと思つた。

又、未着脈の露頭部で乳白色のものに時折タングステンの小斑点の散在する処があり、現状では単に存在を認める丈けだが、徹底探鉱の暁には特殊鉱物の潜在も期待されたので大いに激励して置いたが、作業の跡を見ると一間の道路すら造らず、彼の峻険な溪流を命がけで往復して居る状態で能率上らず、遂にT氏の死去により休山放棄された。この山は頂上は笹も短く踏破容易だが、中段に入ったら根曲り竹で身動きが出来ない。

ハ、小樽奥沢水源地分水嶺

高橋忠治氏のすすめで大正7年の春、小樽勝納川水源と余市赤井川の分水嶺に金銀銅3鉱区を出願探鉱した結果、重晶石の大露頭及び夥しい重晶石、石英の大転石の広く分

布して居るには一驚したが、当時重晶石は採算不引合で、単に金銀の脈石のみを夢見ていた時代の事とて、散々腕掛けして見ても一向に金が見られないので、之又、カニカンと同じく自分脱退して高橋氏に贈与した。之が後年の堺化学工業松倉鉱山の前身である。

2.3. 徳星鉱山の巻

旭川市の阿部徳蔵氏から「大正13年の末にブローカー某が見事な金鉱石を持参してすすめたので直ちに三鉱区出願し、14年夏探鉱して2.3の露頭を見たが品位が甚だしく低い。是非実査して指導して貰いたい。場所は上川郡愛別村、愛別川支流マタロクシュベツの上流、通称丸山と称する山を中心とする一帯である。」との便りが来た。

阿部氏は元渚滑の営林区署員で、退職して現在木材山林等の仲介を業としていた人である。早速旭川に出た序に同氏宅を訪問、先ずブローカーの提示した見本を見ると、紛れもない鴻之舞鉱山元山の上鉱である。阿部氏は之に一と眼ぼれして何がしかの発見料を出したと言う。

次に其後同氏が現地から持ち帰った沢山の見本を見ると、何れも一と目で判る不毛の石英であるが、然し鉱質はどこか富鉱部の存在を望まれないでもないと言う顔をして居るので、取敢えず現地を見る事にした。

時に15年5月中旬、里では既に蒔付けが始まっているのに、現地は一面の堅雪に覆われ、僅かに川の水面が顔を出し、日向の斜面には稀れに地肌をのぞかせて居る処もあった。

川の露頭と言うのを案内されたが、殆んど不毛石英で同氏の宅にあったのと同種である。フト、南斜面の僅かに笹の出た処を探して見た処が、銀黒の縞も鮮やかな上鉱が転んで居る。三箇所程同じ状態の転石を発見したので、勿々旭川に帰り懇談の上、当方で一切の探鉱費を出す条件で契約を結び、北の王から野外探検の熟練鉱夫3名を徳星に入山させた。

自分は当時、北の王其他で非常に多忙をきわめ、徳星行きが案外遅れて居たが、其の間に鉱夫達は雪消えを待たず、残雪を除いて探鉱に馬力をかけ、優良鉱脈数本を発見して忽ち業界に大評判となったので、頻りに業者が入山し、其の内の或る者が共同権者に取り入り、一寸厄介な内約をして仕舞った。

之が打開に苦慮した結果「僕は元来海のものか山のものか判らん山を、仕上げて見るのが目的で苦勞しているのだから、有力者が進んで開発して呉れるなら、我児の出世を見る様なもんだから、僕としての希望は達したも同然、何の他意もないから気にせぬ様に」と快く契約を解除して退陣した。其後、色々の葛藤や曲折があった模様だが、遂に目出度く日鉱に売出となった。

2.4. 浜中の銅鉱の巻

大正15年厚岸郡霧多布に遊んだ時、浜中湾の海岸の銅鉱の談を聞き、霧多布からの帰途、岬を廻って厚岸湾の浜を歩いて見た。噂の通り昆布番屋の屋根石の中に漬物石ぐらいの大きさの見事な銅鉱が使用されているのを見て、拾った処を教えて貰った。湾形の中頃である。しばらく探して三つ斗り拾った。浪にもまれて磨き上げた玉の様に、金色燦然としてツルツル滑らかになって居る。帰札後分析したら次の通り。金15瓦、銀

3 疋、銅 25%

早速一鉱区出願、翌昭和 2 年 2 月許可を得て其夏、再び現地に入って付近を探鉱したが、海岸は砂乃至玉砂利で、時化のあと砂がさらわれて玉砂利ばかり露出した時よく拾えらるると言う。

此砂浜の背後は第三紀層の頁岩で緩傾斜をし、之と略直角に数条の細い脈が層を割って走っている。此細脈は方解石と石英を脈石とし若干の硫化鉄及び稀れに黄銅鉱の点在を見る。又一方、海の方は、此湾は大体の形が噴火湾を縮小した様な丸い陥没の跡らしく、沖の方に略円形に暗礁隠見して居る。汀から 7. 80 米の間は浅瀬で陸棚状を呈し、其先は急に深い。

昆布取りの漁夫の話を聞くと、稀れに此棚で取った昆布の根に銅の小塊が着いて来た事もあると言う。此陸棚の何処かに本体があるらしい。結局之を探鉱するには浜のビリの付近から深い豎坑を下げて沖の陸棚の底を潜って進むより方法がない。

容易でないときらめて、武田恭作氏に之を贈呈、氏の取捨に一任した。氏も翌年、漁船を雇って海中を探させ、此陸棚の一部に一段深い凹所があり、其中が根源らしいと推定されたが、何れにしても一寸危険率が多いとして見合わせたと言う。後年此の湾の外側に注ぐ川の上流で銅鉱が発見され多少売鉱され、後、日鉱で探鉱した事があるが、何か一連のつながりがある様に思えた。

25. 永豊泊川付近探鉱の巻

大正 15 年の秋、島牧郡永豊の江川常作氏から話があり、泊川中流の同氏出願鉱区の探鉱費を面倒見る事にして、翌昭和 2 年夏、現地調査に出張した。宮内温泉の 1 里程上流泊川右岸の急斜面に鉛垂鉛の細脈あり。

又其対岸上流の鉱区の金鉱と称するのは発見者が位置を忘れて見当らず。結局硫化焼けの 2. 3 カ所あるのを見た丈で下山した。此時、江川氏から泊川上流黄金沢の温泉付近の金鉱の話聞いたが、ソコへ行くには夏より堅雪の頃が楽だと言うので、翌年 4 月江川氏等と一行 7 人で大平山を通過して黄金沢温泉に到着、残雪を除けて小屋掛けし、二泊して付近の川を調べ転石の多い事を確かめ後日に備えて帰札した。

その時序で温泉を調べて見たが、2 町歩ばかりの間、湯華で台地が出来ていて、其台地内に 7 カ所の湧き壺がある。其内の一つ川岸の分の湯壺を片付けて入浴した。此壺の一方の側壁が大形の安山岩塊で出来ていて、其上を一面に苔が筵の様に覆い、塵が湯槽の内に落ちて来てうるさいので、之をガバリと剥ぎ取って岩面を洗った処が、此岩面に「金花湯」と大書した彫刻があり、其下に矢印が下流向けに書いてある。

彫刻の角が大分摩滅して居る処から見ると余程昔のものらしい。尚大字の下に「柴田」と中文字で掘ってある。恐らく昔の金掘師の残した跡と推定した。

尚、これは後日、長万部探鉱中に判明した事だが、此の湯の台地の山際に自然薯の群落があり往時の野菜畑の跡らしい。何れにしても、徳川時代のものらしく先人の努力に驚いた。

「うらめしや掘らぬ直りもあるものを 資金に朽ちなん鉱山ぞ惜しけれ」

(相模替歌)

26. 定山溪探鉱の巻

大正8年頃、知人の依頼を受けて碓別川支流の鉛垂鉛鉱（後の豊富）を見た。品位は良好だが規模小と推定。次いで同じ頃、友人の漫然出願鉱区の調査を頼まれて豊平川本流の奥サウス沢付近から漁入沢方面を踏査して数条の石英脈を発見した。脈幅は相当のものだが含金痕跡で問題とならなかった。

次いで昭和4年の夏、K氏と二人で豊羽鉱山奥の踏査を試みた。定山溪を起点として出発し豊羽鉱山の「長門」の長屋のツブレた跡で付近に散らばっている古材で仮小屋を造って一泊。翌朝未明出発、上流へ遡って愈々分水嶺近くなった処に、非常に硅化された石英粗面岩で一見脈石と見誤るほどの好個の外貌を俱えた岩脈が屋根の山骨を型造って脈状に発達しており、念の為め検椀を試みた処が1～2粒の金粒が認められた。

採算的でないが兎に角微量乍らも含金している。之を追う様にして目的方面に進んだ。此岩脈は途中藪に隠しつつ頂上まで続いている模様である。

途中白井川と定山溪白井川との分水嶺に出ると、地形が豁然として開け高山植物帯をなして眼をさえぎる巨木もなく、右に余市岳の雄姿を眺め、広々とした緩波状の高原の中に件の硅化石英脈の上に各種の高山植物の盆栽にせまほしいものが見事に生えている。

余市白井川の中の川支流に下りて見た処が、其岩石は地表部は褐色に汚染されて居るが、崩れた箇所の新鮮な面では真に美しいバラ色を呈している。バラ輝石を豊かに持った石らしい。帰途は同一コースを通過して定山溪に出たが長門から2軒ほど上流の川中で黄銅鉱の縞状に入った見事な転石を拾ったが根源は豊羽の鉱区内と思われる。尚此の探鉱行は度々熊に脅かされた。岩脈のサンプルを採るべくハンマーを振り上げた時に、K氏に「熊だ！！ やめろ！！」と注意されたが、時既に遅く、カーンと一撃、打って仕舞った。幸い熊は其音で逃げて呉れたからよかったものの、実に危なかった。・・・熊はバサッと藪にもぐったら最後、音も立てずに雲を霞と見えなくなるので、・・・其あとは却って薄気味が悪いから、しばらく火を焚いてラッパを吹き吹き休息してから出発した。「笠の原かきわけ見れば黒熊は 雲を霞と逃げて白浪」

（法性寺入道替歌）

翌5年の晩秋、定山溪の某氏宅を尋ねた時、200瓦以上含有の金鉱見本を見せられ、次の様な相談を受けた。「此金鉱を或人が最近発見して莫大な発見料要求をほのめかしているが、自分には略見当が付いて居る。

処が其地域内に他人鉱区があって5、6件買わねばならないが、発見者の言う発見料の半分以内で買占め出来るから今の内に買収したい。交渉は自分が直接当って出来るだけ安くさせるから、資金を出して僕と共同にして開発して貰い度い」というのである。

早速之に同意して同氏の奔走によって、許可1、出願中5、計6鉱区を買収し、翌春、融雪早々、屈竟の探鉱得意の部下3名を入山させ、自分も数回立ち廻って探鉱したが見本に近似した石さえ見当らず。結局某氏がマンマとかがれたものと判った。（後日見本の鉱石は喜茂別村壮溪珠上流のものと判明した。）

此探検で主目的は外れたが副産物として砒鉱々床と鉄鉱々床が発見された。・・・砒鉱は碓別川本流奥で、鉄鋼は豊平川本流寄りの鉱区内で、・・・当時、某氏との共同目的も失敗に終わったので之が解消協議の時、僕は砒鉱のある鉱区に著しい硫化鉄地帯のあったのに興味を持ったので、碓別奥一鉱区を残し他は某氏に返した。其後、昭和10年頃、

日本農業株式会社から原鉱のまま走鉱方申入れがあったので企業化を画ったが、公害問題などのため実現不可能となり、遂に希望者に贈与した。鉄鉱の方は後年某氏が有力筋と噸掘り契約し巨利を挙げたと聞いて居る。

27. 沼の上鉱山の囑託となるの巻

昭和5年の春、三菱沼の上鉱山の初代鉱山長高橋逸作氏の招きに応じて登山し、初めて対面した。此時の氏の招待状に「道内各鉱山の事を聞きたいから有合わせの資料持参せば好都合」とあったので、従来自分の手掛けた山、現在関係している山及び道内著名の山の手許にあった資料をかき集めて数種のサンプル報文など携行した。先ず初対面の挨拶もそこそこに携行の資料について自分の見た儘を縷々説明した。

此時、氏は本店に囑託推薦の談も洩らされたが、突然でもあり且つ又自分は赤貧は年中行事ながらも各地に多くの部下も抱えて居り、特に自分自身が其器でない事を知って居るので固く辞退し「折角の御好意だからアウトサイダーの立場のまままで微力を尽くす事を誓って辞去した。

爾来昭和6年一杯は終始沼の上と連絡をとり乍ら、自分の関係して居る各地の山の踏査結果を情報として沼の上に報告して居った。

翌7年早春、高橋氏から「三菱本店から（今堀自身の関係事業は従来通り継続して差支えない）と言う自由の立場で囑託として採用に認可を得たから」と懇切に勧められるままに厚遇に感じ不肖ながら之を受諾し、昭和7年4月1日から同社の囑託員となった。

当時氏の要望によって、部下の内の探鉱に長じ且つ純良な人物、渡辺、佐藤の兩名を沼の上に斡旋した。爾来社命によって各地の調査に東奔西走して今日に及んで居る。其間共同調査探鉱した山は枚挙に暇ない次第だが、是等社内に関する事柄は差控えて、其間、従前に引続いて「今堀鉱業」として関係した鉱山の事を記載する。

28. 長万部鉱山の巻

昭和8年の晩秋、部下の探鉱員島山新吉が自分の受持の黒松内付近一帯の探鉱中、利別川と大平川及び二又川の分水嶺で露頭を発見、直ちに三鉱区出願したが、此の中に他人のマンガ先頭願区あり、之を買収し、翌春早々現地を踏査したが、何分根曲り竹を相手にして居たのでは徒らに時日を空費すると考えて、山の頂上を峯伝いに丈余の根曲り竹を狩り払わせ探鉱幹線道路を造った。此の刈払いによって見失った露頭が偶然にも路線に突き当たり、続いて2号、3号、4号といとも簡単に次々と発見された。

扨て、どうやら大物になるらしいが、資金も相当必要となり之が造成を考慮中、一知人の紹介で松江喜三郎氏に初対面、意中を打明けて相談の結果、氏が資金造成を引受け、相提携して鉱山開発を進める約束が出来た。氏は増毛の漁業家の息子で財界に学友多く、外交に長じ投資勧誘の奇才の持主であった。早速東京の有名者から出資させ、積極的開発に着手した。取敢えず、先年見た島牧の金花湯の川の転石を想い起し、保護鉱区を追願、合計十二鉱区を設定した。此の中には後の阿寒金山発見者三浦幸男氏の出願あり、同氏の好意によって之を譲り受けた。

次に先例に鑑みて、探鉱幹線道路を島牧黄金沢の金花湯迄延長し、続いて11号迄の露頭を発見、一方二又駅と二又温泉の荒廃道路を改修し、温泉と山元間の本道路開削を

行い、事務所、火薬庫、飯場等一通りの設備を整え、続いて長万部岳付近に土砂鉱を発見、愈々企業化の段階にまで漕ぎつけた頃、松江氏の資金繰りの都合で長万部鉱山株式会社引継ぐ事になった。

其後幾多の曲折を経て日本鉱業の所有に帰した。自分探鉱中の経過から推測するに此山は下部で硫化物を主体とする鉱床に推移すると思われるので、その見地から徹底した探鉱が望ましい。

「白露にぬれて分け行く秋の野に ちらと見つけし玉の鉱脉」

(文屋朝康替歌)

「あけぬれば暮るるものとは知りながら 尚うらめしき秋の日足よ」

(藤原道信朝臣替歌)

29. 千歳 (美笛) 金山の巻

昭和8年の秋、社用で出張が続いて永らく留守した時知人の近藤謙一郎氏が何回も来訪して僕の帰宅を待ちあぐんで居たと聞いて、帰札後、連絡によって早速同氏が辻氏を連れて飛んで来た。

辻氏は魚釣りに行って拾ってきた石を持参した。一見すると銀黒入りの優良な金鉱であり、場所は美笛川で同じ石が頗る豊富にあると言う。時は彼是1カ月前のことである。・・・手遅れかと思っただが、取敢えず近藤氏の名義で3鉱区出願した。やがて案じた通り後願とわかり、続いて大野直澄氏が先願と言う事も判明した。

翌9年の夏、北大理工科の助手金成明氏の分析結果から話がパッと広まり、同氏の友人、東京の熊谷省三氏が売山運動を引受ける事となり、先ず三菱鉱業に申込みがあり、廻り廻って僕が調査する事になった。・・・晩秋10月初旬である。

降雪期が近いので商談を促進させる為少しでも多く見る必要を感じて、腹心の部下と甥の石井を連行し人夫5名を雇って、約1カ月間、各露頭の結測、切り割りを行って或る程度の推定が出来るまで調べる事とし、僕は概査して一旦中間報告に下山、11月再度登山し探鉱経過を調べて現場を切りあげた。

丁度晩秋の雨の多い時期で、山小屋の屋根は役に立たず、1晩立ちつくしたことも再三の始末で、仕事も意の如く捗取らなかつたが、山代位は局部の直りで安全回収の数字は掴めた。僕は是非会社を買収して貰って開発に参加したい一心から見本及び調査資料を携行して上京した。

大野氏は頗る変わった性格の持主で、ともすると商談打こわしになる恐れがあるから、一切を熊谷氏に一任させて会社に当って貰う事にした。此時、熊谷氏の学校先輩の本社の調査課山口技師が大病で慶応に入院中の偽話が円滑に行かず、雪期切迫のため再調出陣の腰重く、結局売人側を説いて「今は若干の契約金を交付して即時名義加入し、明年或程度探鉱進行を見てから、会社の見立評価で売山に応ずる」と言う事で了承させたが、会社側の容るる処とならず、竟に不調に了った。

こんな時こそ、僕の手許に僅かでも資金があれば、当面のつなぎ手当をつけて、会社の為一臂の力を致し得る訳だが、運つたなく、丁度年中行事の十八番、赤貧の場開幕中で徒らに切齒扼腕する斗り、金成氏が遂にシビレを切らして中島鉱業に走り、若干の手金を貰って不見転即決、同社に売山契約が成立した。

此時程、大会社の動き方の歯がゆさを痛感した事はない。要するに巨象を三畝の沢に追込んだ様に、一寸やそとで、向きを変える事すらできない。・・・そも何が故に然るや。・・・封建時代からあり勝ちな小心翼翼、自己保身に汲々として責任回避を是事とし、一朝事あれば只すら累の及ぶを恐れ、顧みて他を言う輩の集まりか・・・と言うに、否々、左に非ず、実に錚々たる叡智俊才林の如く雲の如くあつまって居るのである。・・・

而して尚且つ此の痴拙を敢て冒す所以のものは何か？・・・会社の社会機構そのものの欠陥もその一因であるかも知れないが今回の事に限っては、一に係って「現地踏査を行っている只1人の僕其のもの」の不信の致す処である事は真に明白で、其後の山の発展を見るにつけ実に慚愧に堪えない。・・・

中島鉱業に買収された後、僕の願った近藤名義鉱区は大野氏の出願方法が少しでも区域を広く押える目的の為か、自己出願隣鉱区間の距離を大きく開いて願った為に僕の分が第2願目である処から、其間隔距離のブランク部分が幅120間の道路の様な丁字形に優先許可される事になった。而も丁度、各脉寸断される形になって中島鉱業にとって真にうるさい鉱区になった。然し乍ら、他社に売られた山の中に割込んで、意地汚い真似の出来る様な気の利いた僕でないので投げやりにして居た処が、是を逸早く調べた第何願目かのS I氏が九拝百拝して「何とか助けると思って安く譲って呉れ、・・・実は妻に○を出させて美笛を願ったが、全然後願で頭が上らないから、是を戴いて行けば妻に面子が立つから枉げて願を叶えて呉れ」と平身低頭して頼まれた。

此の男は元、雄武の商人で鴻之舞の時、飯田木材の店員であったが、其後鉱山狂になり、ヘソ繰りを貯えた女を妻に迎えて山に注ぎ込んだ。爾来恐妻のサンプルになり、外交辞令にまで「妻に聞いて返事します、・・・妻が斯々言いますから・・・」と言う調子で「妻のたまわく」というアダ名を貰っていた男だ。

僕は此時「3文貰っても売ったと言われては癪だから欲しいなら呉れてやるわ」と言う調子で無償で彼に呉れてやった。而も近藤氏や辻氏には残念賞として若干の酒手をやってある。・・・後日聞く処によれば、彼は中島鉱業に10数万円で売付けたと言う。・・・後々迄問題を残した「丁字鉱区」の由来記である。彼も妻君の前で久し振りに得意であったろうと、独り微苦笑を禁じ得なかった次第だ。

尚、先願の栄をかち取った大野氏は千葉県近頃の原子関係で有名となった東海村の豪農の家に生まれたそうだが大いに変わり種で祖先の美田で徒食するにあきたらず、独力で大いに為すあらんを期して、海外雄飛の意図を以て先ず海軍に投じ、満期後、心機一転、鉱山探検に志し広く鉱山関係の秘史、古記録を漁り、之を追うて各地を漂浪したと言う。

美笛の前に渡島の千軒岳探検を思い立ち、友人の酒屋の息子に壮途を談って支援を乞うた時、2万円ポンと出され、之を以て道内各地を転々としている内に美笛に際会！・・・此山の代金受領の時、自分の所得分として、熊谷氏から渡された金を封も切らずに其の俵、件の酒屋の息子の前にポンと投げ出し「之の丈け貰ったから僕に君の呉れると思う丈け小遣いを呉れ給え」と言うたと言う話は後日彼を取巻く人々の様に語る処で真に愉快な一面を持って居る。・・・

彼も又本道鉱山発見に努めた変わり種の1人である。一面余りに粗放で無計画である

が、一面又人情真に濃やかで掬すべきものある純情家で、美笛の事で雑誌「キング」に大々的に記かれて天下に名を知られた。・・・皮肉にも僕は後願になって調査に苦労し、第1回の中間報告にサンプルを背負って下山の時など「モンルンピパイ」の本山1号露頭の滝壺にドンブリと迂り落ちて、折柄のみぞれチラチラ降る中をフルエ乍ら下山した。・・・イヤハヤ余りにも対照的だ。

「名にしおう千歳の山で大野氏は 人に知られてもうけけるかな」

(三条右大臣替歌)

30. 第2回知床探検の巻

昭和9年の夏、根室国目梨郡サキモイ川、ロクシベツ川、茶志内川等の銅硫化鉄鉱床の探鉱をした時、サキモイの大野氏宅に1泊した処、明朝標津町有志の知床半島探勝隊がラウス港を出帆すると言う話を聞き、大野氏の斡旋で此探勝隊の1員として参加し、一行23名、8月4日の朝ラウス港を出帆した。船は100吨位の発動機船である。

折悪しく天候急に悪化して猛烈な暴雨となり、船体の動揺甚しく今にも転覆せんとする事屢々、一同探勝どころか談笑の元気もなく、顔面蒼白、不安の沈黙のうちに午後3時、辛うじて予定地赤岩海岸に到着、波浪を冒して迎えて呉れたハシケに乗って、幾度か波をかぶり、水船となり乍ら命からがら上陸して、昆布番屋に1夜の宿を頼み、各々汐に侵された衣類を干かし茲に1泊した。

晚餐には一同「日和上げ」を斗り、大いにメートルをあげて深更までさわぎまくった。5日朝・・・北風で浪高し・・・兎も角、目的の知床半島突端を見んものと、風雨を衝いて出発す。突端は此の番屋から2軒斗り北方に当る。或るものは竜の跳るが如く、或るものは猛虎の嘯ぶくが如く、奇巖突刃として乱立する間を激浪岩を咬んで咆哮する様、真に壯絶豪壯の景観である。

正午頃宿舎に戻る。風益々強く浪愈々高し、沖を見れば本船は山の如き浪に木の葉の如く翻弄されている。・・・やがて2時頃本船は抜錨して何れかに逃避する。・・・一同稍心細くなったが他に方法もなく同所に更に1泊した。此の晩は、さすがに一行の左党連も鳴りを沈めて、昨夜の呑み残しの2本のアイヌビールをつつましく分けあって呑み、メートル上らず8時頃一同寝に就く。

夜半から風もおさまり翌6日は風雨共に息んだ。さてあてなしに本船の回航を待つとすれば食料はなし、合議の上、陸路ポロモイ迄出る事にする。ポロモイは小形の湾を為して浪静かな此附近の漁船の避難港であり、番屋もあり、食料にあり付ける事と便船も得易い。何れにしても此際の万全の方法であった。

やがて甲岩の岬、念仏坂など言語に絶した難所を超えて辛うじて赤岩から3里のポロモイに到着、幸い漁場の発動機船に便乗する事が出来た。出帆までの1時間斗りの間、一同思い思いに糸を垂れて釣を楽しんだ。針を下げれば忽ち曳く、下げる、上げる、殆んど釣瓶をあやつる如く目まぐるしい程釣れる。各々始末に困る程大きな獲物に興じて、やがて出帆、夕刻ラウスに安着した。

尚、赤岩では小舟を借りて浪を冒し赤岩のサンプルを採った。赤岩は全体が重晶石の網状鉱床で、分析の結果金は3瓦であった。又便船が途中合泊に寄港したので、先年見た海岸の露頭の試料も採取したが、時間がなかったので旧坑には行きかねた。

3 1. ウトロ硫黄山探検の巻

昭和11年硫黄好況の頃、斜里半島遠音別附近を探検しウトロの硫黄山を踏査して、地形上から非常に発展性潜在に興味を感じ、之が開発を思い立ち、当時の所有者上杉氏に相談の結果、快く実費で譲って呉れたので早速探鉱員松野に事務員1名をつけて現地に派遣し、地元の人夫8名を雇って、約3里の刈払、道路を開設、探鉱小屋1棟を建設して探鉱を進めた。

その結果、従来の露頭は鉱体の一端が偶々被覆物の崩潰脱落によって露出したものの如くで、其接続地の山頂部は平坦な台地となり、カルデラ跡の凹地もあるので発展性を認め、台地に5箇所の試井を穿って見たが、被覆物深く且つ火山抛出岩塊を交えて作業困難の為、何れも鉱床本体迄は達し兼ねたが猛烈な硫黄臭のため作業員の健康上中止した。

当時斜里の皆月硫黄の大噴出で此地方一帯が人気の焦点となっていたので、横浜の貿易商内海商会から技師が派遣されて商談進行中、偶々三菱で本道硫黄界に進出を考えて居るから、一応調査すると言う事になり、内海との商談を打切った。・・・やがて本社の調査を受けて12年末買って貰った。此山代が下川鉱山の開発に大きく役立った。

此地方は夏期、海霧の襲来する事で有名で、一旦濃霧に襲われると、忽ち朦朧として咫尺を弁せず、附近に居る作業員同志が互に話し合い乍ら「声はすれども姿は見えず」と言う状態になるという有様である。・・・国境の山に立って天気の良い朝に、太平洋上に浮ぶ国後島の美しい島影を眺めて居ると、遙か洋の彼方の地平線に一抹の白い線が引かれたと思う間もなく、其線が見る見る内に太くなり、遂に麗しい国後の島影を覆い、忽ちにして自分の身边を包み、奔流の如く北見側の沢々を流れて行く。自分はさながら秀峰「ラウス岳」や国後の「チャチャ山」と相対峙して、悠久の天地を語る運上の客となり、將に羽化登仙の思いを為すのである。

「潮風にたなびく霧の絶えまより もれいずる山の露頭のさやけさ」

(左京太夫顕輔 替歌)

3 2. 北龍砂鉱開発の巻

昭和12年雨竜郡沼田町字北竜に山林の売物が出た。・・・元、沼田町の開祖沼田喜三郎氏の造材跡の山林で、大正2年大凶作の年、沼田氏が此山林内の砂金を開放して農民の窮乏を救った処である。・・・

早速、中頓別から大木太七老外2名の砂金堀を呼び寄せて、此山林に入地させ約1か月間砂白金を調べさせた結果、沢の中は殆んど掘り尽されて居るが、高台一帯にも平均に埋蔵されて居り此の分は殆ど手つかずに残されて居る事が判ったので大規模に水圧採取法でやれば十分引合う見透しがついて直ちに此山林530町歩を買収した。続いて既存鉱区も買入れ、更に砂鉱新出願も行って、色々と計画を練って見た。

処が、此山林から源を発している河川は悉く其下流の水田を灌漑する為にダムが造ってあるので、どの沢も使用出来ない状態になっている。ソコで、昔附近一帯が本願寺農場であった時代に、感慨の為にニタチベツ川から導水する計画で、遙か上流から此山村の麓に近い処に水路を掘り、其後何かの都合で中止された俟になって居る導水路跡を復活して、ニタチベツ川本流の水を掲げる計画を樹てて見たが、是亦地元から猛反対が出て不可能となり、最後に、山林から源を発する小沢の内、最も有望な高島川を利用する

位置にある農地10戸分48町を買収した。

幸いな事に、此農地は当時拓銀に担保流れとなって、拓銀附属の北海道土地会社のものとなって居たが、悪質管理人の為、小作が逃げ出し、ダムも水路も破損するに任せて使用に堪えず、畑も水田も大半は荒廃して草茫々の藪となり、見るも無慚な姿となって居たので、砂鋤の作業には却って好都合と考えた。・・・

処が、一部残って耕作して居る小作人から強い反対意見が出て仲々簡単に行かない。・・・兎角する内に、戦争は逐次拡大され、食料増産がやかましく叫ばれる様になり、計画遂行は愈々困難となり、遂に断念する外ない情勢となった。茲に於て、熟慮の末、はじめ産金国策に応じて計画した熱意を、180度の方向転換を断行して、食料増産の国策に応ずる事に決意した。

早速、沼田町の富岡正勝氏に依頼して、荒廃した畑地及び水田は悉く之を再墾し、水田は特に全地域に客土を行い、ダム及び水路とも完全に改修して人も羨む程の美田良圃を造りあげた。此の外、馬なき者には之を買ってやり、家なき者には家を建ててやり、又材料を供与する等して、多額の失費を重ねて漸く理想の農地を造り挙げ終戦の前年から自分も一時沼田町に籍を移して、耕作夫5名を雇って15町歩の自作を行った。

やがて、敗戦後の大改革で農地法の実施される事を聞いて、僕自身、年来の主義として「農地は自ら耕す者が所有すべきである」という堅い信念を持って居たので、町の当事者からの交渉をまたず、小作関係者一同を集め1坪も残さず全地開放を言い渡した。此の際、殊更に、事前に小作人に言い渡しを行った事に就いては次の様な理由があった。

1、此の農地は北竜市街地の1部になって居り、札沼線北竜駅が農地の中に在り、警察の駐在所も農地を無償提供して建ててあり、学校はすぐ接続地に、又商店の軒を並べて居る本通りの裏に接するため、小作人と言っても純農は2、3名丈けで他は皆兼業である。

商人あり、かじ屋あり、豆腐屋あり、魚屋あり、局長ありと言う有様で、僅かの面積に20戸もあるので、農地法を厳正に決行されれば所謂零細農斗りで、殊に他に生業を持って居るので2、3名を除いては、殆ど不適格者に落される恐れがあるから、此の際、事前に互に協議して、配分について内紛など起さず円満に土地が貰える様結束させておく必要があった事。

2、僕の自作地15町歩は現在の小作人に関係の無い荒廃地を改良した1部であるから、之を現在の小作人に適正配分して、各自の零細面積を少しでもふやして置く事のため、之を予め円満にきめて内紛の種とならない様にする事。

以上の様な老婆心から予告を行った訳だったが、扱て愈々農地法実施後の結果はどうであったか。・・・僕は心ひそかに、小作の中でも他に生業を立派に持って居る人々の内、たとえ1人でも、立法の趣旨に感じて此際土地配当を辞退する者が出るかと念じて居たが、豈に計らんや、力のある者ほどボス振りを発揮して、強引に必要以上に配分を受け、而も、後年耕地の値上りを見て1部を売却、金儲けの種にする者さえ出た。

何の事は無い。政府の立法の趣旨も、僕の採った方法も、結局メチャメチャに踏まれた格好で、これでは「イヤにヒューマンストを気取って、宗裏の仁じゃないか、フン」と笑われても仕方のない結果になった。

「日本人はどうしてこんなに貧乏くさく、利欲にガツガツするのかなー」と、つくづ

く情けなく思った。

余事はさておいて、当時鉱業会も混沌として、為す事も無かったので、業界の虚脱時代を僕は山林の1部に小屋を掛け、約1戸分程荒地を開墾して、不馴れな鋤を握り手に豆を出し乍ら農夫の1年生をやった。初めて自分の手で作った陸稲を食べた時は、さすがに嬉しかった。(沼田付近で陸稲の試作をやったのは僕が始めてだとの事)其内に、日本も漸次常態に復し、業界もソロソロ動き始めたので、再び本業の活動に入った。

3.3. 下川鉱山開発の巻

昭和11年下川町ペンケ原野の農家、浅沼某氏が、或る日パンケ川落合沢でヤマベ釣りに興じて居た時、フト見ると、左岸の川淵に青黒い粘土があり、其中に何やら光るものが見えるので、掘って見ると拳大の鉱塊がコロコロ出て来た。・・・有価鉱物に違いないと・・・自宅に持ち帰り旭川に出て鑑定して貰ったのがソモソモ当山の濫觴であると言う。之を聞いて当時旭川居住の故人M氏及び和寒のT氏の両人が現地を見て早速連名で2鉱区を出願、続いて同志を募って外周4区の出願がなされた。

昭和12年の春、部下の1人が此噂を聞き込み見本の小片を手に入れて報告に来た。是迄日頃「北海道に是非とも大煙突を立てる山を」の希望に燃えて、含銅硫化を探し求めて既に幾度か、だまされて失費と徒労を重ねて来た矢先・・・而もツイ前年の年末には御丁寧上名寄の然別川で1件と、両所とも調査不能の年末を控えて、見事な見本に迷ってマンマとだまされたホヤホヤの処だが、此見本を見せられては尻が落着かず「何事も3度」と言う事がある、どうせ乗るかそるか当って見ろ、という気持ちで、早速旭川へ飛んで行き、M氏の宅を尋ねた。折よく同氏在宅で、氏は先づ鉱石5、6個を卓上に並べ、おもむろに口を開いて1席「15尺幅の大露頭で付近2里の間に発達して居る兆候がある」と話はなかなか大きい。

「どうせ冒険事業だから其俵でアッサリ売って呉れるなら不見転で2万円出そう」と水を向けて見たが、2万や3万で売れぬと云う。出資共同開発の線で色々話を進めた末、次の様なことで契約を結ぶ事になり、同氏はT氏の委任状其他一件書類を揃えて出札し、監督局で先願を調べ、書類対照の上、名義加入の手続きをすませた。

契約とは

- 一、契約と同時に今堀加名手続のこと。
- 一、今堀は名義加入と同時に契約金5千円也を両氏に支払うこと。
- 一、成功迄の探鉱費は一切今堀が支弁すること。
- 一、権利は三者等分のこと。
- 一、外周他人出願分の必要な時はT氏が務めて格安に今堀に斡旋すること。

等であった。

尚契約当時、T氏等は予て一流会社に宣伝中であつたので、万一探鉱作業を行わぬ内に相当額で売山の商談成立する様な場合には、相当額の謝礼金を提供するから、此契約を解消して売らせて呉れと云う付帯条件の申出があつたが、之は文書に書かず互の口約として快諾を与えて置いた。

僕の考えでは「多分全然未探鉱の俵買山する会社も無い」と多寡をくくって見たものの、万一、一見して大物と判明する様なものであつた場合を考えると若干気になるので、

今後自分の採るべき態度をきめる為に、密かに踏査しておく必要を感じて、誰にも云わず単身現地に向った・・・当時はまだまだ昼なお暗き密林地帯であり、山親爺の出没も繁く、少なからず身の危険を感じたが、襲われて此の身を失っても鉱山のためならば本望とばかり、五味温泉に泊して道案内に人夫を1人借り、予て図示された落合沢の15尺と称する露頭を見た。

即ち、左岸の川淵の浅い処に、探鉱のための穴が2個掘ってある。如何にも粘土の幅は15尺以上もあるが、何れも青黒い粘板岩の分解粘土で、其の中に粉鉱と小塊鉱を混在する黒い粘土交りの至って細い鉱条が数本見えるだけで頗る貧弱だ。結局周囲の状況から考えて押し出したものと判明したので、付近を尙入念に注視した。

穴の上流15米内外の処で磐が変っている。其の磐境付近の川底にチラと異色ある処が眼についたので、川底の石を取り除けて見た処、川底を横切って居る鉱床の一部らしいものを認めた。苦心して試料を取った処班銅鉱を伴う美事なものだ。ソコで出来るだけ大きな石を其跡に投げ込んで置いた。・・・

次に其対岸の鋪先見当を踏査した。川から数十米の間は沖積土の平地で其先が山になっている。山裾を見たが藪に覆われて手掛かりがない。仮想鋪先より少し下り過ぎると思われる処に、青磐の露岩が藪の中から僅かに顔を出して居るだけで之と云う注意をひくものはない。フト見ると、青磐の少々上流寄りの藪の中に、木の根元に土がチョット顔をのぞかせた処がある。ハンマーでほじった処が赤土で、カサカサの焼け石が交じって居る。見本1個採って、跡は黒土をかけ枯枝などを寄せて置いた。

先ず、之ならソットして置けばわからない、と自信がついて、素知らぬ顔で帰札した。帰宅後、早速件の焼け石を検椀した処が、白っぽい金粒が5、6粒見え、アンモニヤ比色試験で鮮やかに青い反応が出た。まぎれもない、含銅硫化のキャップ、所謂蜂の巣焼である。

「我山は 素人に見えずヤケの石の 人こそ知らね 中はピカピカ」

(二条院讃岐 替歌)

やがて、両氏運動中の二大会社から、相次いで調査に来たが、結果は何れも不調に終わった。聞く処によれば、両氏は山をよりよく見せるべく大いに張り切って、件の穴を盛んに掘りまくって居る内に、底は鉱石が出なくなり、粘土ばかりになったとかで、其意外な事実、両氏は頭から水を浴びせられた様に驚き、百万の夢も一瞬にして消え去り、悄然として下山したと言う。

之等の情報によって、愈々近く両氏から何か言うて来ると思われたので、早速、甥の久末に抗夫1名つけて、露頭付近の野外探鉱をやらせた。・・・結果は、右岸の青磐少々下流にある小沢で、含銅は低いが硫化鉱の露頭を発見したと電話連絡があった。之で愈々裏付が出来、腹がきまった。

果せる哉、其の内にM氏が一件書類を持って来宅した。氏は両会社調査の事などオクビにも出さず、曰く「実は今度T君が北見の興部で有望な金鉱を買う約束をしたので、至急資金が必要になったから、先般貴下の付けた値段でよいから買い取ってもらい度い」と言う。・・・待ってましたと斗り、之を快諾して残金1万5千円成をM氏に支払って、2鉱区の全権を引受け、両氏の脱退手続きを終った。同時に、外周鉱区の斡旋も頼んで、間もなく其4鉱区も格安に買受、引き続き更に5件の新規出願をして11件を確保した。

扱て、今度は愈々積極的に探鉱を推進できる事になったのだが、茲1 両年は八方に投資失費が続いて資金繰りの方は四苦八苦の処へ気に入った山があれば、予算も手元も委細かまわず「ヨシ買った」と言う調子なので、此度も予て予定はして居た事だから、山代だけは、洗いざらい引出して支払ったが、扱て仕事の資金に忽ち苦勞することになった。「今買うと 言いしばかりになけなしの ありたけの金を 持ち出ずるかな」

(素性法師 替歌)

1 2年の8月から野外探鉱を始めたが、未許可の為、借地が出来ず、入林許可で、落合沢の中の川と落合二又にあった営林署の調査小屋を借りて、4, 5人で探鉱を始めた。まず最初に、落合沢露頭の鋪先探鉱を始めたが、磐焼け、風倒木の根元の土、小沢の中の焼け石などを便りに、焼けの発達方向をさぐり、次に之等の焼けを略測で結んで見た。結果として次の事が推定されるに至った。

即ち、露頭線は、落合沢露頭を中心にして両岸に、下流の方向を内径とする大きな弧線を書いて延びて居る。・・・鉱床は大体北西から南東に向う走向で発達して居り、尚露頭線と地形から判断して、北東に緩やかな傾斜をなして居り、焼けの結測によって大体延長に400米迄は確実に延びているものと推定された。・・・

続いて中の川の上流で川底を横断する露頭を発見した。位置は落合沢の鉱床の予想走向に該当する。落合沢と中の川の間は丸山の被覆岩を厚く覆って居るので、此間の探鉱は地下探鉱による外ないが、幸い連続して居るとせば蜒蚓2千5百米に及ぶと言う夢も連想されるに至った。

翌1 3年は、3組の天幕探鉱隊を編成、全願地の外郭から野外探鉱を進めた。・・・何しろ川筋から一步山手に足を踏み入れれば、丈余の根曲り竹か、風倒木の重なり合った原始林であり、夫れを一步々切り開いて行く苦心。加えて4 6時中、山親爺の襲来に備えて、誰か1人はラッパ或いは鐘を、鳴らし続けなければならず、調査も一向捗らぬ内に早や晩秋の気配が濃くなり、未許可のため一応引揚げることにした。

其後、冬から翌年春先にかけて、ポツポツと許可が下り、5鉱区の登録が終った。早速借地願を提出したが、是又、仲々許可して呉れない。どうやら山師ものと見られて居るらしい。「さんざん掘り荒らして拳句の果は跡白浪」の組だろうと見られたらしい。其後営林署にお百度詣りをして、1 4年の夏ようやく許可を受け、立木払下げやら、測量やら、飯場事務所の仮建築やら、探鉱着業準備に多忙を極めた。やがて、一と通りの段取りも付いたので、1 4年の秋、愈々右岸青磐露岩の右手に、はじめて「落合第一坑」を開坑した。

此の時、開坑段取りに携った係員は、M、T 両氏の掘った露頭は川向いにあり、久末の見た硫化は下手の小沢にあるのに、コンナ赤土斗りの処に如何して開坑するのか、不思議に思ったと言う。彼是言ってる内に留付2枚で加背一面に黄金色燦然たる鉱床に当たった。処が、一方財政の方は、例によって無我夢中のやりくりを続けて来たが「着脉だ・・・金がない」で、悲喜交々のうちに愈々年の瀬が近付いて来た。

「天津風 鬼の通い路 吹き閉じよ みそかの苦勞 暫し忘れん」

(僧正遍照 替歌)

こんな与太を飛ばした処で大晦日は遠慮なくやって来る。・・・毎年繰り返す年中行事だが、緊急対策に上京した。三菱本社では、予ねて札幌駐在主任の尾形氏が実査して、

有望性は認めていたが、当時我が国は、大東亜戦に突入しつつあった頃で、大会社は国の強要により、外地進出に狩り出されることになって、国内の山は、特殊金属以外は、新規開発など当分見送りの外なしという事情で、「遺憾ながら何とか他に維持方法を講ずるように」という意向であった。

その頃、札幌の土谷誠太郎氏が、下川着脉の噂を聞き、小生の苦境を耳にして、帝国鉱発に申し込んでくれたので、同社の吉田技師が現地を調査した。鉱発では吉田技師の報告で、話が急速に進展したからとのことで、同氏から切にすすめられた。

当時鉱発では、関係鉱山の成績があまり振るわず、面子上からも、是非良い山に関係を付けるべく画策中だったので、これこそ絶好の機会とアノ山なら百万円は出させるからという申し入れであったが、自分としては、金銭は別として、この山に、離れることは情として忍びず、婉曲にことわって、専ら維持策に没頭、日産汽船社長小田桐忠治氏（三菱金属鉱業札幌事務所前所長小田桐勇氏の厳父）に依頼して神戸の某船成金に会見、出資を頼んだが、「兎に角、春一応山を見てから」ということで、是又急場の出金は難色あり。

結局、小田桐氏の好意により、春の調査までの維持費に充てて、僕の所有する北竜の山林の内2百町歩を買ってもらって、一応年越しの用意ができた。

「来ぬ金を 待つほの裏のやりくりに 頭もしゃくしゃ 身も細りつつ」

（権中納言定家 替歌）

「たのみ置きし 手形を露の命にて あわれ今年の 暮も来にけり」

（藤原基俊 替歌）

兎角して滞京している内に、三菱の技師長、明石孝因常務が外地から帰京されたので、早速、山の成行報告と同時に自分の窮状を訴えた結果、融雪早々調査して何とかするということになり、ようやく安心して帰札した。

翌昭和15年春、明石常務、山口孝三参事相伴って来山調査の上、ここによりやく三菱と売買契約が成立することになった。但し、この年度一ぱいは、会社の人事その他諸準備の都合もあって、従来的人员で、会社の指示により、今堀が責任をもって探鉱を進めることになり、ついで本社から主任として吉井友秀技師が赴任されて準備万端整った昭和16年から三菱の直営に移った。

「年老ゆる 身をば思わず育ててし 山の命の 永くもあれかし」

（右近 替歌）

34. 陰の沢銅山の巻

胆振国幌別郡幌別村地内に在り、三井幌別鉱山の隣接鉱区で、大正年間札幌市の土建請負業篠原某氏が試掘権を設定し、2年余り探鉱したが、大成を見ずして棄権した。同氏の探鉱中、友人船津氏の紹介で山を見せて貰ったことがあるが、三井幌別銅山の岩之崎坑の隣接で、脈は細いが非常に金が高品位で、尚新鉱床潜在の可能性もあり、興味の多い山であった。

其後、幾星霜を経て昭和11年、有珠郡壮瞥村の三笠米蔵氏が、パンケ温泉の開祖飯野光蔵氏と共同で出願し、僕の方へ売山の申込があった。・・・既知の山でもあり、篠原氏が棄権したあと無願地であったことは意外だと思った位だから、取敢えず先願を確

めた上、早速話を進め山代5万円として、1割の手金を入れ、残金は1カ年以内に支払う約束を結び、別に現地の山林所有者、室蘭の古物商皆葉氏から90町歩の山林を買受けて登記を済ませた。

丁度、前回号に記した下川銅山も殆ど同時におきた問題であったので、自分としては、陰の沢を堅実に小規模の売鉱経営で維持して行けば、下川はあせらず、気長に大成するまで探鉱を続けられると言う見地から、両山同時開発を計画したのである。

兎角する内に、下川の当方全権引受けの談も纏ったので、愈々資金準備がいそがしくなってきた。当時専ら予定して居った資金の回収が1つ外れたので苦心していた処へ、突然、元鴻之舞鉱山の探鉱主任であった斎藤君がひょっこりと来訪して、次の様な来意を告げた。

「呉市の土建業松本勝太郎氏（当時貴族院議員）が鉱業部を設けたいと言うので、旧有田組の石松組が顧問となり、斎藤君は現場担当、元鴻之舞測量技師船津氏が測量及び官庁手続き等を担当し、事務は元鴻之舞山長古田氏の書生村田君と言う陣容で始めることになり、今度2～3の申込があったので調査に来たが、一応僕の意見を聞きたい。」という事であった。

其申込と言うのを聞いたが何れも問題にならぬものばかりだ。ソコで、自分の目下力を入れて居る下川と陰の沢の2山の話を出したら、是非何れかを松本氏の為に割愛して呉れと言う事になり、懇談の結果「始めて北海道に投資させるのだから、小規模でも早く回収を見る方がよからう」と言う事になり、陰の沢を割愛する事にして、東京と電報連絡して村田君を呼び、僕と三笠氏等との間に交換した契約其儘で松本氏に肩代わりした。此時は鉱区は既に登録済みになっていたの、先方は肩代りは異議なしだが、此際山代支払を即金にして呉れと言うので、松本氏の方も却って諸手続上其の方がよいと言う事で、即金取引で爾来松本氏の経営に移って今日に至って居る。・・・

其の内に船津氏も来道、懐旧談に花を咲かせた。船津氏の紹介で見た山が船津氏の手で開かれる事になったのも奇縁だったと思う。僕も之れで重荷を1つ卸して、下川に専念出来る様になった。

35. 種川金山再開の巻

大正2年夕張町の幸村政次郎氏が砂金沢の土砂鉱を発見し、其後3年の間、夏になると4～5人連れて入山し土砂金を掘って居たが、何の都合か解らないが、それ以来、幸村一行はプツリ来なくなった。・・・当時此一行は入山退山の都度、今金町でバラック建ての安宿屋を営んでいた丸一旅館に止宿した。

昭和5年丸一旅館の女主人の弟、高橋良三氏が姉から此の話を聞いて、砂金沢を探鉱し、堀り跡を発見して鉱区を出願した。・・・昭和6年の春、高橋氏からの要請により、三菱沼の上鉱山長高橋逸作氏が現地を調査し、上京の途次、札幌に立寄られ、「上京の序に種川金山の買山の話を進めたいと思うが、心残りの点があるので至急登山して情報を連絡して欲しい」との申出があったので、早速、甥の石井を同道今金に出た。其時僕等と同じ汽車から5～6人の鉱山屋らしい人々がドヤドヤと下車し丸一旅館に繰り込んだ。

荷物も沢山で、中で大形揺り盆などもあるので内地の業者と見た。・・・吾々も丸一に旅装を解いて、高橋氏に面会、来意を告げた処が、氏は一段と声をひそめて曰く「只

今東京から山の買人が此の通り大掛かりでやって来たのだから、調査なら此の次にして貰いたい」という事でアッサリ門前払いを喰った。

其後、高橋氏は三菱の好意ある話を斥け、此時の一行の策士、吉田某の甘言に乗せられて、共同経営の契約を結び、吉田氏の運動により、昭和鉱業の森氏の出資によって開発採金を行ったが、吉田、高橋両氏の間トラブルが絶えず、賢明な吉田氏は巧みに昭和鉱業に権利を売り付けて此煩累から逃避した。

爾来、昭和鉱業の直営に移り、探鉱・採金を並行運営したが、大東亜戦以来休山を続け、終戦後、森コンツェルンの解体と共に、新設立の昭和鉱業に引継がれたが、同社では銅重点に関係鉱区の大整理を行った際、此鉱区を放棄した。

昭和23年、昭和鉱業棄権の情報を聞いて、早速試掘出願を提出、24年許可を得た。その夏、元千歳鉱山の発見者大野直澄氏が、先輩の添書を持ってヒョッコリ来訪され、次の様な来意をつけられた。

「昭和鉱業で種川の金山を放棄した話を聞いて早速出願し、此の山を基礎として一大産金会社を創立する計画を樹て、先願関係を調べた処が後願であったので、一時は驚いたが、幸いな事に先願が貴方とわかって、奇縁に驚き、且つ喜んで飛んで来た。是非開発に協力させて欲しい」という申入れである。・・・思い起せば、千歳鉱山出現の年、大野氏が金的を射止め、僕は後願で苦杯をなめた・ソレから春秋14周、今度は逆に、僕が先願となって、茲に計らずも、互いに手を握ると言う訳で誠に奇遇であった。

僕は、終戦と同時に丸裸になったので、山の開発は何れ外資に頼る予定であったので、先輩の添書もあり、外ならぬ意気投合の大野氏のことでもあり、渡りに舟という訳で言下に此申入れに応ずることとした。

大野氏は、早速7名の部下を呼び寄せて、僕と僕の配下の砂金熟練夫美濃又君と共に登山した。先ず部落の農家に請負制で2里余の刈払道を造らせ、大露頭の洞窟を整頓して之を調査中の本陣と定め探鉱を開始した。・・・

大野氏は、千歳鉱山の時「槍一筋を持って深山を跋涉した」と雑誌キングに書かれたが、種川の時は伝家の宝刀2振りを持参した。大洞窟を根城にして大刀を腰に、屈強の部下を従え、ジャングルを踏破する姿は、将にチャンバラ漫画にありそうな、又、由緒ある落武者主従の世を忍ぶ奥山住居という格好だった。

斯くして、大野氏持参の昭和鉱業操業当時の資料によって旧坑及試井を調べ、尚当時砂金沢で砂金採取中の高橋氏の自発的申出により、昭和鉱業で未探鉱と称する右岸台地の土砂鉱の案内を受け、ここに5箇所の試井を穿ち、鉱区内主要部を一巡、企業見込十分の見透しを得て一と先ず調査を打切り、各種試料を持って大野氏は帰京新計画に基づいて資金造成運動に奔走されたが、色々の障害が出来て、不眠不休の健闘も遂に効なく、さすがの快男児匙をなげるに至った。

其後、三菱の札幌事務所長に調査して貰った処が「仲々むずかしい山だから、自分で起業する事は見合わせる様に」と言う意見であった。・・・実の処、僕は内心、所長が見て考慮の余地があるとなったら、早速三菱に提供して開発して貰うか、又は或程度の投資対象を見極める迄の予備探鉱費の融資を頼む予定で、一応見て貰ったのだが、此の意見では、何とも話の切り出し様が無くなった。所長は勿論、僕の冒険好きを心配しての親切心からで、厚意は感謝に堪えないのだが、実は聊かあて外れの次第であった。

昭和25年の春、その頃Z鉱山の行きづまりのため、目新らしく業界、金融界をアツと刮目させる程の新財源でも手に入れない限り、局面打開の道がないような場面に追い込まれ、八方好材料物色に狂奔していたT氏が、偶々種川の噂を聞いて、早速現地を調査し、注文どおりの有望性に驚き且つ喜び、直ちに僕の処へ借区を申し込んできた。

例によって「貸さないと言っても俺は借りるんだ」式の調査だ。・・・僕は気が進まないで、大野氏との約束を理由に断りぬいたが、一度ならず足まめに来訪してねばられ、遂に根気負けして貸すことにした。但し、大野氏の探鉱費埋合わせの責任もあるので、借区料を入れさせることにした。・・・これも空約束に終わったが。・・・

T氏は早速一族郎党を引連れて種川に入山し、予て大野氏と探査した時の第1嘱望地、右岸台地の処女鉱床を掘りまくり、金の延べ棒を造って銀行界に振り廻し、アツと言わせたまではよいが、肝心の鉱区が他人のものと聞いては、銀行側も興ざめ顔という訳で、やはり我山でないと押しが利かない。・・・そこで今度は「金融工作の裏付けとして、一時銀行に見せるだけでよいから、名義を加入させてくれ」と言うてきたので、乗りかけた舟とあきらめて加名手続きをしてやった。

さて、いよいよ名義も入ったので、大いに張り切って掘りまくり、吹きまくった結果、官署関係を始め、住友・日鉱その他相次いで調査に来た。・・・兎角するうち、追々冬將軍も近づいたので、T氏も纏まった越冬資金造成の急要に迫られたので、鉱区を担保に金を借りたいからと申し出て来た。

僕としては、このように乱掘されては、山の将来のため傷心に堪えないので、有力会社の資本に委せる方が山のためと考え、T氏に半権利の贈与証を与え、委任状も添えてやったので、早速T氏は書類を持って上京し、各社に運動を始めた。

処で一方、三菱でもあまり評判が大きいので、改めて現地を調査し、何とか考えてみるということになった。ソコで、僕は取りあえず滞京中のT氏宛に一応「委任停止」の電報を打って上京した。

僕は三菱で投資の意思があるならば、僕の持ち分即ち全山の半権利は、無償提供することを申し出て、これによって検討してもらったのだが、何しろ時は、あたかも昭和25年の年末もいよいよ押しつまって、金が平時の10倍も物言う時の談だから、三菱でも難色があった。・・・

他方、T氏からは、折角他社と交渉中に、委任取消し電報を貰ったことを楯に、喰い下がられるので、無理に重役に頼んで融資してもらうことにし、しかも尚、T氏は資金が足らんというので、翌年度の探鉱作業をT氏に請負わせることとして、その前渡金まで借り出してようやく要求額を揃えてやった。

翌26年、三菱社員の監督のもとに、全鉱区の探鉱が推進されたが、その結果は社業に適せずという結論で、融資の返済という段になったが、元より返済の見込はなく、探鉱中は採金は一切禁止という約束であったにもかかわらず大沢坑々内で補足した大直利を強引に採掘し、最後には乱掘のため坑口大崩壊のため収拾不能となるに及んで渋々下山した。

さて、三菱では更に延期して融資金の返済を待ったが不履行に終り、最後は逆に、三菱から涙金を出してようやく脱退手続きを終って、鉱区は三菱の所有となった。省みると、何の事はない、僕は庇を貸して主屋を取られ質に置かれて流された格好で、なっちょら

ん次第だ。・・・

僕の馬鹿見たことは己の不注意の結果で致し方ないが、三菱に不用の固定を負わせたことと、鉱山その物も密採者の乱掘に任せていることが残念で、色々奔走したが結局無力のため志を果さず、徒らに焦慮しているに過ぎない。

「わびぬれば 今はた惜しき直り山 身をつくしても 掘らんとぞ思う」

(元良親王 替歌)

36. トムラウシ銅山開発の巻

大正時代帯広の新聞記者、佐藤某氏が1 杓夫の話により、2～3の同志と共に探検の結果、露頭を発見これが開発に着手、坑道2カ所を開いたが、未だ何程も進行を見ないうちに不幸にして熊に襲われて一命を絶ち、爾来放棄された。これがこの山の端緒であると聞いた。(註、御年吾々の探鉱の時、旧坑及び小屋跡、並びに建築資材の角柱、タルキ、板材等が堆積したままボロボロに腐っているのを見た。)

その後久しく放置されていたが、昭和23年頃、友人菅孝本氏之が開発を志し、資金後援者を得て探検したが、あまりの不便に驚き且つ本人も激流に吞まれて危く一命を失わんとする危険に遭遇し、遂に断念した。

この時の苦心談を聞き、旧坑から採ったとす称する2貫目余りの美事な含銅硫化鉱の見本が床の間に飾られてあったのを見せられ、爾来僕の脳裏に深く焼きつけられてあった。・・・

それから幾星霜を経てこの地も逐次開拓も進み、近く軌道も設けられる形勢となったので、菅君の話を思い起こし、昭和24年主要部1 鉱区の試掘権を得たのだが、終戦以来全くの無力となった僕には開発する資金調達もできず、三菱に鉱区を提供して開発を委ねた。翌25年外周数鉱区を補足出願の上、同社の渡辺、原の両技師と共に探検のため現地に向った。

当時、新得町から岩松迄より道路がなく、岩松から先は経路を辿って人夫と共に食料その他の荷物を分担して背負い登山した。途中パンケで樺太引揚移民の集団仮小屋に一泊し、翌日夕方、目的地ヌプントムラウシ川上流に着いた。

森巖たる原始林に靈気漲ぎり、清流岩に激して俗塵を洗う無人の仙境に、沸々として温泉が湧いている。代表的な湯元は、右岸に屹立した石灰質の湯の華の崖の根元から吹き上げる間欠泉で、3分休んでは9分間噴き続け、これを繰り返す。

なおこの附近140～150間の間、随所にこんこんと湧出している。泉質は炭酸泉か、無色透明、ほとんど無味無臭で熱は相当高く、炊飯は湧き口に鍋、飯盒を置けば忽ち出来上がる。・・・最初の幕舎は先ず此処に張られた。・・・雨にたたかれ、淵を渡って、ズブぬれになって帰って来ても火を焚く要もなし、ぬれものは湯口の近くの石を上投げて置けば自然に乾くという訳で、疲れた軀をドンブリと浴槽につけると忽ち心身爽快「天恵に浴す」とは正にこの事か・・・一同はこの天恵に浴しつつ宿望の大銅山開発のハンマーを揮った次第である。

ところで此処の野営だけで探鉱が終るなら真に天下泰平だが(区域が広いので、ソナウまい訳にはゆかぬ。やがてこの天祐境を離れて転々と幕舎を移動し、全鉱区の一巡踏査を行った。・・・何しろ、場所は北海道の屋根大雪山と日高山系の落ち合う麓であ

る。地形急峻で到る処懸崖時・終始激流を遡り、時に腋下をひたす深淵を渡るため、青天でも尚且つズブぬれになる訳だが、今度は天恵の入浴もできず火を焚いて着干しをやる次第だ。

雨の日ともなれば、火も思うように燃えず、真にみじめなものだ。・・・斯くて、渡辺、原岡技師のあらゆる苦難を超越した熱心な探鉱によって、旧坑及び数カ所の露頭が発見されるにいたった。

斯くてその翌年から開坑探鉱を開始し、爾来坑道掘進と共に化学探鉱、電気探鉱、試錐も並行推進し、鉱床の探求に努め、一部会脈を見たが、未だ全貌を明らかにするにいたらない。

交通機関の方は軌道も山許の3里手前迄開通し、初年とは隔世の利便を得るにいたったのだが、惜しいことに冬期運休するので、冬期間は全く孤立状態となるため、やむなく休山の外ない事情にあった。従って毎年6月中旬入山、10月中旬下山、入山退山諸準備日数を引けば1カ年の稼働は正味3カ月。

というような有様で、更に3里の間は道路なく、地形急峻で重量機械類の運搬不可能のため、旧式手掘という極めて不合理操業を繰り返している結果、徒らに歳月と冗費を重ねるばかりだから、方針を変え、近き将来、大雪山横断道路開通を待って、機械を入れ、合理化操業によって一気に鉱床の全貌を究明することとし、31年から当分休鉱することとなった。

「思い出の湧きて流るる山川は いつ見に来ても 恋しかるらん」

(中納言謙輔 替歌)

37. 朱丸内クロームの巻

この山は天塩国上川郡温根別村の上流であるが、交通上、雨竜線朱鞠内駅から山越しに出入するため朱丸内鉱山と命名した。

昭和15年晩秋、富岡正勝氏のすすめで、当時福原鉱山担任の甥の石井及び染野両名に現地を調査させ、有望と認め、年末頃天塩国砂登第233号、及び655号を買収した。

当時兩人共資金に乏しかったが、幸いこの頃クロームは軍需資源の不足鉱物であり、精錬各社は原鉱入手に猛烈な競争を演じていた時であったため、売鉱契約で十分な資金を出してくれた時代だから、富岡氏は予め日本電工に申し込み融資の了解を得ていた。先ず、雪中に借地その他の手続きを運び、一方富岡氏はゴム沓所有の熟練工募集に奔走した。・・・戦時中のためゴム沓入手困難だったので、この条件の者を集めるのは容易でなかった。

当初の計画は、早手廻しに優良工員を集めて、なるべく固定を避けて、手選で出鉱予算を建て、早めに入山させ全員に請負制で道路開鑿を一気呵成に仕上げ、そのまま全員を採取に廻すという予定を組んだ。・・・さて納品先のことについて、自分としては美唄の三菱工場に送鉱の目的で乗り出したのだから、富岡氏に了解を得て一応三菱に紹介した結果、美唄に送鉱することになり富岡氏に日本電工の方を断ってもらって、三菱に対し事情を述べて融資を申し込んだ。・・・

何よりも時期を逸しないことを先決問題として、堅雪の4月中に雪上路線測量をやり5月には残雪のある内から刈払や小屋掛けに取りかかり6月全員71名入山し、総出動

で道路の突貫工事を開始、予定通り一気呵成に完成を見たが、資金が来ないので賃金も払えず、採取作業を始め乍ら待つ様に説得したが応ぜず、徒食して請負金を要求された。・・・其の内に工員の方でしびれを切らし代表者を残して連袂退山した。

やがて待ちに待った資金が来たが、退山後で残念ながら6菖10菊だ。此の大切な時期に多数の熟練工を集める事は殆ど不可能だ。やむなく方針を変更し、工員には誰でも出来る原砂採取を請負わせ、選鉱は機械仕上げで精鉱にする事として、人夫を集め施設を整えた。

斯くて人も集り、原砂も選鉱場の工事完成迄掘り溜めたので、機会完成次第埋合わせ出来る見込みも付き、愈々テーブルを運営する様になったのは秋も深まる頃であった。

漸く夏の手違いを取り返せると思っ一ト安心した処へ実に物凄い何百ミリの空前絶後の豪雨襲来で水車選鉱場等大破し、特に延々1里の間の各採取現場に、山元受入済みの原砂を大量に野積みしてあったものが陰も形もなく、滔々たる濁流に流され遠く下流にある水田用ダムは為めに浅くなると言う事態を生じ、殆ど収拾不能に陥った。

何しろ、せまい谷川の処へ、沢の中の木を掘り返して採取する仕事のあとの出水だから、特別荒れ方が甚しかった訳だ。富岡氏には「最初の予定通り、日本電工の資金を貰って居れば、今頃迄に一と勝負付けて仕舞って居たし、且つ又同じ出水にしても精選鉱に仕上げしてから工員から受取るのだから、こんな痛手にならなかったのに」とこぼされるのに閉口した。

僕自身も資金準備の遅速が「生きた金」と「死んだ金」の差を生ずる事の冷厳な事実直面し、事前の不用意を痛烈に感じたが、愚痴っても始まらないので、廢墟の中から立上って、水車再建、テーブル及選鉱場等を修理し、人夫を督励して荒れ果てた現場から新たに採取を始めたが、時期愈々冬期に入り採取能率も著しく低下した。選鉱の方はテーブルの下に煙筒を通すやら、あらゆる工夫をこらし冬期中も不休運営を続けた。

斯くの如く苦心運営を続けたが、17年1月以降は愈々労銀支払すら不能の窮状に陥り、遂に休山のやむなきに至った。殊に17年春には、同地の造材業者が搬出馬不足のため、雪上搬出がおくれ、山元に大量の残材を生じた為、早春、鉱区の川に堤を造り、鉄砲流しを執行する事になったので、若し当山が継続操業しても、数カ月は休山の外ない事情もおこって居たので早春切上げる事にした。結局、品位54~55%のもの205屯を全量美唄工場へ送ってけりとなった。

38. 水銀鉱山の巻

本道の水銀鉱については斯界の権威矢島澄策博士によって、詳細説き尽されて居り、今更駄文をならべる要はないが、僕の見聞した事柄を世間話の1つ1つとして書き綴ってみる。

尚、鴻之舞発見直後の金鉱熱と軌を同じくして、イトムカ水銀の出現を契機として、道内に果然水銀熱高潮し、特に北見一円及び中央山脉周辺等に水銀鉱区出願殺到し、雨後の筈の如く大小幾多の水銀山が開発された。兎角する内に時局は逐日急を告げ、水銀の重要性が高まるに及んで、遅まき乍ら微力を尽さんものと思立って、嘗つて探鉱した時に辰砂の存在を認めた地方を調べた処が、驚いたことに殆ど他人出願済みとなって居た。其の内に機会を得て、人真似に2・3の山を手がけたが、何れも成果あがらず汗顔

の至りであった。

イ. 本道水銀鉱開発の嚆矢

明治35年頃、枝幸砂金地で一外人がペーチャンの間の川で、辰砂から鉄壺で水銀を精錬して採金に利用したと聞いたのが一番早い様だが、水銀鉱として開発されたのは、明治37・8年の頃、朝倉夕満氏の日高の類似水銀ではあるまいか、・・・其の次は大正6年の余市明治銅山で、当時黒物鉱床の権威として高名の平林博士の発見による水銀で、当時レトルト式精錬の設計其の他に、札幌の秋葉安一氏が参画したと聞いて居る。続いて大正7年、一砂金堀夫によって発見され、同年函館の栖原角兵衛氏によって開発されたのが上川郡愛別村愛別川支流イシカリカリップの愛別水銀で、之と相前後して北見国北の王金山で水銀鉱が副産し、一時は水銀を主体として簡易な精錬所を建てた事があった。

ロ. 愛別水銀

大正7年前掲の愛別イシカリカリップ川の水銀鉱発見当時、共同出願関係者、札幌狸小路の古本屋飛世氏から僕の出入りの伊藤建造君を通じて売山又は融資の申入れあり、余りにも見事なサンプルなので早速現地に飛んで一見し、優秀な脉勢に一驚、伊藤氏を介して積極交渉を進めたが、当時同じ出願関係にある留萌の某氏が、氏の出入先であった函館の栖原角兵衛氏に買収させた為、遺憾ながら自分で手に掛けられなかった。

然し有力者栖原家の手で開発された事は喜ばしい事と思った。当初数年同家で採鉱し、厚板の木箱に包装して送鉱した。其の後永い間休山を続けたが、昭和10年頃石川博資氏に買収され、友人政場政治君の手で再開され数年間稼業された。

ハ. 沼牛水銀

大正10年頃、幌加内南線の後藤某氏の手紙によって、幌加内の銅鉱を見るべく同地に出向いた。(此の銅山さわぎは、雨竜と上川の郡界山脉の雲母片岩の、特に青く光る美しい母岩を、或る山師が2銭銅貨と共に鞆で溶かして銅を見せ、大銅山と称して願わせたものであった。)此の時、幌加内村の土木工業に来村中の東京村上某が水銀鉱を発見し、大直利出現というので、酒樽の鏡を抜いて現場で大盤振舞をやった翌朝、後藤氏同道現地を見た。

井戸掘式に豎坑を下げ、底部に直径1尺余りの一見赤い丸太を土の中に立てた様な辰砂の大直利で、外周は糸状に四散して居た。其の後の情報によると、当時の丸太直利は棒状で78尺の長さを保ったが、其の下は外周同様薄い鉱染状に四散して採鉱を中止したと言う。尚、大戦中小樽市の淵上林太郎氏之を再開、当時の残鉱を精選して若干出鉱した。

ニ. イトムカ水銀余話

大正5年の秋、僕が鴻之舞金山開発中に、同僚の鳴沢弥吉氏の知り合いの、ヤマベ釣りの老人が「層雲峽に越える目的で武華川の上流国境近い処で野営した時に、小屋のソバの粘土の処で迂って墓口を落し、バラバラと飛び出した銅貨2～3枚が泥まぶしになった

のを、拾って何気なく泥をこすり落した処が、白くなったので不思議に思って更にその粘土をつけて盛んにこすった処が50銭銀貨と同じになった」と言う珍談を聞いて、テッキリ水銀鉱と推定されたので、鴻之舞売山後、2人で探検に行く約束を交した。・・・

然るに、鳴沢氏は売山後その俣住友鴻之舞に就職して多忙をきわめ、僕も亦、次々と金鉱の探鉱に追われ、当時水銀は安かったので余り魅力もなかった為もあって、何時ともなく忘れて居た。・・・爾来星霜20年。・・・昭和11年同地方を襲った大旋風の為、イトムカ水源附近の美林が、数里にわたって悉く将棋倒しの大風害に見舞われ、此の風倒木処理の為、山中縦横に丸太搬出通路を急造した。

其の際通路の肩崩し面に大小無数の辰砂が砂礫に混在して居るのを一杓夫が発見し、見本を懐にして予て知合いの陸別町井上旅館主人の許に駆けつけて相談したのが此の山の開発の端緒となった。即ち、井上氏から1・2の人の手を経て、結局小樽市の旅館業兼米穀商内藤松之助氏等が鉱区の許可を得るに至った。

内藤氏は、当初から三菱に相談していたので、三菱でも万事懇切に指導し、砂鉱も出願させて万全の体制を整え、且つ現地に技師を派遣して探鉱を手伝わせ、有望鉱床を確認して、名声天下に轟かしむるに至った。・・・

処が好事魔多しの譬に洩れず、茲に一つの問題がおきた。と云うのは、札幌狸小路の運動具店主M氏が数年前から、山師にだまされて、同所に金鉱試掘権を持っていたが、探鉱の結果見込みない事が判明し、満期消滅したまま再願を渋っていた処へ、この大評判を聞いて、既に優先期日も経過しているに拘らず、周章として出願し、鉱種に水銀を追加して「継続出願だから自分が優先だ」と横車を押し出し、内藤鉱区許可に対して行政訴訟を提起した。・・・

内藤氏は改めて三菱に訴訟の儘引受方を申出たが、堅実一途の三菱では訴訟の故を以って之を辞した。勿論、訴訟の真意は和解金目的のイヤガラセである事は明白なので、新鋭の野村鉱業が之を呑んで金的を仕止めたという次第であった。爾来野村鉱業の運営によって、我国水銀界の王座に君臨するに至った。

ホ. 天塩水銀

昭和8年、天塩国中川郡小車内川で旧知の砂金堀小林力蔵に依って発見され、友人宮崎芳作氏に紹介、宮崎氏の手によって日下部博士等参与の下に、会社組織で開発し、戦時中は帝国鉱発で運営した。・・・

此の山の発見者小林氏がかねてタングステン鉱の斑点状良鉱を発見しており、相当の大物と自称していたが、生前一度再調の上、出願してから案内すると云うた儘死亡した。事実とすれば惜しい事をしたと思っている。

ヘ. 十勝水銀

昭和8～9年頃、元北の王開発者の1人、山本秀一氏によって、河東郡上士幌村セタ山の附近に水銀鉱が発見された。山本氏はこの山の地質が北の王金山に酷似していたので、すっかり気に入って金鉱として探鉱したのだが、水銀の優秀露頭を発見して、札幌の医師渡辺某氏の出資で開発に努め、日室鉱業に売山、戦時中帝国鉱発の経営に移り、17年精錬開始、20年終戦と共に休山した。

ト. 瓜幕水銀

大正10年頃、金鉱熱に乗って、札幌の酒造家本間氏が2～3の同志と共同で、或る鉱山師の談に乗って、河東郡鹿追村然別川上流ユャンベツ川附近に金鉱十鉱区を出願し、当時、札幌郊外三里塚の本間氏農地の監理人三浦氏が、件の鉱山師を同伴して約1カ月半探鉱したが、金鉱として何等見るべきものがなかった。この時三浦氏は本郷温泉（今の管野温泉）の上流で、白い脈状粘土が約1間余りの幅で川底を横断している処を発見、不審に思ってその粘土を一握り持ち帰った。

当時、本間氏等は出願当時見せられた美事な金鉱は、全然影も形もない計りか、似た石すら無かったので、スッカリ嫌気がさして、件の粘土などロクロク手にとって見ようとしなかったので、三浦氏も其儘自宅の戸棚に抛り込んでおいた。

其後僕が三浦氏宅を訪ねて、当時の探検の模様をきいた時に、この談をきかされ、同時に問題の粘土を見せて貰った処が、握飯大の粘土の中に水銀の細かい粒が晴夜の星の様に見えていたので、之なら何とか引合うかも知れないから、此の露頭附近12鉱区は、水銀を鉱種名追加して残す様すすめておいた。

ソレから星霜20年を経て昭和15年、フト之を思い出して三浦氏にその後の事を聞いたが、本間氏はアノ儘なげたと。・・・早速取敢ず2鉱区を出願した処が、帯広の人の先願がある。止若の山田君を通じて照会した処この先願者は売山希望だと云う。

15年7月、瓜幕駅前本郷旅館で先願者と落合い、同氏の案内で登山、ユャンベツ本郷温泉に三泊して調査したが、辰砂の露頭だけで問題の白粘土脈は見当らない。ニタ昔前の談だから埋没したのか、それとも場所が違うのか、見当のつかぬまま下山した。

実査した露頭は川の左岸の台地の崩れに出ており、鉱染状の鉱床で最高2.5%内外、有望と認め交渉を進めたが、共同者が高値を主張し、且つ当時は頗る不便で莫大な起業費を要するので、力及ばず断念した。

其後この山は札幌の古谷辰四郎が買収し、終戦の年には1月から8月迄に236屯、平均品位1.5%の出鉱を見た。爾来休山を続けてきたが、24～5年頃琴似町の高石氏僕に談を聞いて、古谷氏から譲り受け、探鉱計画を立てたが、出資者と内紛の末、大牟田化学に売山し、爾来同社の経営に移ったが、例の三浦氏の白粘土自然水銀の脈は謎となっている様だ。

チ. 中渚滑水銀

瓜幕も手に入れる事が出来ず、再び北見に眼を転じて物色中、明治39年、中渚滑豊島牧場の沢でイタヅラ半分砂金がないかと云うので洗ってみた時、辰砂計りで金がないので一笑に付した事を思い出して、第1番に選んだが、当時そこに紋別I氏の銅鉱許可鉱区があるので見合わせて居た処へ、渚滑の箭内氏が「大辰砂鉱発見」と意気込みすさまじく飛んできて、是非願って呉れと言う。

I氏に相談する様説得したが、「とんでもない。あんな男に話したら只取られて仕舞う。山の上迄皆砂鉱状態であるし、旁々I氏は試掘だから砂鉱は掘れない筈だ。是非たのむ」といわれたので取敢えず流域1件2里28町余を出願、現地を詳細調査した。

僕の見た沢の水源の丘陵地一帯が沖積層の礫層（或いは礫岩の地表分解部分か）であり、この礫の中の辰砂が是亦稜角摩滅して円礫状を為し、どう見ても砂鉱だ。試掘権に

充分の譲歩をしても地形上の低凹地だけは砂鉱として論議の余地がない現況であったので、続いて面積出願二筆提出し、やがて流域の許可があったので着業準備を始めた。

処が評判が大きくなったので、I氏は件の銅鉱に水銀を追加し逸早く探鉱を始めた。その内に鉱床実査臨検となり赤松技官が来山された。其の後、局の方でも頭痛の種となつたらしいので、僕も、何分共同者の意思も尊重せねばならず、立場に困つたが、箭内氏を説得し同人の持分を評価買取する事にして、自分単独所有とし、直ちに面積出願取下げ願を提出、川の中を採取して半屯計りの辰砂をとり、最後に東京の作曲家池譲氏に譲つたが、代金未収の為同氏と連名にした処、池氏は税金も払わず其儘投げられた。而も掘つた鉱石も、池氏や其他色々の人に、試験資料其他の名目で持ち去られた。茲でも馬鹿の真面目を發揮した次第である。

さて話は遡って、こちらは潔よく取下げしたのだが、I氏の方はボロ銅山で持て余し気味の処へ、人の発見のお陰で大当りしたのだから多少遠慮があつてもよいと思つたが、問題未解決の内に逸早く沢の中の純然たる砂鉱の方から先に、ヤッサモッサ掘り上げたに至っては聊か可愛らしくなかつた。・・・

処で後日物語が一つ残つた。ソレは取下願時、30万坪と60万坪の2口あつたのだが、局としても、60万坪の方は主として丘陵地であつたので取下げしたが、30万坪の方は、大部分沢形凹地形を占めている為、再検討の為に保留してあつたらしいのだが、其後赤松氏も退職され、其儘停滞していたのが、ズットおくれて、I氏が地表部を殆ど掘り尽し、深部の採鉱も進み、大牟田化学と談合の噂の出た頃になって、突然この30万坪が無修正で許可になつた。

僕は2件共取下げが済んだつもりの処へ、意外の事であつたので、拾い物をしたつもりで登録し、一と問題起せる訳だと苦笑を洩らした次第だが、砂鉱に属する鉱床が全部掘り尽されて仕舞つた跡を待って、今更砂鉱盗掘訴訟でもあるまいと、早速局に出頭し改めて放棄を声明した。

リ. 上佐呂間水銀

大正年間、北の王金山に関係していた時、生田原、ルベシベ、上佐呂間附近一帯は殆ど隈なく踏破していたので、此辺の辰砂の分布は凡そ知悉していたが、戦時中水銀熱に乗つて悉く他人出願地又は大会社関係鉱区となり、個人出願の人々も仲々の鼻息であつた。

この中で上佐呂間の瑞穂にある此山だけは、格安に入手出来たのと、大正10年頃友人上杉氏と共同で金鉱を出願探鉱した鉱区の一部で、当時の金鉱坑道をつけた沢の陰に当る小沢だったので特別くわしく知っていた。昭和16年早速買取して探鉱を開始、掘割によって3箇所露頭を発見し、開発計画をたてた。

処が此鉱区には先約者があつたが、契約不履行の為、僕の方に売つたという潜在事実が判つた。間もなく、先に買う約束した人が、契約期日後によく資金が出来て来道し、前出願権者に履行を迫つた。出資者に対する立場もあつて、訴訟してもと云う意気込みであつたので、其先約者に会つて事情を聞き気の毒になり、実費を貰つて鉱区を譲渡した。

此の山は中生層の砂岩及び頁岩中の亀裂及び断層粘土等に伴つて生成された鉱染鉱床で、上部には部分的に2%以上の富鉱部もあるが、概して品位低く、且つ下部は脈勢も劣

る様な傾向に見えた。但し、僕の探鉱範囲では最も深い掘割でも5米を出ないので、全貌の予断など勿論尚早で、まだまだ研究の余地がある。

ヌ. 和訓辺水銀

大正6年、一砂金堀りがワクンベ川左沢で、30%内外の美事な黄銅鉱の南瓜大のものを拾って来たのが濫觴で紋別柵橋延太郎氏によって試掘出願され翌7年、元鴻の舞鉱山長吉田久太郎氏之を引受け探鉱した。

取敢えず左沢に大焼け露頭を発見、ここに事務所飯場を建て、開坑して貧鉱ながら大形の鉱体に会した。其内に左沢に沢淵から峰にかけて500米余の硫化の大焼けを発見、之に主力を注ぐべく精密な実測を行ない、徹底的探鉱計画を立てたが、資金其他の事情で果さず、休山放棄するに至った。・・・後年、左沢の坑道のある方は、遠軽の三原氏が永年試掘権を持続しているが、右沢は余り知れられて居らぬ為か久しく空地になっていた。

僕は、大正7年吉田氏探鉱中、此の山を一廻り見学した時、右沢の随所に辰砂の有る事を知っていたので、水銀開発を思い立った時、予定地の1ツに編入して調べた結果、元枝幸中屯別の砂金堀り向常喜氏が逸早く出願していた。・・・幸い美幌の土谷繁一氏の骨折によって向常喜氏外1名の鉱区3件を買収し、更に三鉱区追願、探鉱を開始した。

全鉱区に亘る野外探鉱の結果、次の様な鉱況が判った。即ち、鉱床は古生層の砂岩及び砂質頁岩の弱線に沿うて生成された辰砂の鉱染鉱床で、多少の粘土を伴い略南北走向の脈状をなして発達している。発見された露頭は6箇所、其分布は次の様になっている。

ワクンベ川右沢と17線沢左支流との分水嶺の北斜面を起点として北方に延び、17線沢の左支流を挟んで両側の斜面に1号2号が露出し、次にこの左支流と17線沢の間の尾根を越えて、その北側に当る斜面に3号露頭、茲で17線沢を渉って対岸に4号露頭、更に北進して村界の山を越え、下渚滑村字津沢に5～6号露頭が現れている。・・・

是等の露頭は連続した一条の鉱脈ではないが、略南北にのびる一連の鉱床帯を形成して居り、各個の鉱体は此の帯の中に雁行状に配列されて発達して居るものの様である。

先ず2号及3号露頭から試掘を始めた。両露頭とも品位は余り高からず、0.3乃至0.5%平均のものであったので、淘汰選鉱の簡易な施設を試験的に造って品位を向上する出鉱計画を進めたが、その内に3号露頭で幅1.5米の直りに会し、手選で4%平均のもの12屯を得て天塩鉱山に送鉱したが、この直りは忽ち無くなって元の低品位になった。但し、脈は2号迄は続きそうな情勢なので、愈々本格的な選鉱設備推進計画を立て、用地10町余を買収し、事務所、合宿、長屋、倉庫等、4棟120坪を建設し、鉱区内通路等を設けた。

其頃、帝国鉱発「萩ヶ岡」鉱山から、自発的に2人の探検員が来山、約2週間に亘って鉱区内を探検して帰ったが、続いて同山所長大類氏調査されて次の様な相談を持ち出された。

「萩ヶ岡も大馬力で掘ったので前途が見えた。今の内に是非後釜が入用だから買山したい。方法としては、当時鉱発は大蔵省の承認を受ける都合上、一応企業資金の融資を行い、予定工程を進め乍ら適當の機会に買山に転進する方法をとる事になるのだから、其の含みで融資申込みを出す様に」という事であった。

時局柄直ちに之に応じ、道路新設及修理、建築増設、坑道掘進等46万の予算を組ん

で融資申込を提出、同社の規定によって、即決可能の金額（5万以内）の融資を受け取り、残額は第2回調査の上交付を受けることになった。例によって、馬鹿正直だから、早速大張切で予定工事を進めたが、2回目調査がなかなか来ない。然し乍ら今度は資金の目当があるのだから、手当り次第高利の金を借りまくって猪突猛進した。只さえ四苦八苦の処へ無茶を続けたので、此時は全く資金繰りに苦しんだ。

やがて終戦間近になって、同社から金沢技師来山、型の如く調査、報告のため帰京の翌日、鉱発本社空襲を受けて爆焼し、続いて歴史的終戦に際会して万事後破産となった。

思えば、契約した計りに余計な借金を残し、言語に絶する苦汁をなめ、加うるに鉱区は、内金受入の時に社名を加入してあったので、重要地丈けに減区して維持する目的で、放棄減区の手続書類を送って捺印を頼んだが、廻送して呉れず、6件其儘据え置かれ、又全鉱区を会社に渡す申入も取り合って呉れず、6鉱区の税金は取られる、内金の借入書はとられる。実に目もあてられぬ始末になった。

知人の誰彼に言わせると「内金を取って之を直ぐ仕事に使うのが既に間違いである。全額取ってから申訳けだけの仕事をして、早く売山迄持って行けばよかったのだ。どうせ鉱山に資金を投げ入れる為の会社だから、他の業者は争って、あらゆる手をつくして運動までして、ポロ山に莫大な金を出させ、ろくに仕事もせず押しつける算段をしているのに、先方から望まれて居ながら、余り頭の無いやり方だ。」とさんざん冷笑された。

言われて見れば将にその通り。そもそも鉱発会社の誕生するや否や、待ってました我が世の春と計り、秘策をつくして次から次と、資金を引出し、国策遂行吾一人といわん計り、大ぼらを吹きとばし、愈々終戦となって国民挙げて虚脱状態に陥って為す処を知らず、物資食料不足の餓鬼道にあえぐ時にさえ、戦時中にかき集めた鉱発関係の資材を二束三文に払下げを受けて一ト儲けし、之を資本にヤミ商に早替りして、所謂戦後派成金になり済ます様なチャッカリ屋さえある中に、此の和訓辺水銀の場合には、先方に望まれての取引だから、率直に言って見れば、先に受けた融資の内渡金は、結局売山契約の手金で、只先方が特殊会社であるために会社の機構上、やむを得ずに採った方法に過ぎない。

普通なら手金流れが当然なのに、シャニムニ払わされ、減税の為の減区廃業手続きは阻止され、多額の税金は負担させられると言う、御念の入った馬鹿さ加減、おまけに資金も来ぬのに先走って無理借金まで拵えて、いらざらん仕事までやってのけた徹底振り、どうみても少し足りない男の仕事らしい。阿々・・・

39. 砂金掘りの事

「砂金掘り」は鉱山開発の良きガイドである。特に僕の場合、彼等に追う処が多かった。常に彼等と連絡を密にして、彼等の話から暗示を得て鉱山発見に資し、時には彼等と起居を共にして砂金の探検もやった。茲で聊か「砂金掘り」の実態に触れて見たい。

一と口に「砂金掘り」というても色々ある。本業に失敗して、ポロ儲けして挽回しようと、焦慮の末砂金掘りをやる手合いは長く続かない。又、算盤をはじいて砂鉱権を買い計画的に砂金採取をやる人は、之は企業家に属するもので、僕の述べようとする「砂金掘り」ではない。

所謂「砂金掘り」というのは、精神的に之等の人々と全然別個の存在だ。・・・一言に

していえば、砂金の魅力に惑われて山から山を渡り歩く毛色の変った人種である。

彼等には権利も算盤も用はない。只一途に砂金を求めて蝸牛の如く、常に「衣食住」を背に負うて、次から次へと深山幽谷を跋涉する。・・・他人鉱区だろうが、無願地だろうが、彼等は一向頓着しないで天下御免の密採をやる。

但し他人鉱区で公開されて居る有望地の場合は、勿論彼等も入場料を払って採取するが、多くの場合無断密採だ。・・・偶々大当りした時の快感を何年経っても忘れずに「夢よ今一度」と之を追うて飛び歩く。

「春過ぎて 夏きたれど金掘れず 衣ボロボロ あたまかく山」

(持統天皇 替歌)

家を飛び出したら最後、何時帰るかわからない。家族も又、なれたもので至って呑気なものだ。

「うらの戸を あけて出たきり音を絶え 行衛も知れぬ 砂金掘りかな」

(僧弥好忠 替歌)

彼等とて亦人の子である以上、世間並み、否、むしろそれ以上に濃やかな人情を持ち合わせている。時には望郷の念堪え難く、ヒョッコリと帰宅する事もあるが、又すぐに出かける。

「久方の たまの逢う瀬の一と夜ゆえ 身をつくしてや 恋渡るべき」

(皇嘉門院別当 替歌)

長く落着いて自宅で過ごすのは、厳冬の間だけである。が・・・幸いに多少掘り当てて帰ったものは、世間の不景気も他所に、冬の間のみと家庭を楽しんで、何不自由なく休養するが、運拙く、夏中一向よい目が出ず時化通しで、木枯しに吹き寄せられた枯葉の様に、冬空目がけてカラカラになって帰って来られたら、女房たるもの誠にみじめなものだ。

「山男 冬ぞさびしさまさりけり 置く質草も 枯れぬと思えば」

(源宗干朝臣 替歌)

砂金は凡て、基磐直上の砂と、磐の割れ目とに殆んど大部分濃集されている。此磐際の砂の金を逃がさぬ様に又磐の割れ目の中の金を巧みに取るのが砂金掘りの「コツ」だ。

処が、例えば、北見枝幸の様に、八方から大勢入込んで採金する処では、「俄か砂金屋」が多い。仕事振りで一と目で夫れとわかる。隣の現場に居る本職は、ニヤニヤと見て居る。・・・

果して、大切な含金属を引っかき廻して、金を悉く磐の割れ目に沈めて仕舞って、「案外不結果だったなー」とこぼし乍ら他に転出する。・・・そこで本職は得たりと斗り、その掘跡に陣取って早速得意の「磐叩き」をやる。

何百人工もかけて大部分の金をソックリ其儘磐のヒビに集めて置いて呉れたのを、僅かの手間で頂戴する訳だ。・・・こんなうまい話はない。・・・

此辺で「一と航海」(註、彼等の人里に帰る事の熟語) 家へ行って来るとしようかという訳で、先ず砂金を売りに枝幸の町に出たら最後、待ち構えている紅裙連に引張られて青楼に登り、ポッポが暖かいのでつい気が大きくなり、居つづけで大尽さわぎ! ・・・扱てソロソロ引揚げようかという時は、既に財布はカラカラ・・・これでは家にも帰れない。

「又一現場たたいて来るかい」という事になり、料亭の女将に、米嚮代を借りて、又候山に逆戻りという次第で、

「磐のヒビからがのじのヒビへかねを取りもつ砂金掘り」という歌は実によく彼等の生態を卒直に表現して居る。

「ほとほと 泣きつつ財布眺むれば 只料理屋の つけぞ残れる」

(後徳大寺左大臣 替歌)

又、彼等は砂金にかけては暑さ寒さも問題でない。早春露のトウの萌え出る頃ともなれば、むら消えの残雪を踏んで、雪溶け水を利用し、夏では掘れない様な小さな沢を掘る。

又、晩秋は初雪はおろか、2、3回も見舞われる迄も頑張る。場所によっては、降雪中も、雪中に穴を掘って採金を続ける事もある。水量の多い川で行う「流し掘り」の如き、氷雨の降るのに腰迄水に浸って大カッチャをあやつる姿は、実にその熱に動かされる。少々位札束で頬べたを叩かれても常人では出来ない。

「氷雨ふる 寒さも聞かず流し掘り かねくれないに 水くぐるとは」

(在原業平朝臣 替歌)

又、時には、現場によっては段取り工事に1カ月以上もかかる事があって、ようやくそれが出来上り、愈々明日から採金が出来ると思った途端に、一天にわかには掻き曇り、車軸を流す豪雨沛然として到り、忽ち現場を流され、月余の労力も一瞬にして潰える事もあり、こんな時は全くみじめなものだ。

「見せばやな 雨に降られた砂金掘 濡れにぞぬれし ざまは見られず」

(殷富門院大輔 替歌)

そうかと思えば又一面、長い夏中殆どアブレ通しで、晩秋になって大溜りに掘り当てて、僅か1週間で3年分も掘りあげるという事もあって、結局砂金掘りはやめられないという事になるらしい。

40. 山師の事

徳川時代には御山条例を制定して、鉱山業を行う者は「御山師」と敬称し、士分に準じ帯刀を許したというが、明治以降は「山師」と呼び捨てにされて「ホラフキ」「ウソツキ」の代名詞の様に聞える事になった。

明治時代の辞典に「かなやまがたり」という日本語があり、註に曰く「鉱山を種に働く者」とある。立派な日本語の一つになって居る。如何にも遺憾の極みである。この様な冒流的な言葉が堂々と一国の名詞となった事は、果して何人の罪か知らないが、要するに我国では、鉱山に対する一般人の知識の乏しかった事が主因だと思う。

其虚に乗じて悪質の山師即ち「かなやまがたり」が跋扈した為に、一般世人は益々危険視し、真面目な業者すら敬遠されるに至り、大衆は益々鉱山智識に盲目になり、努めて之に遠去かる様になった。如何にこの「かなやまがたり」が我国鉱山開発の障害になったかという事がわかる。彼等は正に業界にとっては獅子身中の虫というべきだ。

明治・大正・昭和の初期迄はこの惰性の延長で「かなやまがたり」が絶えなかった。随って大衆も鉱山に眼をそむけて居た。・・・処が大戦以来一般に鉱山の重要性が認められ、一般大衆の関心も高まり、最近では政府当局も適切な施策を講ずる様になった事は誠に喜ばしい事である。

扱て、茲で明治末期から近年迄の鉱山師の真相の一端を、のぞいて見たいと思う。・・・勿論、既に基礎の固まった一連の鉱業家は別として、所謂「山師」と称されて居る者を対象としての話であるが、この「山師」と呼ばれる者の内にも、色々と毛色の変ったのがあって、大体次の6つに分けられる。

A. 純正事業家型 B. 一と旗組 C. 便乗型 D. 斜陽型 E. かなやまがたり F. 道楽型

A. 純正事業家型

鉱山の重要性を理解し、進んで之を研究し、多少の資力も信用もあり、予め若干の犠牲も覚悟の上で、敢然開発に乗り出し、着々事業化して行く人で、尤も望ましい型である。

此の型の人には慎重だから仲々失敗は無い方だが、仕事そのものが冒険性だから時に失敗がないとは限らない。・・・こういう人でも万一失敗すると、日頃チャホヤ御世辞を並べて居た金融業者が、真先にソッポを向いて仕舞う。・・・誠に惜しい事である。

B. 一と旗組

どうせコソコソと小銭を貯めて見た処で、つまらない。何かひとつ、でっかい仕事で一と旗挙げようという型で、山師仲間が一番多い型だ。・・・元気一杯向う見ずに突貫する。・・・

いきなり当る幸運児もあるが、多くは1, 2回は失敗を繰り返す。その内に経験も積んで来るが、同時に資金も行詰る。何とか挽回したいから借金せねばならぬ。・・・処が出資者は甘い事では資金を出さない。・・・自然苦しまぎれの方で、ウソも言い、ホラも吹く事になる。・・・茲で思慮の浅いものはヤケクソで、次に述べる「かなやまがたり」に転落する者も出来る。・・・

又気の弱い者は、せっかく良い山を持って今一と息で曙光を認める処まで来て居ながら、碌な借金も出来ずに手をあげて仕舞い、山師者という烙印を押されて没落するという気の毒なものも出来る。・・・

処が、イケづうづうしいのは、あく迄ホラを吹きまくり強引に資金を借り出してやりまくる。その内に「下手な鉄砲も数打てば当たる」で、どうにかウソから出たマコトが1つ当れば忽ちよい男になる。

C. 便乗型

常に政財界の有力者に入入りして、天下の大勢を注視し、木材・漁業・工業・開拓・鉱山、何によらず、時の政策に迎合する事業に参加し、巧みに官界金融界を遊泳して事業を推進する企業家型で、戦時中鉱業重点の空気と共に逸早く鉱山に進出し、国策会社成立を見るや、卒先之に参画して最大限に利用、随って作業量も大きく国策上重要な地歩を占めるに至る人々で、この型の人には鉱山で失敗はない。

損失は国が負うからである。・・・処で戦時中は国策遂行上、一般鉱山関係者の殆ど大部分は多少共国策会社に依存する事になった訳だが、真面目な者は兎に角遠慮勝ちであった中に、「一と旗組」の内の最も鉄面皮な輩は、あらゆる外交工作を弄してポロ山を種に強引に国策会社を喰い物にして「国策順応吾一人」といわんばかりに大言壮語し、平然として貴重物資の横流しなど横暴に振舞った悪質便乗組の跋扈したのは、実に苦々しい限りであった。

D. 斜陽型

表面堂々たる構えをして居り、老舗とか素封家とかいわれて居るが、失敗続きで内容ガタガタの人が、何とか人知れず儲けて、地位を維持したいと焦った末、一攫千金の夢を見て密かに鉱山に手を出す。

この型は一番危険な型で「かなやまがたり」の一番の好餌となる気の毒な型だ。この型の人に限ってコッソリやるのだから、権威ある技術者などの話を聞こうとしない。そこが又、悪ブローカーのつけ目だから、マンマとだまされて筋書通り裸になって眼がさめ、末はヤケクソの山師に没落する。

E. かなやまがたり

此型は土地・家屋・証券その他、はやりものなら何でも御座れの悪質ブローカーに多い型だ。・・・一般大衆に鉱山知識の無いのが彼等のつけ目だ。・・・鉱山斗りは山そのものの価値が未知数のものだから、間違っても「見込違い」の一語で逃げられる。

詐欺の種にコンな都合のよいものは無い。海千山千の詐欺師が之を見逃す筈がない。・・・鉱山熱が盛んになると早速鉱山師に早替りする。ウソは御手のものだ。相手によっては神様まで引張出して、不可思議の御利益を説いて陶醉させて仕舞う。・・・又、インテリと見れば、本職はだしの説明一席吹きまくって、兎に角巧みに金を出させる。

真面目な実業家でも説明が巧妙だから、遂乗せられて仕舞う事がある。ソシテ一度でこりて仕舞うから、今度本物が有望鉱区の相談を持って行っても「鉱山はもうこりた」という事になる。・・・その害毒は憎むべきものがあり、一番悪質の型だ・・・欲の深い相手には「山代ぐらいいは掘ってある鉱石を売った丈でお釣りが来る位だ」てな事をいうから早速引懸かる。然しこんなのは引懸かる方も悪い。それが事実としたら、永年苦労した山主から只取上げる事になる訳だ。こんな手に乗るからミイラ取りがミイラになる訳だ。

僕も或る年資金難の為、悪質とは知らず或るブローカーに金融の斡旋を頼んだ事があるが、出資者に面談の時に余り話が違うので、ありの儘の実情を説明した処が「ナーンだ、ソんなのかい、つまらないや」という事で、話がオジャンになった事がある。要するに正直では資金は作れないという事か。・・・

「憂かりける 人はハッター山かけて はめてくれとは 頼まぬものを」

(源俊頼朝臣 替歌)

F. 道楽型

「三度の飯より山が好き」という型で、「釣道楽」「狩道楽」「登山道楽」などと軌を同じくするもので、季節ともなれば魂が一と足お先に山に飛んで、仕事が手につかないという部類に属する。一面「砂金狂」と相通ずる型だ。

金儲けなどテンで問題にして居ない。・・・釣でも狩でも登山でも、道楽と名の付く以上、金儲けやる者は恐らくあるまい。之と同じ心理だ。・・・処が、釣や登山や狩道楽の人に向かって「儲かりますか」などという挨拶をする馬鹿はないが、鉱山道楽に対しては、必ずというてよい程「又金儲けかね」とか「そんなに儲けてどうする」とか冷半分の挨拶をする。考えて見ると、一攫千金の夢を追うて鉱山をやる者が大部分だから無理もないが、この型の人間の心理は全然別だ。宛も登山狂に「儲かるか」というのと同じで無性に腹が立つ。

「もろともに あわれと思え山男 山より外に 知る人もなし」

(前大僧正行尊 替歌)

若し財政さえ許せば、自費を持ち出して、年中無休で世界中でも探検して歩きたいのが最大の念願だ。仮りに賢明な投資家があって、この種の探検狂に惜し気もなく、道楽の費用を続けて呉れたとしたら、眠れる地下資源の開発が著しく促進されたであろうし、従って其後援者も大きな成功を収め得られた事と思う。

然し乍ら、その様な腹の出来た有力者はなかなかない。偶々腹の出来た人があっても金がない。金をタンマリ握っている程の者は、腹がない斗りでなく、鉱山と聞いただけでソッポを向くという冷たい世の中だ。

ソコで已むなく自分で道楽の費用を造らねばならぬ。結局発見した山を売って資金を造らねば道楽を続けられない。・・・処が発見した斗りでは売れない。厄介乍ら、誰でも判る様に、或る程度の探鉱試掘が必要となって来る。・・・

山道楽にとっては自分の手にかけた山は、我が子同然だから、之に美しい衣裳を着せて、嫁入支度をしてやる様な、試掘の仕事は勿論楽しい事ではあるが、問題はその経費である。・・・金融界からは閉め出され、一般市民からは白眼視されながら資金を造ろうというのだから、世の人の想像も及ばない苦勞がある。

無論、普通の金利などで出す者はないから、勢い目玉の飛び出る様な金利の外に、成功報酬が付く様な、辛い金を使う事になる。山が失敗しても借金は休みなく雪達磨の様に太って行く。仮りに順調に行って、二た山分の借金と報酬で、元金の何倍かを払う事になるから殆ど手に残らない。・・・

仕方がないから又借金して次の山を掘るという次第で、要するに此の型の山師の一生は資金の苦勞の連続で、時たま、会心の山の出現で僅かに慰められて暮らすという次第だ。・・・僕自身が此の型のサンプルだ・・・ソコで道楽型山師の実態見本として僕のこれ迄の行跡を要約して書き綴ってみる。

4 1. みみじの足跡

僕は20才から探検を始めたのだが、勿論無力だから商売で小遣いを造っては歩くという次第で、真に歯がゆい。其頃は「金と暇の心配なしに歩けたら、ドンナに素敵だろう」と夢の様に待望したもんだ。11年目の春に鴻の舞の売山配当で少しまとまった金が入った。

財産家にすればハシタ金だが、何しろ三文商人の青2才が今日の金で30～40万握ったのだから周囲から羨望の言葉と共に、あれこれと親切やら、おせっかいやら、縁談やら色々の話が出た。

如何に鉱山が飯より好きといい乍ら、僕も元より木石ではない。血の毛もあれば色気もあった。予てから意中の女性があったのだが、当時の世間は、結婚に対してはマダマダ固い旧式の殻を被って居た時代であった為、色々と係累のある縁談のあったのを一切断って穩忍の歳月を過ごして居た。

お陰で人並に忍ぶ恋路の切なさ楽しさも味った「あめつちに人の子ひとり、えらびては、たのしという日さびしと泣きぬ」という誰やらの歌が其頃の心境をよく表現して居る。

「ありあけの 蜜月の夢さめてより あかつきばかり 憂きものはなし」

(壬生忠岑 替歌)

其内に周囲の理解も出来て、旧習を破って恋女房を迎え、札幌にささやかなスイートホームを営んだ。

この辺で一寸周囲の長老の意見を容れて、5・6年も自重して、御手のものの商売に身を入れ、十分に財力を蓄積してから、再出発して鉱山に投じたら、よい男であったろうが、何しろ年も若いし思慮も浅い。

「これで当分山道楽が出来るわい」という風で、手当り次第山又山を探検し続けた。砂金掘と同じで、家を出たら帰る事を知らない。留守宅から電報が来ても、転々と歩き廻るので、「追尾、再送」で跡を追ってる内に半月もたってから手に入る、という始末で用件は既に跡のまつりという事も幾度か。

「たちわかれ 熊すむ山の奥にはいり まつとし聞けど 今はかえれず」
(中納言行平 替歌)

「夜をこめて 妻にたよりに書いたれど よに逢瀬は いつのことやら」
(清少納言 替歌)

秋ともなれば、奥山の夜はさすがにうらさびしく、そろそろに家郷を思う。
「きりぎりす 鳴くや霜夜の山小屋に ホダさしくべて 独りかもねん」
(後京極摂政前太政大臣 替歌)

「山に寝て 郷の妻子をしのぶ夜は 夢の通い路 一と目あうらん」
(藤原敏行朝臣 替歌)

満月の夜は又一としほ「辞家見月両面円、今夜不知何処宿」という王維の詩句など思い浮べて望郷の念しきりにおこる。

「天の原 ふりさけ見れば ふるさとの 藻岩の月に 出でし月かも」
(阿倍仲麻呂 替歌)

斯くして、来る年も又来る年も、山又山を馳け廻り、道楽を堪能して歩るいた。やがて2つ3つ試掘を始める様になると、忽ち財布が軽くなる。・・・きわどい処で一と山売って、又当分凌いで行く。・・・

こんなスリルを味って居る内に、愈々固定が多くなり財布も底をついて、借金を拵えはじめた。処が、世間では、鴻の舞の金がまだまだ物をいうてると、見てるので、一時の運転資金の操作だと思って、軽く考えて融資に応じて呉れた。

「山の金は 絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れて 尚聞えけり」
(大納言公任 替歌)

お陰で其頃は楽に借金が出来たのをよい事にして、調子に乗って手形乱発、借りまくって、どんどん手を上げたので、多忙を極め徹夜で仕事をする事も珍しくなかった。

「夜もすがら 山思う頃はあけやらで 眠る暇さえ つれなかりけり」
(俊恵法師 替歌)

其内にポツリポツリ売山も出来、若干の回収もついて行くが、借金で一杯だから、銀行の帳面を素通りする丈けだ。

「めぐりあいて 見しやそれともわかぬ間に 雲かくれにし 山のかねかな」
(紫式部 替歌)

扨て、試掘した山が皆成功して売れるなら天下泰平だが、そう、うまいわけには行かない。むしろ失敗する方が多い。

「心あてに 掘らばや掘らん立入の はずれた損は 白菊の花」

(几河内躬恒 替歌)

然るに世間では、隠れた損は知らないから、山を売る毎に又儲けた、又儲けたと、はやし立てる。

「もうけたと 我名はまだき立ちにけり 人知れずこそ 損もしけるが」

(壬生忠見 替歌)

思い廻らせば、幾度か纏まった金も手に入った事もある。賢明な男なら潮時を見て、フツツリと冒険をやめて、今頃は豪壮な邸宅を構え、相当な財産の上に安坐をかい、左団扇で居られたろうが、少々足りない処へ「狂」の字が付く程、山好きと来ているから問題にならない。・・・

金が入ったら最後「ソレツ」と斗り次々と山に突込み、自ら好んで奥山の仮小屋住居、汗と泥にまみれ、虻蚊にせめられ、借金と角力をとり乍ら、余計な苦勞を続ける。

「我俺は 深山の奥の熊ぞ住む 世にあら山と 人はいうなり」

(喜撰法師 替歌)

「みちのくの 忍ぶ苦勞も誰故に 山 見染めしに 我ならなくに」

(河原左大臣 替歌)

こんな調子で、向う見ずに盲進している内に、愈々借金で首が廻らなくなった。此様に秋風の身にしむ頃ともなれば、そろそろ年末の金繰りの苦勞で、頭の中がいそがしくなる。そこえ、財界の不況が手伝ったりすると二重の苦しみになる。

「かねつまり 山の秋風身にしみて ふところ寒く 心うつなり」

(参議雅径 替歌)

「くるしさに かねの工面に出て見れば いづこも同じ 秋のゆうぐれ」

(良暹法師 替歌)

「忍ぶれど 色に出にけり我債務 物や思うと人の問うまで」

(平 兼盛 替歌)

今更、愚にもつかぬ迷信沙汰でもあるまいが、苦しい時の神だのみ、つい奇蹟にも、すがりたくなる苦しさ。

「こがね山 峯の神々心あらば 今一度との 直りまたなん」

(貞信公 替歌)

月日に関守なく、年末は遠慮なく迫って来る。

「日はつまる 心せかる年の瀬は わけてもかねに 会わんとぞ思う」

(崇徳院 替歌)

「さてしもあらねばとて」意を決して金策に上京するが、仲々話がまとまらず、つられつられて思わず永滞在となる。山男には都会の永居が一番の苦が手だ。焦慮悶々、帰心矢の如く、思いは遠く山に馳せて、空を眺めて溜息ばかり。

「心にもあらで 都にながらえば 恋しかるべき 山の月かな」

(三条院 替歌)

辛じて年末ぎりぎりに、乏しい乍らも若干の資金を整えて、曲りなりに年を越す。此の様な状態で、年末の資金難を年中行事の様にして、幾年か繰り返している内に、天下の形勢窮迫し、物騒騒然として遂に我国建国以来の大困難大東亜戦争に突入した。

必然の要望として、軍需資材、金属資源の増産が叫ばれるに至った。・・・今こそ、産業報国の秋と大いに発奮して、一族郎党を従え、微力を総動員して猛然蹶起し、銅、鉄、クロム、水銀、手当り次第、性来の無鉄砲に愈々拍車をかけて猛然と邁進したが、悪戦苦闘の末、終戦と同時に満身創痕、遂に機能を失って後方に退陣するの已むなきに至った。「今はやや 絶えてなんばかりの火の車 人づてならで 廻すよしがな」

(左京太夫道雅 替歌)

「あらざらん 此世の外の思い出に 今一度との 成金もかな」

(和泉式部 替歌)

4.2. 終戦前後

太平洋戦争突入後、毎日の様に矢つぎ早やの輝かしい戦果発表で、国を挙げて戦勝に酔って居た頃、調子に乗って、当時南方開発株式会社の関係者であった友人と共同で、南方進出を計画し、少年時代からの夢の実現に狂喜陶酔して、先ず足掛かりとしてガム島の大酒精工場（椰子の水からウイスキーを製造）を引受ける事となり、同志の醸造技師を先発させ、「引継手続完了」の電報を受けて、早速現地に向うべく御用船を待ったが、幸か不幸か、現地に持参する荷物が出帆に間に合わず、次の便船に延ばすことにした。・・・

処が間もなく其船が太平洋上で撃沈されたという悲報が入り、次いで「今12航海模様を見る様に」と注意されて乗船を見合わせている内に戦況は日毎に悪化し、遂には便船も得られなくなったので、一応帰道した。

戦争の様相は愈々急迫を告げ、悲壮な決意を以って職域に死闘を続けたが、遂に開国以来の最大恨事、敗戦の苦杯をなめ、張りつめた意気も一瞬にして消滅し、虚脱失神の状態に陥った。

終戦直後、焦土と化した東京に出たが、食料に困って船橋に行き管理人東井君の処でさつま芋を貰って凌いだが、其時、平素静かな田舎の街道が、芋買出しの人々で押すな押すなの行列を為していたのに全く驚いた。

往復の途上、浅草の焼跡に立った時の光景・・・ああ、何たる悲惨な姿であろうか。飢えと絶望に打ちのめされ、夢遊病者の様に蹠蹠として廢墟の中を彷徨う空ろな眼、力なき蒼白き顔、顔、顔・・・日頃は豚も顔をそむけそうな怪しげな食料の暗売りに、腐った魚に集まる蒼蠅の様に、争うて群がる姿、・・・之を追いちらすお廻りさん・・・。将に餓鬼道の図絵そのまま、おぞましい光景である。

此の様なあわれな群衆の中で、元気溘刺、大声で大衆に呼びかけ乍ら、時を得顔に公々然と暗売りをやってる第三人・・・一方には指をくわえて之を眺める同胞のさもしげな顔・・・何たる情けない事か。噫々、

「戦い終りて後の世の中の変り果てたる様を嘆きて詠める」

戦いに破れし国の かなしさは 斯くこそあるか 在りし日の うるわかりし みくに
振り 影なく失せて 諸人は 皆ひたぶるに おのが身の やすきを願い さなきだに
乏しき糧を 狼の 争うがごと はらからも 親子もわかず 日も足らず せめぎ暮
らしつ 夜をこめて さまよい明かし こま人に もろこし人に 国内の たから奪わ
れ すべもなく もろ手こまねき うらめしげ うらやましげに 眺めつる おろかし

き顔 あなおぞましき その姿かも（昭和22年1月）

やがて米占領軍統治下に、我国の去精政策が実施された。先ず戦犯と言う珍妙な処罰で、1国の柱石千城と詎われた人々を「好ましからざる人物」と称して投獄し、旧憲法を破棄し、思想犯政治犯を開放して思想の混乱を策し、財閥の解体、農地の解放等が進められ、住宅難、失業、物資欠乏等と相俟って思想は極度に混乱し、一般良民は全く方途を失い、虚脱状態に陥った。・・・

反面、戦時中、時局便乗で表面巧みに国策同調を装い、影では非国民的行為をやって心ある者の顰蹙を買って居た程の狡猾、奸譎、狐の如く狸の如き輩は、逸早く暗商に早替りして我世の春と跋扈した。

僕は先祖代々、商人だから、暗商でなくても、商業を始める事は御手のもので、自信もあったが、性格上、やる気になれず、田舎に引込んで晴耕雨読、静かに時期を待った。

それから1年半で還暦を迎えた。続いて敗戦後2度目の正月。・・・世相はまだ混沌として居たが、気持ちは幾分落付きが出来た。明治思想で固まった石頭は、米国の惑乱政策では変わりそうにもない。

其頃の世相や、僕の頑迷さを知って貰うために、還暦記念に詠んだものを列記しておく。（漢詩などヒネル柄でないから平仄も何もあったものでない。勿論、詩になっていないのだから抒情文として、拙い辞句の陰ににじむ切々の感想を汲んで戴ければ望外の幸である。

◎敗戦後の心境を詠える

戦いの嵐に追われ 尾羽枯れて 地に陥りし 羽ぬけ鳥 ちからもぬけて 蔭のごと
おとろへながら 去にし日の 空もせましと 羽ばたきし 夢わすれかね 天翔けむ
願いを捨てず 羽がくれに 首根かしげて 青雲の棚曳く空を 白雲の飛びこうさま
を 日ねもすに 眺めくらしつ 夜もすから 物おもほゆる あまつ風 立つ日待ち得
て 大空に とばむとかする げにおろかしき 乱心かも（昭和22年1月）

◎迎新生式年之春有感

霹靂一声終戦詔 愕然墜落千仞壑 呻吟茲一年有半 滿身創痍未全癒
慷慨丹心猶烈々 今朝迎再生式春 雄心勃々不能抑 敢欲驅弊軀赴難
回頭世相轉寒心 贅衆趨利奸類驕 泣飢震寒者滿巷 樗櫟滿朝政不挙
朝令暮改徒混沌 何時成邦家再建 憶呼国破山河有 芙蓉依然東海天
昭和22年元旦 碧山

◎迎還暦

漫然醉生送歲月 今朝還暦始知齡 宿昔紅顏今何在 霜鬢寥寥明鏡裡
遮莫祖国会蒼桑 世相轉落不知停 国歩艱難轉寒心 八千余万蒼生奈何
可憐蝸集踟躕地 或者化餓狼争肉 或如泣飢喪家犬 踰踰漁糧徬焦土
豈端坐視酸鼻狀 炯々丹心不許逡 決然拋曆還紅顏 挺身欲策回轉業
昭和21年11月29 碧山

◎根室湾頭隔水原望千島有感

一衣帶水指呼裡 着鶴裳横国後島 翁山煙縷々不絶 綿々難断愛惜情
一億断腸悲憤淚 疑化水原擁比島
昭和22年2月 碧山

◎賦紋別港結氷

一眸千里白皚々 水原茫漠連天際 雲煙遙望羅白山 万波悉凍於克海
不知鯨鯨何処潜 徐待春風万里潮

昭和22年2月 碧山

拙文意をつくさず、わかり難い事と思うが、御賢誦に任せるとして、根室及び標津の文については、此年根室のコタヌカと紋別の親戚とに用が出来て、厳寒中彼の地に行った時、先ず根室で国後の「チャチャ山」の細々と昇る煙、雪に覆われた姿、之を何処へもやらじと包むかの様な氷を見て感慨無量、敗戦の悲しみを新たに筆を執ったもの。・・・

又紋別では、同じくオホツク海の氷原を見て「今は敗戦の苦杯をなめて、氷に閉された様に手も足も出ないが春風が吹き始めて氷が去ったら、悠々と万里の潮に乗って、大洋を庭先の池の様に泳ぎ廻って見せるぞ」と、同胞を鯨にたとえて気負って書いたものだ。今考えると真にあの頃のコチコチの頭に微苦笑を禁じ得ない。唾々。

扨て、大体戦時中の無茶がたたって、終戦と同時にペシャンコになり、再起不能と云う状態に陥ったに不拘、前期の様に意気込んで居るもんだから、戦後国内の秩序も回復し、独立も出来て、再建の槌音がたくましく響く様になった事も忘れて、アレヤコレヤと、出願して見たり探鉱の計画を立てて見たりして、結局自分では只焦慮するばかりで、どうする事も出来ず、自然会社に頼んだり友人に頼んだりして、日頃世話になって居る会社や知人に、徒らに失費迷惑をかけた事は、真に慚愧に堪えない次第である。

考えてみると至極当然な話だ。僕自身が探鉱を始めてからでも既に50年・・・「10年1と昔」の諺によると5つ昔と云う事になる。その間に鉱山熱が何回かあった。其度毎に猛烈に探鉱が進められて、簡単に分る山は大部分発見されて居る。残されたものは相当の探鉱費を投じないと、白い黒いの分からないものが主だと見ねばならぬ。

そこえ持って来て、戦後の経済情勢の急変と云う大きなハンディが付いて居る。はした金では何事も出来ない時代になって居る。・・・この様な判り切った事も考えず、昔米5升到小遣いの1000円もあれば1と山探検できた時のことを、夢見て居る様な石頭だから、結局人様に迷惑をかける結果になる訳で、要は最早微力の「リュックにハンマー」の吾々では、手に負えない時代になったと云うのが実相である。

顧みれば、吾々貧乏山師が長い間、一番危険率の高い「アラヤマ」に向って瀬踏みの役を引受けて、営業会社は之等の外数の山の中から「ホスコルド式」山価計算などの万全な評価によって、何百の中から選択して買取るのが定石となって居たものだが、今度はそんな安易な夢を見て居られなくなった。・・・

山師の手に負えなくなったと同時に、気の利いた山師は皆他業に転向した。やむなく営業会社がボツボツ第一線の「アラヤマ」探検から手を染める様になってきた。・・・正に探鉱会の一大転機である。

4.3. 今後の探鉱について

前章に述べた様に、営業会社が直接第一線に進出のやむなき状態になった訳だが、営利会社としては、既に経営中の山でも、営業の安全の為に、鉱床の変化に備え、山命延長を期する為に、終始相当額の探鉱費を投じつつあるので、其の上更に全くの投資に属

する「アラヤマ」探鉱の如き事は、運営上自ら限度がある。

而も残されたものは徹底的探鉱を要する難物が多いと見ねばならず。中途半端では意味を為さない。之は容易ならぬ問題である。扱てそれなら、一体まだ発見されない有望な資源があるのかと云う基本問題も出る訳だが、之は必ず有ると断言できる。

従来吾々微力な山師でも発見できたものは、開析が進んで被覆物の除かれた部分だけで、（勿論其後の地下探鉱によって露出してなかった部分も発見されては居るが全般から見て一部分に過ぎない）本道には、鉱床生成後溶岩流其他各種の被覆層に深く覆われて、開析の進まない幼年期の地域が非常に多い。

大ざっぱに考えても、既開発の分は半分以下ではあるまいか。・・・要するに、之等残された眠れる資源は、相当厚い布団を被って居て、思い切り徹底した科学的な器械及び技術を動員して決行を要する状態に置かれて居る。

勿論、「リュックにハンマー」組の出る幕でない。営利会社丈けに任して置くのも無理だ。將に国費を以て維持すべき時期だと思う。

由来地下資源の探査は、国がやるのが原則であるのに我が国では基本地質の調査すら遅々として進まない。国が自分の財産を知らないという馬鹿げた話はない。国有林野並に扱うべきであると思う。

そうなると、経営者は他の一般事業と同じく、至って安全に計画が進められ能率も大いに上がることになる。従来、吾々貧乏山師が質八おいて、国がやるべき仕事をやってきたのだから、ここで、本来の原則によって国が骨を折ってもよい時期ではなかろうか。・・・こんなことが吾々の年来の持論であった。

ところが、喜ばしいことに、戦後政界で地下資源開発を大きく採り上げてくるようになったので、空念仏でないことを祈っていたが、最近積極的に推進する方向に、ポツポツ具体策が法制化されるようになりつつあることは、真に会心の喜びである。

これは吾々多年渴仰の的であったが、このような政界の動きを見るに至ったのは、大戦がひとつの動機となったことは勿論だが、先覚諸賢の政府鞭撻があずかって力があつたと信ずる。

地方的に本道の場合は、憎まれ役を買って出て、要路に向い促々諤々の毒舌を振って、熱心に斯界のために奔走された、矢武氏、島田氏、舟橋氏その他の有志、並びに北大諸権威の熱誠に充ちた指導が大きな推進力となったことを信じている。茲に謹んで諸賢の御努力に対し感謝の意を表してこの章を終わることとする。

4 4. 井蛙痴語

僕の知人に日露戦争の勇士がおって、一杯呑むと武勇伝を一とくさり語った後に、きまった様に（満州の蠅酒の味を知らぬ奴は共に語るに足らん）と啖呵を切ったものであった。説明によると、当時の満州は蠅が名物で、一杯呑もうとすると、盃が真黒になる程蠅が群がって来る。これを気にしていると酒が呑めない。

ソコで蠅もろともに酒を呑んで、口腔の中で「チューツ」と酒を絞る様に飲み込んで蠅を吐き出すのだそう。日本の政界業界も蠅の多いこと、当時の満州を笑えた義理では無さそう。何かうまそうな問題があると、先ず政治屋蠅、利権屋蠅、ボス蠅、その他、もろもろの蠅が真黒に寄って来る。これを気にやむ様では何事も出来ない。やむな

く目をつぶって蠅もろとも、小便くさい酒を呑む事になる。

その時代時代に応じて世論を反映した政策が立法化される前に、既にこれによって恩恵を受ける態勢を準備してかゝるのだからかなわない。・・・

一例を挙げて見ると明治、大正にかけて政治屋、利権屋連中に依って盛んに行われた所謂「山取り運動」でわかる様に、先ず、本道の開拓促進に民間の遊資活用と云う、常に予算不足になやむ政府にとって、一石二鳥の名案が立法化され、自力開発可能者に対して、大地積の未開地払下げが行なわれる事になると、予て待機中の連中が、合法的にこれを手に入れて、先ず第一番に最も甘味のある立木を喰ってその残粕の土地が真面目な農場経営者及び牧場経営者に転売される。

次に好餌が無くなった頃に、今度は「不要林払下」法を作って、大地積の国有林解除払下げが実行され、アタラ美林が次々と荒されて行った。処が、永い年月のことだから色々経済情勢の変化もあって、是等の乱伐跡の土地の処分がつかず、反別割の負担も馬鹿に出来ぬ様になった処で、又々別法を考え出して「民有未墾地買上」と云う珍法に依って、厄介物を政府に売り付けて、大いに道開拓に協力したと云う涼しい顔で治まって居る。

一方、零細農は荒地を買受けて「豚と一とつ鍋」の苦勞を忍んでこれを開くと云う訳で、結局本物の開拓者は、いつも小便くさい蠅酒を呑まされた次第である。

国運を賭しての大戦時でさえ、緊急要望によって生れた各種の施策（国策会社など）にからんで、ワンサと集った蠅共の我物顔に喰い荒した有様は、今も尚記憶に生々しい。

終戦後、世論も一大転換を見て、蠅の活動も大分静かになった様だが、売春汚職など云う珍型が出た。蠅も愈々情けない処まで下ったもんだ。

明治の初頭、星亨が国費濫費を反対党から攻められた時、「一国の運命をあずかる国務大臣が国家の為に国費を自由に使って何処が悪いか」と大見得を切った昔を思えば、何んと、今の蠅共のミミッチイ事、将に愧死すべきであろう。

日露戦争から既に半世紀、聞く処によれば、満州は中国の画期的な施策によって、全く面目を一新したと云われる。・・・顧みて、果して恥なきを得るだろうか。アー誰か早く DDT を撒いて呉れ！

4 5. 探鉱四季

「春」

探検には何と云うても春が一番好適だ。余り早いと残雪の為に無駄足を踏む事もあるが、本道は夏が短いから、努めて早春、雪のむら消えの頃から出かけて、雪の消えた処から順々に調べて廻る。日向の斜面に福寿草が咲き乱れ、あちこちの山に桜のほころび始める頃は、特に快適である事は申す迄もない。陽気はよし、虫は居らず、草は短く日は永し。秋の三倍能率が上る。

急斜面の崖崩れの様な処では、厳冬中に凍結のため浮上った土や岩片等が、春の陽気でとけると同時にパラパラと崩れて、新らしい面を露出して呉れる為、思わぬ手掛りを得るのもこの好季節の景物である。

「久方の 光りのどけき春の野に しづ心なく ヤケのこぼるる」

（紀 友則 替歌）

「夏」

本道の夏は、内地から避暑に来る位だから、暑さは大して苦にならないが、虫がうるさいのと、草が深く蔓物がはびこり、木の葉が繁って見透しが利かず、何彼と苦勞するが、然し何と云うても、日も永し、夏の方が有難い。虻蚊にせめられ、汗びっしょりで宿舎に帰って、野天風呂で汗を流し、サッパリした肌をそよ風になぶらせ乍ら夕涼みの爽快感は、夏ならではの、山ならではの天恵だ。・・・左のいける人なら、やまべの塩振り焼きで、谷川に冷したビールの満を引くとなると又格別、天下泰平だ。

「風そよぐ 山の川辺の野天風呂 湯あみぞ夏の しるしなりけり」

(従二位家隆 替歌)

「秋」

草も枯れ、木の葉も疎らになり、見透しも利いて、暑からず寒からず、カラリと晴れた秋晴れの日など、山歩るきに絶好のこともあるが、何と云うても雨が近く、日が短かく、朝夕は霧が多いなど、春の様な訳には行かず能率は上らない。晩秋ともなれば、冷え冷えとして石をたたくハンマーの音も心なしか、何となくさびしげに、こだまする。

「奥山に 紅葉ふみわけ 打つ槌の音さえ渡る 秋ぞかなしき」

(猿丸太夫 替歌)

又初秋の頃から、しばしば見舞われる村雨のあとに、霧の舞い立つ模様によって、思わぬ露頭や旧坑などを発見する事もある。

「村雨の 霧もまだひぬ 山の端に 霧立ちのぼる 焼けの夕ぐれ」

(寂蓮法師 替歌)

「冬」

冬は野外探鉱は不可能で、主として坑道のある山を見て廻るのが主な仕事だが、茲に一つだけ冬でなければならぬ仕事がある。ソレは夏季中では容易に跋涉出来ない処の踏査で、全般的な地形を調べ特に雪中でも目立つ様な突起した岩石及び崖の所在等を確めて、来るべき夏季の探検の参考とする仕事だが、これは冬期雪上に限る。

二月から三月一ぱいに決行する。・・・幸いに快晴に恵まれて、好適なスロープを迂り、又山頂から一望千里、微塵を止めぬ白一色の荘厳な山々の絶景を眺める時は、全く羽化登仙の思いに浸って恍惚となる事もあるが、反面猛吹雪に会ったら全くみじめなものだ。・・・

息も止められる程の強風で雪をたたきつけられると、視野が全然利かない。足がはかどらない。夕ぐれが迫る。あせる、疲れる、ソコえ睡魔が襲って来たらおしまいだ。・・・

僕も始めは、夢中で歩いて、危うく千仞の谷底に落ちそこねて胆を冷やしたり、とろ下りの地形と誤認して、滑降をやって滝壺に落ち、這い出すのに一時間もかかったり。・・・

又同じコースをぐるぐる廻って、疲労の末眠む気を催し凍死寸前に辛じて造材小屋に辿り付き、夜が明けて見ると、それが前日昼食に休んだ小屋だった。・・・などと云う失敗を繰返したものだ。

老練の猟師に次の様な事を教えられたことがある。即ち、ひどい吹雪に逢ったら、歩るいても無駄だ、身体を疲れさせるばかりだ。極度の疲労が一番危険だから、身体の疲れぬ内にサッサと雪穴を掘って、風の静かになる迄休む事だ。疲れぬ内なら、朝迄籠城して居ても凍死などの心配はないと。

爾来、その教えを実行した。松の小枝で上を覆うてシャガンで居ると案外暖かい。時々、

ストックで穴をあけて外の様子を伺い、風がおさまったら這い出す。時には仲々風が治まらず、翌日の昼近くまで籠ったこともある。ソナ時は穴の上に三尺近くも雪が積った事すらある。

4.6. 科学振興と未利用資源探査

満州の蠅の話をしたが、こうした反面には科学振興の様な根本的な重要施策に対しては、理由はわかって居乍ら、先覚、識者の熱心な叫びにも拘らず、蠅の喰い物にならないから一向に進展せず、逆に国の為すべき研究まで民間業者の研究所に依頼すると云う有様で、一部の国の研究所及び学園、民間等の可惜技術者は、乏しい予算や蚊の涙ほどの奨励金、補助金などでお茶を濁され、資金不足に悩まされ脾肉の歎をかこち乍ら、真摯な態度で研究に没頭している涙ぐましい姿は、真に貴くも又気の毒な次第である。

最近ミサイルだ、宇宙だと叫ばれる様になって、ようやくモヤモヤと政府が動き出す気配になった様だ。聊か「喧嘩すぎたの棒切れ」の感が無いでもないが、やらないよりはまだから、大英断で三〇年の遅れを取り返す意気込を以て画期的な施策が望ましい。

そもそも科学の振興の為に最も重大な必要条件は、研究者に絶対の自由を与える事だ。資材に費用に、その他一切の事に絶対自由を与えて、彼等の考えた事は勇敢に即時実験し得る態勢を整える事である。

斯くして技術者が専心研究に没頭し得る処に、始めて彼等の持つ処の無限大の力が発揮され、そこに無用の長物として無尽蔵にある物質が貴重な資源に変わったり、又限りある資源を無尽蔵に増やしたりする魔法も生れて来るであろう。

中途半端な施策でお茶をにごし、研究者が終始資材資金の欠乏におびやかされて居たのでは、百年河清を待つに等しい。・・・強力な施策を要望する所以である。

これと併行して科学の一部門として、あらゆる人材、新鋭機材を動員して、地下資源の開発を推進しなければならない事は云う迄も無い。・・・

若し徳川時代に石灰や瓦斯で衣料を織り、食器や家具を造り、ビニールの袋に水を湛えて金魚を泳がせて持歩き、テレビで千里先の事を見聞させたら、将に魔法以上で、忽ち打首になるであろう。

今日吾々は、大分偉くなったつもりで「自然を征服した」などと自負して居るが、宇宙は無限の秘密の宝庫であり、吾々の知り得た範囲は将に暗夜に提灯をともして身のまわりの僅かな部分の有様を、おぼろげに見て居るに過ぎないと云う事を忘れてはならない。今後の努力によって、今日未知に属する事柄から如何なる事が出現するか、予測を許されないのである。

従って、地下資源の探査も、今日では最早金銀銅鉄などの、ありふれた目標の時代ではない。従来既知の資源探査も勿論大切ではあるが、更に限界を拓けて、あらゆる稀鉱物は元より、一見無用の長物と見える物まで、悉くその賦存状態を調べ、且つこれを利用する場合の経済的採取方法まで研究して、科学の進歩に伴って生れ来るべき新しい未利用資源開発に即応の体制を整うべきである。

近来政府当局も地下資源開発に色々の施策を行う様になった事は真に喜ばしい事であるが、在来の補助、融資機関の様に、蠅の餌になる様な方法は、もうこりごりだ。飽く迄徹底した国営の調査機関によって強力に推進し、業者の経営に安全な拠点となる様な

資料を造って貰いたいものである。

47. 老いの線言

思えば永い苦難の探鉱生活であった。・・・「人間は十の内九つの苦しみがあっても、たった一つの楽しみにまぎれて、苦勞を忘れて暮すものだ」という言は僕の人生行路の跡を物語って居る様だ。・・・

好きな道とは云い乍ら、撰りに撰って難事業と取り組んで、あの山だ、この山だと、自らの苦勞の種を求めて夢中で日を送って居る内に、いつの間にか爺々となり、恋女房も霜を頂く婆々となった。「緋鹿の子の嫁も婆々となりにけり」か呵々。

「花の色は うつりにけりな 徒らに 四方の山々 ながめける間に」

(小野小町 替歌)

世の中には父祖の築いた礎石の上に、殆ど苦勞も知らずに、順調に発展をとげた、恵まれた人々も多いが、又一面、貧困から身を起して一代の成功者となった、立志伝中の人々も沢山ある。僕も後者の内には入り得る境遇に置かれて居た。

而も他の成功者は苦難と戦い抜いて成功を収めているのに、僕は自ら撰んだ好きな道で楽しみ乍ら、幾度か、この道では容易に得難い、人の羨む程の資金を握った事があった。思えば真に幸運の方であった。・・・にも拘らず、所謂「浮いたかひょうたん」で、次から次へと、山につき込んで仕舞って、老境に入って一朝病にたおれた途端に、赤貧洗うが如く、有るものは借金ばかりなりと云う徹底した無軌道ぶり、吾ながら呆れざるを得ない。

発病の直接原因は、昭和三〇年に社用で出張中、出先で「日高十勝の国境山脈に於いて、優勢なる高品位瀝青ウラン鉱の一大鉱脈発見」と云うニュースを聞き込んだ。

当時、国内不足資源として干天に雲霓を望む如き待望の問題だけに、ソレツとばかり、矢も楯もたまらず、そのまま出張先から驥足を延ばして、折からの荒天も物かわ、三〇代(?)の元気で腰まで川水に浸り乍ら、ガムシャラに駆け廻り、その結果、全然得る処なく、張りつめた意気も忽ち消沈、疲れきって帰った途端に卒然として病魔の犯す処となった。

兎に角、放置すれば死を待つばかりで、結局会社の方々の同情にすがって入院加療、一命を取りとめた。

年来会社の方々には、幾度か老後の事について、懇切な注意及び取計いを受けたに拘らず、丁度「吞兵衛の禁酒」と同じで、何時の間にか「破れ衣」となって「さあついで呉れ、ついで呉れ」と云う調子でのんびりと暮らして来た結果、最後には命までついで貰ったと云う次第で顧みて甚だ慚愧に堪えない。

「人間万事塞翁が馬」と云うから、大総は運命であろうが、然し乍ら、人には誰でも一生の間に一度や二度は何等かの形で幸運に出会う機会があると云う。要するにその幸運を機敏にガッキと受け止める人と、雲烟過眼ウカウカと折角の幸運を逃がす様な、ボンクラ頭との脳味噌の相違が大きく運命を左右するものらしい。

僕は人一倍この幸運の機会に何回となく恵まれて居乍ら、この状態である。あの時は・・・、この時は・・・と後悔は綿々として尽きない。

自分は自業自得で致し方ないが、永年の間親身になって支持して呉れた先輩、友人な

どに何の報ゆる処もなく又、手となり足となって協力して呉れた肉親の甥や、多勢の部下にも、何の世話も出来ず倒れた事は真に遺憾に堪えない。

「老い込みし 今の心にくらぶれば 昔は 物を思わざりけり」

(権中納言敦忠 替歌)

「月見れば 千々に昔の偲ぼるる 我身ひとつは もとのもくあみ」

(大江千里 替歌)

今茲に、会社の人々の恩情に浴し、先輩知人の慈眼に護まれ乍ら、感涙にむせびつつ予後の静養中、静かに過ぎこし方を顧みて、アノ山、コノ山、夢は曾遊の地馳け巡って、それからそれと追想果てしない。一度汗を流した山々は何時になっても懐かしい思い出の種である。

「何も彼も なつかしきかな山里は 松も むかしの友ならなくに」

(藤原興風 替歌)

特に「鴻の舞」とか「下川」の様に、隆々と栄え行く山の盛況を見る事は、我子の出世を見る様に、涙ぐましい喜びであると共に、これ迄成功させて呉れた経営陣の人々の並々ならぬ苦勞に対して、真に感謝に堪えない。

「いにしへの 麗熊の里の黄金花 今日とは都と 栄えぬるかな」

(伊勢大輔 替歌)

顧みれば本道の地下資源探鉱も真に歯がゆい。遅々たる牛の歩み乍ら大戦前からは相当に開発された。然し、不便な山奥には、まだまだ空しく眠って居るものもあろう。又、時代のズレや技術の差などで、旧坑跡の遺利もある事であろう。

「世の中よ 道こそなけれ思い入る 山の奥にぞ 宝眠れる」

(皇太后太夫俊成 替歌)

「百敷や 古き楯打掘あとに 尚あまりある 黄金白金」

(順徳院 替歌)

然し乍ら、今日残されたものは、何れも相当に犠牲を要する状態に置かれている。のみならず、科学に、経済に、時代は実に大きく変わった。最早リュックにハンマー米5升の時代ではない。

而も科学の進歩によって要望される資源も次々と変りつつある。この際、独り在来の金属に限らず、あらゆる未利用資源も含めて、斬新な科学陣を推進強化し、その粋を動員して、国家の眠れる財産たる処の地下資源を、今こそ協力に徹底探査すべき時であると信ずる。

48. 表彰のこと

昭和三二年秋、菊花かほるの頃、北海道知事及び札幌通産局長から表彰状を戴き又翌年更に北海道鉱業会から表彰された事は僕一代の何物にも替え難い光栄であった。

何一つと専門の学識もなく、只「一片の丹心」と「飯よりも好き」と云う二つの気持ちより外に持ち合せない一介の阿蒙、元より何の為す処ある筈がない。・・・

折にふれ専門の技師その他先輩諸賢から御教示を受け、「阿呆の一とつ覚え」で是迄覚束ない足取りで歩るいて来た。・・・顧みて冷汗三斗の思い出ばかりで、表彰など思い

も寄らない事である。

偏えに先輩諸賢御推挙の賜と深く感謝する次第である。

「小春日に面映ゆ気なる野菊かな」

それにつけても、一日も早く健康を回復し、捲土重来の活躍を試みて、諸賢の御期待に添いたい気持ちで一杯である。

「山のため 惜しからざりし命さえ ながくもかなと 思いけるかな」

(藤原義孝 替歌)

「ながからむ 心も知らずいたつきに なやみて けさは 山をこそ思え」

(待賢門院 替歌)

「山々の夢ばかり見て 病める身の 甲斐なくたたむ 月日惜しけれ」

(周防内侍 替歌)

意識 焼けを探ねて五十年

著 者 へるふね

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
